

長岡京右京二条三坊九・十六町跡、上里遺跡

2006年

財団法人 京都市埋藏文化財研究所

長岡京右京二条三坊九・十六町跡、上里遺跡

2006年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できるとなります。

このたび道路新築工事に伴う長岡京跡・上里遺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

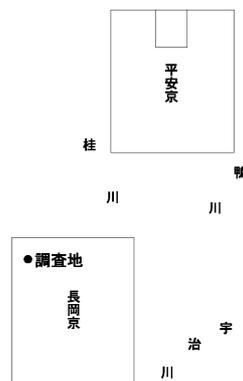
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます次第です。

平成18年7月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 遺 跡 名 | 長岡京右京二条三坊九・十六町跡、上里遺跡
長岡京右京第850次調査（7AN UKW・UMI・GKR地区） |
| 2 調査所在地 | 京都市西京区大原野上里南ノ町地内・長岡京市井ノ内北裏 |
| 3 委 託 者 | 京都市 代表者 京都市長 榊本頼兼 |
| 4 調査期間 | 2005年6月17日～2006年6月9日 |
| 5 調査面積 | 5,478㎡（A区：2,386㎡、B区：2,552㎡、C区：540㎡） |
| 6 調査担当者 | 上村和直・南出俊彦・モンペティ恭代・ト田健司・長戸満男 |
| 7 使用地図 | 図1は、国土地理院発行の1：50,000地形図「京都西南部」を参考にし、作成した。図5は、京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「石見」「寺戸」「粟生」「向日町」を調整して使用した。 |
| 8 使用測地系 | 日本測地系（改正前）平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 13 遺物番号 | 通し番号を付し、挿図・図版番号も同一とした。 |
| 14 写真撮影 | 村井伸也・幸明綾子が担当したが、一部については調査担当者が撮影した。 |
| 15 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 16 遺物復元 | 村上 勉・出水みゆき |
| 17 本書作成 | 上村和直・南出俊彦・モンペティ恭代・ト田健司・山口 眞 |
| 18 執筆分担 | 1・2・3-(2)・(3)：モンペティ、3-(1)・5-(1)：南出、4：上村・山口、5-(2)：ト田 |
| 19 編集・調整 | 児玉光世 |



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査の経緯	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査経過	1
2. 遺 跡	3
(1) 遺跡の位置と環境	3
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	10
(1) 層序と遺構の概要	10
(2) 古墳時代の遺構	11
(3) 奈良時代・長岡京期の遺構	20
4. 遺 物	33
(1) 遺物の概要	33
(2) 土器類	33
1) 古墳時代の土器	34
2) 奈良時代・長岡京期の土器	43
(3) 瓦類	51
(4) 木製品	51
(5) 金属製品	52
(6) 石製品	52
5. ま と め	54
(1) 古墳時代の遺構	54
1) 集落の変遷	54
2) 集落の範囲と墓域	55
(2) 長岡京期の遺構	56
1) 条坊について	56
2) 宅地について	56

図 版 目 次

図版1 遺構 古墳時代遺構平面図1 (1:200)

図版2 遺構 古墳時代遺構平面図2 (1:200)

- 図版3 遺構 古墳時代遺構平面図3 (1:200)
- 図版4 遺構 古墳時代遺構平面図4 (1:200)
- 図版5 遺構 古墳時代遺構平面図5 (1:200)
- 図版6 遺構 長岡京期遺構平面図1 (1:200)
- 図版7 遺構 長岡京期遺構平面図2 (1:200)
- 図版8 遺構 長岡京期遺構平面図3 (1:200)
- 図版9 遺構 長岡京期遺構平面図4 (1:200)
- 図版10 遺構 長岡京期遺構平面図5 (1:200)
- 図版11 遺構 1 A-1~3区古墳時代〔I期〕全景(東から)
2 B・C区古墳時代〔I期〕全景(西から)
- 図版12 遺構 1 A-1区竪穴住居7(北から)
2 A-1区竪穴住居56(北東から)
- 図版13 遺構 1 B区竪穴住居1296(北東から)
2 A-1区竪穴住居30・31(北から)
3 A-1区竪穴住居551(北から)
- 図版14 遺構 1 B・C区溝2056と竪穴住居1296(北東から)
2 B区溝2056セクション(東から)
- 図版15 遺構 1 A-1区古墳時代〔II期〕全景(東から)
2 A-1区掘立柱建物11(北西から)
- 図版16 遺構 1 A-1区掘立柱建物299(北東から)
2 A-1区掘立柱建物326・329(北西から)
3 A-4区掘立柱建物705(北西から)
- 図版17 遺構 1 A-1・2区长岡京期全景(西から)
2 B・C区长岡京期全景 長岡宮を望む(西から)
- 図版18 遺構 1 A-3区掘立柱建物238(西から)
2 A-1区掘立柱建物269(西から)
- 図版19 遺構 1 B区掘立柱建物1106・柵1103(西から)
2 B区掘立柱建物1156(北から)
- 図版20 遺構 1 B区掘立柱建物1139(西から)
2 B・C区掘立柱建物1283・2028(西から)
- 図版21 遺構 1 B区掘立柱建物1283:柱穴1224(北から)
2 B区掘立柱建物1283:柱穴1283(北から)
3 C区掘立柱建物2028:柱穴2028(西から)
4 C区掘立柱建物2028:柱穴2033(北から)
5 C区掘立柱建物2028:柱穴1282礎板出土状況(北から)

- 6 C区掘立柱建物2028：柱穴2026礎板出土状況（北東から）
- 図版22 遺構 1 A-1区井戸43（北から）
2 A-1区井戸43板組状況（北西から）
3 A-3区土壇488（北から）
- 図版23 遺構 1 B・C区溝1020・柱穴列2011・溝4（南東から）
2 C区溝4・柱穴列2011・溝1020（西から）
- 図版24 遺構 1 A-1区溝4（西から）
2 A-1区柵280（北から）
3 A-3区河川487（北から）
- 遺構 1 B区河川1085（北から）
2 B区河川1200（北から）
- 図版26 遺物 河川487出土土器
- 図版27 遺物 河川487出土土器
- 図版28 遺物 井戸43出土土器
- 図版29 遺物 軒丸瓦・斎串・鉈尾・管玉・勾玉・チャート剥片
- 図版30 遺物 1 掘立柱建物2028：柱穴2028出土柱根
2 掘立柱建物2028：柱穴2033出土柱根
3 掘立柱建物2028：柱穴1282出土礎板
4 掘立柱建物2028：柱穴2026出土礎板

挿 図 目 次

図1	長岡京と調査地点図（1：50,000）	1
図2	調査前全景（北東から）	2
図3	作業風景（北東から）	2
図4	調査区配置図（1：1,500）	2
図5	今回の調査地と周辺の調査（1：5,000）	6
図6	調査区土層模式図	10
図7	竪穴住居7・30・31・56実測図（1：100）	12
図8	竪穴住居96・126・357・551実測図（1：100）	13
図9	竪穴住居1296実測図（1：100）	14
図10	掘立柱建物11・299実測図（1：100）	14
図11	掘立柱建物326・329実測図（1：100）	15
図12	掘立柱建物374実測図（1：100）	16

図13	掘立柱建物385実測図（1：100）	16
図14	掘立柱建物705実測図（1：100）	17
図15	溝2056・2063断面図（1：100）	18
図16	河川487断面図（1：100）	18
図17	河川1085・河川1200断面図（1：100）	19
図18	掘立柱建物238実測図（1：100）	20
図19	掘立柱建物269実測図（1：100）	21
図20	掘立柱建物1106・柵1103実測図（1：100）	22
図21	掘立柱建物1139実測図（1：100）	23
図22	掘立柱建物1156・1299実測図（1：100）	24
図23	掘立柱建物1283実測図（1：100）	25
図24	掘立柱建物1311実測図（1：100）	26
図25	掘立柱建物2028実測図（1：100）	27
図26	柵280実測図（1：100）	28
図27	井戸43実測図（1：50）	29
図28	柱穴列2011・溝4・溝1020断面図（1：50）	30
図29	土壙1252実測図（1：50）	30
図30	土壙488実測図（1：20）	31
図31	土壙350出土土器実測図（1：4）	34
図32	溝2056出土土器実測図（1：4）	35
図33	溝2063出土土器実測図（1：4）	36
図34	河川487下層出土土器実測図1（1：4）	37
図35	河川487下層出土土器実測図2（1：4）	38
図36	河川487下層出土土器実測図3（1：4）	39
図37	河川487下層出土土器実測図4（1：4）	40
図38	河川1085・1200下層出土土器実測図（1：4）	41
図39	井戸43出土土器実測図（1：4）	42
図40	土壙488出土土器実測図（1：4）	43
図41	土壙1038出土土器実測図（1：4）	43
図42	土壙1132出土土器実測図（1：4）	44
図43	土壙1252出土土器実測図（1：4）	45
図44	土壙1328出土土器実測図（1：4）	46
図45	河川487上層出土土器実測図（1：4）	47
図46	河川1085上層出土土器実測図（1：4）	49
図47	河川1200上層出土土器実測図（1：4）	50

図48	河川1200出土軒丸瓦拓影・実測図（1：4）	51
図49	井戸43出土斎串実測図（1：4）	51
図50	井戸43出土曲物実測図（1：20）	51
図51	金属製品実測図（1：2）	52
図52	石製品実測図（1：1）	53
図53	古墳時代遺構変遷図（1：1,500）	54
図54	九町北中央部時期別建物概略図（1：1,000）	57

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	7
表2	遺構概要表	11
表3	遺物概要表	33

付 表 目 次

付表1	土壙350出土土器一覧表	59
付表2	溝2056出土土器一覧表	59
付表3	溝2063出土土器一覧表	60
付表4	河川487下層出土土器一覧表	60
付表5	河川1085・1200下層出土土器一覧表	63
付表6	井戸43出土土器一覧表	63
付表7	土壙488出土土器一覧表	64
付表8	土壙1038出土土器一覧表	64
付表9	土壙1132出土土器一覧表	64
付表10	土壙1252出土土器一覧表	65
付表11	土壙1328出土土器一覧表	65
付表12	河川487上層出土土器一覧表	66
付表13	河川1085上層出土土器一覧表	68
付表14	河川1200上層出土土器一覧表	69

長岡京右京二条三坊九・十六町跡、上里遺跡

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、京都市建設局街路部街路建設課による、I・II・3伏見向日町線道路新築工事に先だって実施したものである。調査は長岡京右京第850次調査（R850）にあたる¹⁾。調査地は、京都市西京区大原野上里南ノ町地内および長岡京市井ノ内北裏に所在し、関連する調査として2003年度に、本調査地の西側で当研究所が調査（R772・775）を実施した。

(2) 調査経過

調査目的 調査地は、長岡京の条坊復元推定によると、右京二条三坊九・十六町にあたり、さ

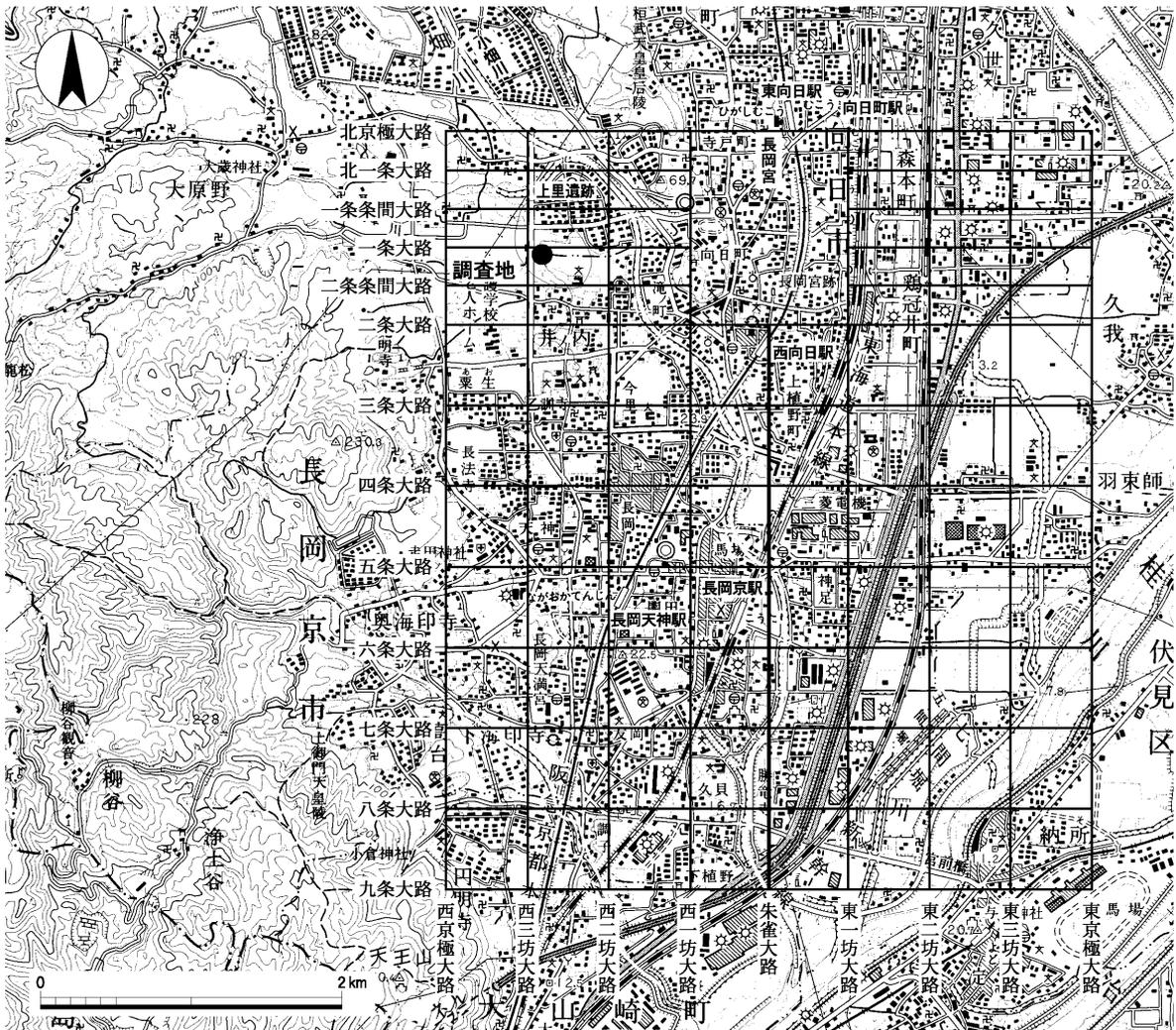


図1 長岡京と調査地点図（1：50,000）



図2 調査前全景（北東から）



図3 作業風景（北東から）

らに一条大路・西三坊大路・西三坊坊間西小路が含まれ、調査はこれらの遺構の検出を目的とした。また、縄文時代から中世に至る遺跡である上里遺跡²⁾とも重複することから、これらの遺跡解明も目的の一つである。

調査範囲 調査対象地域は、2003年度伏見向日町線の調査地（R772）から市道3048号線（通称文化センター通り）を挟んだ東側の水田地帯で、道路予定地の南北幅約32m、東西約220mの範囲、面積約7,000㎡である。

調査経過 調査に際しては、事前に周辺の農道・水路などの保全対策・管理などを行った。次いで、重機・大型車両のための仮設道を、調査対象地域内南側に幅5.0mで造成した。調査区は、排土置場を考慮して、A区・B区・C区の一部に分けて設定した。

A区 市道3048号線からすぐ東に南北幅約20m、東西約100mのA区を設定したが、地形に合わせて西からA-1区・A-2区・A-3区と分けた。8月17日よりA-1区から重機掘削を開始し、東へ順次進めた。耕作土・床土を排除した状況で、長岡京期・古墳時代の遺構を同一遺構面上で検出した。まず長岡京期の遺構の調査を行い、一条大路南側溝・井戸・掘立柱建物などを検出し、全景写真撮影・実測等の記録作業を実施した。その後、古墳時代の遺構を調査し、掘立柱建物・竪穴住居などを検出した。11月12日には現地説明会を開催し、成果の公開に努め、約130名の参加があった。その翌週には、A区古墳時代の遺構の全景写真撮影・遺構実測を実施した。なお、

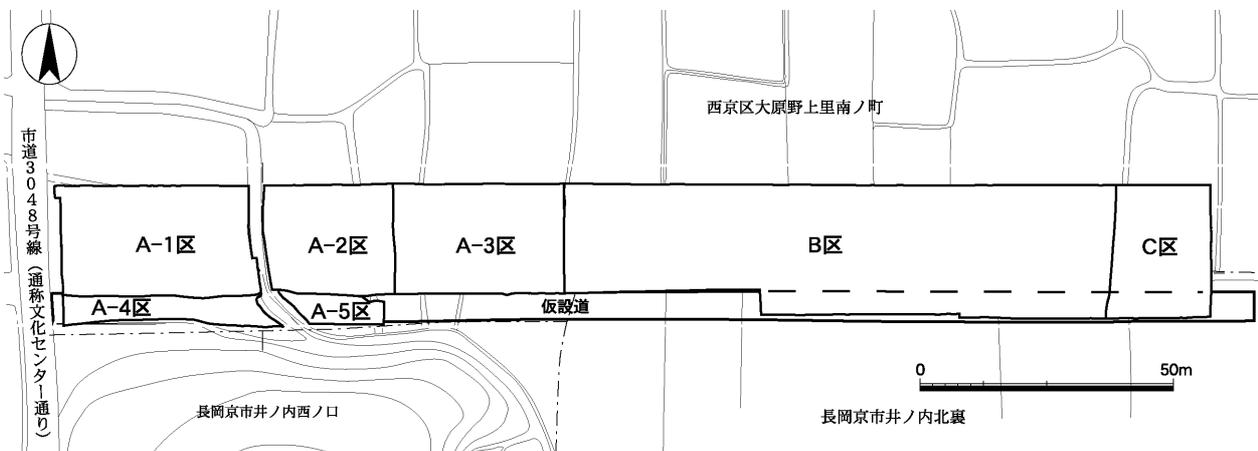


図4 調査区配置図（1：1,500）

A-1区の土壌350については、水田かどうかを確認するため、(株)古環境研究所に依頼して、土壌の自然科学分析を行った。A-1・2区調査では遺構が南へ広がるため、A-1～3区調査終了後、仮設道部分であったA-4区およびA-5区を拡張して調査を行った。1月25日にA区の埋め戻しを完了した。

B・C区 2005年11月21日より幅約22m、東西126mのB区・C区の一部を設定し、重機掘削を開始した。B区・C区でも、A区同様、耕作土・床土を排除した状況で、長岡京期・古墳時代の遺構を同一面上で検出した。B区西側・C区では遺構が南に広がるため、仮設道を撤去し、調査区を南へ拡張した。まず長岡京期の遺構を調査し、当該期の遺構を良好に検出した。2006年2月11日には現地説明会を開催し、約160名の参加があった。2月22日には長岡京期の遺構の全景写真撮影を実施した。実測の後、古墳時代の遺構の調査を行い、竪穴住居・溝などを検出した。古墳時代の遺構の全景写真撮影・実測を実施した後に、断割りなどの補足調査を実施した。この後、埋め戻しを行い、2006年6月9日にすべての作業を終了した。

註

- 1) 長岡京の調査回数については、長岡京連絡協議会によって、調査回数の前に、宮はP、右京はR、左京はLを付し、通し番号で表すこととなっている。本書もこれに準ずる。
- 2) 『長岡京市遺跡地図』平成3年版 長岡京市役所 1991年では、縄文時代から平安時代の集落跡となっている。また、『京都市遺跡地図台帳』平成15年版 京都市文化市民局 2003年では、平安時代から室町時代の集落跡として登録されている。

2. 遺 跡

(1) 遺跡の位置と環境

地理的環境 調査地は、西山丘陵から東へ派生した低位段丘と、小畑川により形成された氾濫原沖積層との間に立地する水田地帯である。南側の低位段丘は竹林を形成し、東には南北に横たわる向日丘陵を見渡し、北方約600mには善峰川と小畑川の合流点がある。標高は西で39.0m、東で35.6mで北西から南東へ緩やかに傾斜した地形を呈する。

歴史的環境 調査地は縄文時代から中世に至る複合遺跡である上里遺跡に含まれる。調査地の西には芝古墳群、南西には古墳時代後期の井ノ内古墳群¹⁾や井ノ内稲荷塚古墳、南には縄文時代後期から鎌倉時代までの集落跡である井ノ内遺跡が位置する。さらに、長岡京遷都以前における乙訓地域の中心地とされる乙訓寺や、乙訓坐火雷神社とされる角宮神社がこの南に所在する。延暦三年(784)に都が長岡に遷都されると、この地域も右京北西部に取り込まれる。

(2) 周辺の調査(図5、表1)

縄文時代 調査地のやや南で行われたR830調査で、縄文時代中期の土壌を検出、R21調査8グ

リットで縄文時代後期の土器片や完形の石匙が出土した。

調査地に西接するR772・775調査では、縄文時代晩期の土器棺墓や土壙墓を検出した。

弥生時代 R772調査では弥生時代の方形周溝墓や流路を検出したほか、長岡京市今里更ノ町で実施されたR285²⁾調査でも方形周溝墓を検出した。

古墳時代 R772調査では古墳時代中期の竪穴住居・掘立柱建物・区画溝などを検出した。R775調査では、竪穴住居群が廃絶した後に、掘立柱建物群が造営されたことがわかった。

古墳時代後期の遺構では、R830調査Aトレンチで6世紀末の竪穴住居、Dトレンチで掘立柱建物の一部、R27調査Eトレンチで竪穴住居、R107調査では6世紀後半～7世紀初頭の土壙墓などを検出した。これらの古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物は、建物の方位が、北に対して西へほぼ25°～35°振れる。R285調査では、古墳時代後期の竪穴住居や同時期の集落を区画する溝なども検出した。

今回の調査地の南に位置する低位段丘上には、前方後円墳である井ノ内稲荷塚古墳や井ノ内車塚古墳などが造られる。井ノ内稲荷塚古墳の調査³⁾(R478・503・536・568)では横穴式石室・木棺墓を検出、鉄刀・鉄剣・鉄鏃・耳環などが出土し、6世紀前半の築造であり6世紀後半まで追葬が行われたことが明らかとなった。井ノ内車塚古墳の調査R647では土器類・埴輪が出土し、6世紀前半に築造されたことがわかった。両古墳の間には小規模な方墳4基・土壙墓3基の井ノ内古墳群が形成され、R72⁴⁾・315⁵⁾・605調査の結果、最も古い3号墳の築造が5世紀後半であることが判明した。井ノ内古墳群の南側の井ノ内遺跡では、R72調査で竪穴住居、R753調査では竪穴住居・掘立柱建物、R795⁶⁾調査で古墳時代後期の掘立柱建物を検出した。

奈良時代 今回の調査区の南東約200mに位置する長岡京市立長岡第十小学校建設に伴う調査R22・25では、段丘崖に沿って北西から南東方向に流れる幅約15m前後の自然河川を検出し、善峰川の旧河道と推定された。この河川は奈良時代にはほぼ埋没し、河川内に杭で護岸された溝が造られる。この溝埋土中から、飛鳥時代から奈良時代の遺物が出土、特に「弟国」と書かれた墨書土器が出土して注目された。この調査地からさらに南東へ約200mに位置するR511⁷⁾調査では、この河川に連続する遺構を検出した。この河川は、流路をかえながらも各時代を通じて北西から南東方向に流れる。その南側の調査R285⁸⁾・310⁹⁾・335では、長岡京造営時に整地された河川の下層から、大量の土器類や木製品に混じって、墨書土器や文字を記した檜扇・木簡などが出土した。出土遺物は奈良時代のものが中心で、長岡京期のものも一部含まれる。「園宅」・「園司」の墨書土器や「御司」の木簡などから、周辺に奈良時代の宮内省園池司に関連する施設「乙訓園」が存在した可能性が推定される。R310調査では石敷きの排水施設をもつ井戸も長岡京造営にあたって整地・廃棄されたようで、前記の「園」に関する施設の一部と思われる。注目される。

長岡京期 R22・25調査地の東端では、南北に底が付く大規模な掘立柱建物跡が検出された。この建物跡の柱掘形には、直径0.4m前後の柱根が残り、中には別の部材で柱を補修したものもあり、平城京から移築された建物と推定される。建物は、右京二条三坊二町の中心に配置され、宮域に比較的近いという立地環境から、高位・高官の邸宅または官衙的施設と指摘されている。

R746調査は西京極大路推定地のすぐ東に位置するが、その地点で一条条間南小路を検出し、この地域では東西条坊道路が西京極大路付近まで施行されたことが判明した。R772調査では、総延長230mにわたって一条大路南側溝、西三坊大路西側溝を検出し、長岡京の条坊復元を行う上で貴重な発見となった。R775調査では西三坊大路と西側溝・築地内溝・門跡・掘立柱建物などを検出、門跡は少なくとも2時期の建替えが確認できた。なお、新段階の建替えは四脚門柱穴から出土した土器から、長岡京期末期あるいは平安時代初頭と考えられ、この宅地が平安遷都後も機能したことを示唆する。

平安時代 平安時代の遺構に関しては南接するR830調査Aトレンチで平安時代前期の井戸を検出、「□万呂」の墨書のある瓦が出土した。R795調査では西三坊大路路面上で平安時代中期から後期の掘立柱建物・溝・井戸・土壙を検出した。R772調査でも西三坊大路路面上で、平安時代の掘立柱建物・柵列を検出した。他の調査例からも、長岡京条坊道路が徐々に使われなくなったことが明らかとなった。

註

- 1) R605調査を契機として、それまで「小西古墳群」としてきたものを「井ノ内古墳群」と名称が改められた。
- 2) 石尾政信・戸原和人・土橋 誠「長岡京跡右京第285・310・335次発掘調査概要（7ANIFC・GSN地区）」『京都府遺跡調査概報』第45冊（財）京都府文化財調査研究センター 1991年
- 3) 大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団編『長岡京市における後期古墳の調査 長岡京市文化財調査報告書』第44冊 長岡京市教育委員会 2002年
- 4) 岩崎 誠「1号墳の調査」『長岡京市における後期古墳の調査 長岡京市文化財調査報告書』第44冊 長岡京市教育委員会 2002年
山本輝雄「小西古墳群」『長岡京市史』資料編一 長岡京市役所 1991年
- 5) 木村泰彦「右京第315次（7ANGHD-4地区）調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度（財）長岡京市埋蔵文化財センター 1990年
木村泰彦「2号墳の調査」『長岡京市における後期古墳の調査 長岡京市文化財調査報告書』第44冊 長岡京市教育委員会 2002年
山本輝雄「小西古墳群」『長岡京市史』資料編一 長岡京市役所 1991年
- 6) 増田孝彦「長岡京跡右京第795次（7ANGKS-6地区）・井ノ内遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第113冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2005年
- 7) 辻本和美・引原茂治・石尾政信「長岡京跡右京第511次発掘調査概要（7ANGKN地区）」『京都府遺跡調査概報』第69冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996年
芝 暁彦「長岡京跡右京第547次発掘調査概要（7ANGTE-3・GKN-2）4. 平成7年度調査出土遺物」『京都府遺跡調査概報』第77冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997年
- 8) 註2に同じ。
- 9) 註2に同じ。

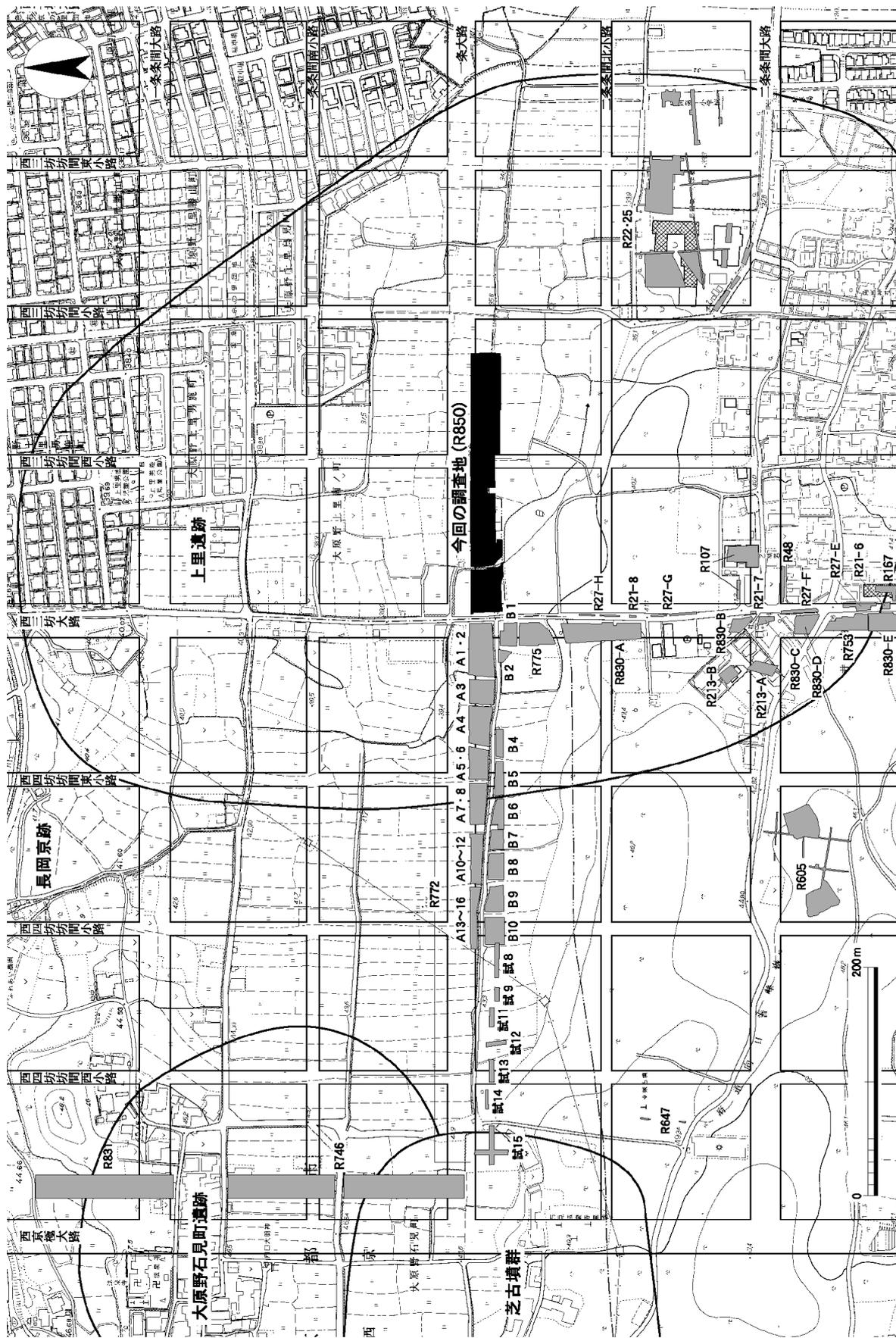


図5 今回の調査地と周辺の調査 (1 : 5,000)

表1 周辺調査一覧表

新条坊名称	調査回数	調査地	調査機関(調査者)・調査期間	長岡京期の調査概要	奈良時代以前の調査概要	文献
右京一条四坊十三・十四町、一条大路、一条条間南小路	R 746	京都市西京区大原野石見町ほか地内(道路建設)	(財)京都市埋蔵文化財研究所(百瀬正恒・網 伸也・永田宗秀・本弥八郎・南出俊彦) 2002.8.8～2003.2.28。	十三町・十四町中央部・一条条間南小路・一条大路の調査。一条大路両側溝の推定位置であるが、中世の溜池造成時に削平され、検出できなかった。一条条間南小路南側溝(幅1.8m、深0.5m)、北側溝(幅3.2m、0.2～0.4m)、土壇、溝、柵列を検出。 土師器皿・杯・椀・高杯・壺・甕・羽釜、製塩土器、ミニチュアかまど、土馬などが出土。	古墳時代前期の流路を検出。ほかには縄文時代後期から弥生時代前期の流路を検出。古墳時代の土師器、須恵器、弥生土器壺、甕、鉢、高杯、弥生時代前期の石包丁、縄文時代後期～晩期の深鉢・小型石棒・石鏃などが出土。	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』 2002-2 2003
右京一条四坊十五町、一条条間大路	R 831	京都市西京区大原野石見町314ほか(道路建設)	(財)京都市埋蔵文化財研究所(南 孝雄・清藤玲子) 2004.11.19～2005.2.9	十五町中央部・一条条間大路の調査。長岡京期の可能性のある掘立柱建物(2間×2間、2間×3間)を検出。一条条間大路は確認することはできなかった。ほかには鎌倉時代から室町時代の柱穴、居館の一部をなす土塁を検出。 長岡京期の遺物は少ない。	古墳時代後期の掘立柱建物、竪穴住居2棟、東西溝(1.5～2.0m、深0.3～0.4m)を検出。ほかには縄文時代の土壇を検出。 古墳時代の須恵器、土師器、弥生時代の石槍・石鏃、縄文時代の深鉢が出土。	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』 2004-15 2005
右京二条三坊二・七町、二条条間大路、西三坊坊間東小路	R 22・25	長岡京市井ノ内玉ノ上・北裏(長岡第十小学校)	長岡京市教育委員会・長岡京第十小学校発掘調査委員会(山本輝雄・岩崎 誠・竹井治雄) 1979.2.7～1979.3.5・1979.4.2～1979.9.22。	二町・七町の調査。二町では、ほぼ中心で建物(2間×4間以上、南北二面庇東西棟)を検出。その北側で、建物(2間×3間以上東西棟)、土壇などを検出。七町内では、建物(3間×2間の総柱建物や3間×2間東庇の南北棟掘立柱建物)を検出。二条条間大路北側溝推定位置で東西掘立柱塀、西三坊坊間東小路西側溝推定位置に近い所で南北掘立柱塀、土壇、溝などを検出。 旧流路から須恵杯B(「弟国」墨書)、包含層から須恵器杯A(「大舍人寮」墨書)が出土。そのほか、須恵器壺A・甕、土師器杯・椀・高杯、緑釉陶器椀・火舎、軒丸瓦、下駄、斎串、人形、銭貨などが出土。	段丘崖に沿って北西から南東方向に流下する古墳時代の自然流路(幅約15m、深約1.7m)・土壇、弥生時代の土壇、縄文時代後期の土壇、柱穴などを検出。 土壇から縄文土器・磨製石斧、弥生土器壺・甕、石鏃・石錐、古墳時代の須恵器杯蓋・杯身・有蓋高杯・提瓶・壺・器台・甕、土師器高杯・甕・甌、埴輪、土鈴、流路から勾玉などが出土。	『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第11集 1997
右京二条三坊十三～十六町、西三坊大路、二条条間北小路、二条大路	R 27	長岡京市井ノ内ほか(下水道及び道路敷設)	京都府教育委員会(奥村清一郎・辻本和美) 1979.6.18～1979.8.31。	西三坊大路の調査。長岡京期の明確な遺構、遺物は検出されなかった。	Eトレンチで古墳時代のかまどを布設する竪穴住居1棟、土壇などを検出。 調査地域全体にわたって古墳時代後期から末期の須恵器杯蓋・杯身・甕、土師器甕・鉢などや、縄文土器、弥生土器壺・甕・鉢・高杯・器台、石鏃などが出土。	『埋蔵文化財発掘調査概報』第2分冊 1980
右京二条三坊十三町	R 29	長岡京市井ノ内広海道17(宅地開発)	長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所(岩崎 誠) 1980.2.15～1980.3.15。	十三町北西部の調査。井戸(一辺2m)、土壇などを検出。 土師器皿・椀・杯・甕、須恵器杯・椀・高杯・壺・甕、緑釉唾壺、灰釉陶円面硯などが出土。	楕円形の土壇を検出。 古墳時代後期の土師器高杯・甕、須恵器杯身・短頸壺などが出土。	『長岡京市文化財調査報告書』第19冊 1987
右京二条三坊十三・十四町、二条条間南小路	R 167	長岡京市井ノ内広海道16-1ほか(宅地開発)	(財)長岡京市埋蔵文化財センター(小田 淳) 1984.6.27～1984.7.20。	十三町北辺部・二条条間南小路・十四町南辺部の調査。長岡京造営に際して奈良時代の建物が解体されたと考えられる。 土師器椀A、土師器高杯脚部、須恵器甕が出土。	奈良時代の掘立柱建物2棟(2間×3間以上南庇1棟と規模不明1棟)と東西溝、土壇(約4m四方)を検出。 古墳時代後期の土師器甕・甌、須恵器杯・蓋、大型の須恵器蓋が出土。	『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和59年度 1985

新条坊名称	調査回数	調査地	調査機関(調査者)・調査期間	長岡京期の調査概要	奈良時代以前の調査概要	文献
右京二条三坊十三～十五町、西三坊大路、二条条間南小路	R 21	長岡京市井ノ内ほか(下水道敷設)	京都府教育庁文化財保護課(奥村清一郎) 1978.11.20～1978.12.27。	西三坊大路・二条条間南小路の調査。No.6グリッドで土壌を検出。長岡京期に属する一括土器群(土師器杯・皿・椀・甕・ミニチュア鉢・ミニチュアカマド、須恵器杯・蓋・壺・鉢など)が出土。	顕著な遺構は検出されなかった。古墳時代の須恵器杯片などが出土。ほかにはNo.8グリッドで縄文時代後期後半期の土器片や石匙が出土。	『埋蔵文化財発掘調査概報』1979
右京二条三坊十四町、西三坊大路	R 48	長岡京市井ノ内西ノ口16(宅地開発)	長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所(岩崎誠) 1980.9.12～1980.10.14。	十四町北西部の調査。長岡京期の明確な遺構・遺物は検出されなかった。	古墳時代の竪穴住居と考えられる土壌、焼土層、柱穴状遺構を検出。土師器杯・長胴甕、須恵器杯蓋・杯身、須恵質埴輪片が出土。ほかには弥生時代の方形周溝墓の一端と考えられる溝、土壌を検出。弥生土器壺、壺用蓋、高杯が出土。	『長岡京市文化財調査報告書』第19冊 1987
右京二条三坊十五町、二条条間大路	R 107	長岡京市井ノ内西ノ口17-13、17-4(宅地開発)	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター(長谷川達・山下正) 1982.7.20～1982.10.2。	二条条間大路の調査。長岡京の条坊に関わる遺構は確認できなかった。包含層から長岡京期に属する遺物が多数出土。	古墳時代後期から末期の土壌墓を3基検出。須恵器杯蓋、短頸壺、銀環、刀子などが出土。	『京都府遺跡調査概報』第8冊 1983
右京二条四坊一・八・九町、一条大路、西三坊大路、西四坊坊間東小路、西四坊坊間小路	R 772	京都市西京区大原野石見町地内(道路建設)	(財)京都市埋蔵文化財研究所(吉村正親・南出俊彦・尾藤徳行・大槻明義・大立目一・加納敬二・布川豊治・上村和直・鎌田泰知・南孝雄・網伸也・百瀬正恒・永田宗秀・菅田薫) 2003.1.6～2003.8.6。	二条四坊北辺部・一町東辺部・一条大路・西四坊坊間小路・西四坊坊間東小路・西三坊大路の調査。一条大路南側溝(最大幅1.7m、最深0.35m、総延長230m)、B1区で西三坊大路西側溝(幅1.7～1.8m、深0.3m)、内溝(幅2.5～3.0m、深0.2m)、A3区で掘立柱建物(3間×2間北庇)、B4区で掘立柱建物(2間×2間以上東庇)、B6区で掘立柱建物(5間×1間以上北庇)、B9区で掘立柱建物(2間×3間以上)、B6区で覆屋のある井戸、B7区で柵列、A5・6区で木棺墓などを検出。土師器椀・皿・甕・短頸壺、須恵器蓋・壺、鉄製車軸受け金具などが出土。	A1～4区およびB1・2区で古墳時代中期の竪穴住居を15棟、B1区で住居群の南限を区画する溝や屋外炉として機能したとみられる土壌、A3区とB4区で古墳時代中期の総柱の掘立柱建物(2間×2間)、A4区で古墳時代中期の掘立柱建物(2間×2間)などを検出。ほかにはA1～3区で縄文時代晩期の土器棺墓、土壌墓、A1・2区で弥生時代の方形周溝墓、B4・A4区で流路などを検出。縄文土器深鉢・壺、弥生土器長頸壺・石包丁・石鏃、土師器甕・甑、古墳時代中期の須恵器杯蓋・杯身・高杯・隼・壺・甕・把手付き小椀などが出土。	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』2003-3 2003
右京二条四坊一町、西三坊大路	R 775	京都市西京区大原野石見町地内(道路建設)	(財)京都市埋蔵文化財研究所(網伸也・南孝雄・百瀬正恒) 2003.5.22～2003.8.12。	一町東辺部・西三坊大路の調査。西三坊大路路面・西側溝(幅1.6～1.8m、深0.15～0.3m)・内溝(約3m、深0.2m)、2時期の建替えがあった門(古段階掘立柱構造、新时期礎石建て四脚門)、2間×3間以上の建物、宅地を区画する東西溝(幅1.5～1.6m、深0.1m)、一町を南北に2分割する柵などを検出。土師器皿・椀・杯・ミニチュア鉢、須恵器蓋・杯・壺・甕、土馬、緑釉陶器素地皿などが出土。	古墳時代後期から末期の掘立柱建物(3間×4間を1棟、3間×2間を2棟、2間×2間を2棟)、総柱建物(3間×2間以上を1棟)、建物群を区画する柵、溝などを検出。縄文時代から弥生時代の石鏃、石匙、磨製石斧、古墳時代後期の土師器高杯、須恵器蓋・杯身・高杯・甕などが出土。	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』2003-4 2003

新条坊名称	調査回数	調査地	調査機関(調査者)・調査期間	長岡京期の調査概要	奈良時代以前の調査概要	文献
右京二条四坊一～四町、西三坊大路、二条条間北小路、二条条間大路、二条条間南小路	R 830	長岡京市井ノ内頭本・廣海道(道路建設)	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター(石井清司・伊野近富・増田孝彦) 2004.7.26～2005.3.9。	一町から四町東辺部・西三坊大路・二条条間北小路・二条条間大路の調査。長岡京の条坊に関わる遺構は確認できなかった。包含層から長岡京期に属する遺物が多数出土。ほかにはAトレンチで平安時代の井戸を検出、「□万呂」の墨書のある瓦が出土。	Aトレンチで古墳時代後期の竪穴住居1棟、Dトレンチで古墳時代後期の掘立柱建物東西4間分を検出。ほかには縄文時代中期の土壌を検出。縄文土器深鉢、古墳時代後期の埴輪などが出土。	『現地説明会資料』No05-04 2005、 『京都府埋蔵文化財情報』第95号 2005
右京二条四坊二・三町、二条条間大路	R 213	長岡京市井ノ内頭本3-3他(重要遺跡確認調査)	長岡京市教育委員会(中尾秀正) 1985.11.22～1985.12.24。	二町南辺・三町北辺・二条条間大路の調査。長岡京期の明確な遺構・遺物は検出されなかったが、Aトレンチで二条条間大路南側溝推定位置で東西溝(幅0.3～0.4m、深0.2m)を検出。遺物はほとんど出土していない。	古墳時代の遺構は検出できなかったが、後世の陶磁器類などとともに古墳時代後期の土器類の破片が出土。	『長岡京市文化財調査報告書』第17冊 1986
右京二条四坊三町、西三坊大路	R 753	長岡京市井ノ内広海道(道路建設)	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター(奥村清一郎・増田孝彦) 2002.12.11～2003.2.21。	西三坊大路の調査。長岡京期の明確な遺構は検出されなかった。遺物は少量出土。ほかには時期不明の総柱建物(2間×2間以上)、平安時代以降の溝を検出。	古墳時代後期の掘立柱建物(2間×3間)、かまど付き竪穴住居(4m×3m)1棟、土壌を検出。古墳時代後期から末期の須恵器杯身・杯蓋・壺などが出土。	『京都府遺跡調査概報』第107冊 2003
右京二条四坊六町	R 605	長岡京市井ノ内宮山8番地ほか(グラウンド造成工事)	(財)長岡京市埋蔵文化財センター(小田桐淳・渡辺哲央) 1998.5.25～1998.9.14。	六町中央部の調査。長岡京期に関する記述なし。	2基の方墳(井ノ内3・4号墳)の周溝(幅4m、深0.6m前後)を検出。墳丘は完全に削平を受けていた。3号墳からは円筒埴輪や種々の形象埴輪が、4号墳からは石製紡錘車が出土。ほかには須恵器杯身・杯蓋・甗・高杯・甕・器台・有蓋直口壺・短頸壺・広口壺などが出土。3号墳が古墳時代中期、4号墳は古墳時代後期。	『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成10年度 2000、 『長岡京市における後期古墳の調査 長岡京市文化財調査報告書』第44冊 2002
右京二条四坊十五町	R 647	長岡京市井ノ内向井芝4(範囲確認調査)	長岡京市教育委員会主体、(財)長岡京市埋蔵文化財センター実施(福永伸也・清家章) 1999.7.19～1999.8.17。	十五町中央部の調査。長岡京期に関する記述なし。	井ノ内車塚古墳。古墳時代後期の全長36mの前方後円墳。葺石は認められなかった。墳丘上に埴輪が樹立され、大部分が盛土で構築され、後円部では埋葬施設が失われている可能性が高いことなどを確認。円筒埴輪、形象埴輪、須恵器杯蓋・高杯などが出土。	『長岡京市文化財調査報告書』第41冊 2000

3. 遺 構

(1) 層序と遺構の概要

地形 調査対象地の地形は、A-1区・A-2区間の水路を境に東側へ急激に下がり、A-1区とA-3区の地表面の比高差は約2mある。これに対してA-3区からC区にかけては、比較的なだらかに東側へ降下する。検出した遺構面も、ほぼ現地地形に沿っている。ただ、水田を造成した際に、平坦地を確保するため、遺構面がひな段状に削平される部分が見られる。

基本層序 (図6) 調査地の基本層序は、A-1区東壁では現地表面から-0.48mまでが褐灰色砂泥の耕作土、-0.52mまでがにぶい黄褐色粘土の床土、これ以下が褐色砂泥または黄色粘土の地山となる。

A-3区東壁では現地表面から-0.42mまで褐灰色砂泥の耕作土、-0.52mまでがにぶい黄褐色粘土の床土、これ以下が褐灰色砂礫または暗灰黄色粘土の地山となる。

C区東壁では現地表面から-0.68mまでが褐灰色砂泥の耕作土、-0.80mまでがにぶい黄褐色粘土の床土、これ以下が灰黄褐色砂礫またはにぶい黄褐色粘土の地山となる。

全調査区で長岡京期の遺構と古墳時代の遺構を地山上面で同時に検出した。また、長岡京期の遺構面では、古墳時代の凹凸を部分的に整地して平坦にしている箇所もみられた。

A-1区遺構面の標高は東壁際で37.9m、A-3区遺構面の標高は東壁際で36.1m、C区は同様に35.3m、比高差は2.6mである。

遺構の概要 今回の調査で検出した遺構の時期は、古墳時代から中世に及ぶ。主な遺構を時代順にみると、古墳時代では竪穴住居・掘立柱建物・溝・土壇・河川、奈良時代では土壇、長岡京

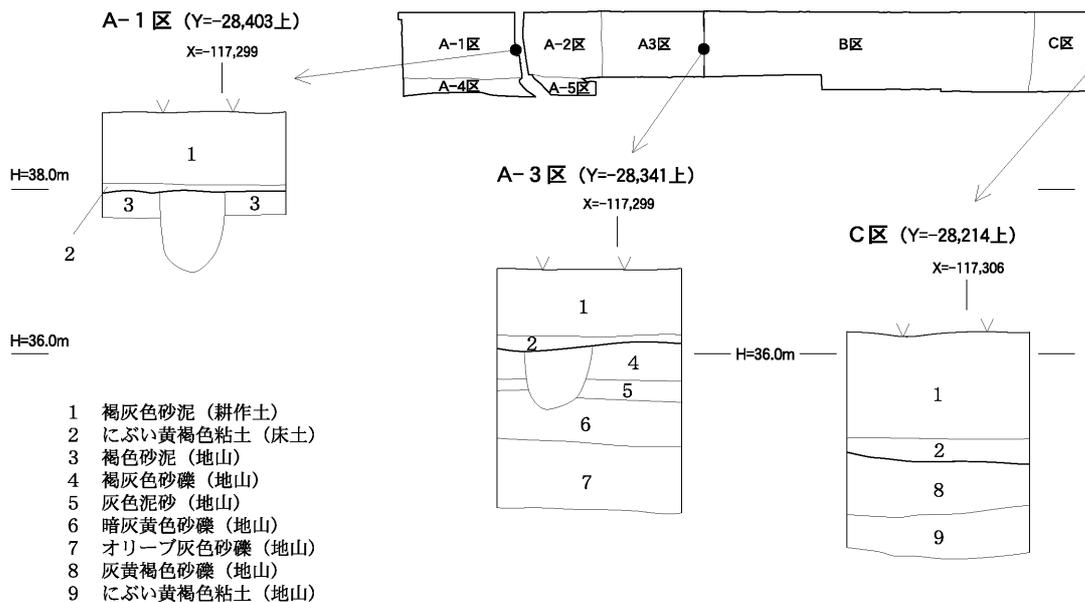


図6 調査区土層模式図

表2 遺構概要表

調査区	古墳時代	奈良時代・長岡京期	中世
A区	竪穴住居7・30・31・56・96・126・357・551、掘立柱建物11・299・326・329・374・385・705、土壇350、河川487下層、柱穴群	掘立柱建物238・269、井戸43、柵279・280・322、土壇411・488、溝4、河川487上層、柱穴群	小溝
B・C区	竪穴住居1296、溝2056・2063 河川1085下層・1200下層、柱穴群	掘立柱建物1106・1139・1156・1283・1299・1311・2028・2045、柵1103、柱穴列1268・2011・2074、土壇689・1038・1132・1252・1274・1328、溝4・1020、河川1085上層・1200上層、柱穴群	小溝

期では掘立柱建物・井戸・柵・築地・土壇・溝・河川などである。中世以降の遺構としては全調査区で耕作に関係する小溝を検出した。

古墳時代の竪穴住居の柱穴埋土は、おおむね褐色砂泥である。柱痕跡は暗褐色砂泥である。掘立柱建物の柱穴埋土は、おおむね褐色灰色砂泥である。柱痕跡は褐色灰色粘土である。

長岡京期の掘立柱建物の柱穴埋土は、おおむね2層に分けることができ、上層は暗灰黄色砂泥、下層は褐色砂泥である。柱痕跡は灰黄褐色砂泥である。

以下では、A区からC区の各時代の遺構の概要を、古墳時代と奈良時代・長岡京期の遺構に分けて報告する。

(2) 古墳時代の遺構

竪穴住居7 (図7、図版1・12) A-1区の北東部で検出した方形の竪穴住居である。土壇350に北西部を削平される。ほぼ正方位である。幅4.2m×4.1m・深さ0.07mで、床面積は17.2㎡である。支柱穴は4箇所あり、掘形はいずれも円形で、径0.3~0.5m・深さ0.1mである。壁面の北・西・南の三方向に断面U字形で幅0.15m・深さ0.15mの壁溝を検出した。

床面から土師器・須恵器の小片が少量出土した。器形は特定できない。

竪穴住居30 (図7、図版1・13) A-1区南東隅部で検出した竪穴住居である。建物の東半部は用水路によって削平を受ける。竪穴住居31を削平し、竪穴住居551に削平を受ける。方位は北に対して西に15°振る。一辺約5.4mの方形と推定できる。深さは0.1mである。支柱穴は2箇所検出した。掘形は円形で径0.4m・深さ0.1~0.16mである。壁面の北・西・南の三方向に断面U字形で幅0.2m・深さ0.05mの壁溝を検出した。柱の重複関係から掘立柱建物11に削平を受ける。

床面から土師器・須恵器の小片が少量出土した。器形は特定できない。

竪穴住居31 (図7、図版1・13) A-1区南東隅部で検出した竪穴住居である。建物の東半部は用水路によって削平を受ける。竪穴住居30と551に削平を受ける。方位は北に対して西に25°振る。一辺約5.2mの方形と推定できる。深さは0.1mである。支柱穴は2箇所検出した。掘形は円形で径0.5m・深さ0.1mである。壁面の北・西・南の三方向に断面U字形で幅0.3m・深さ0.15mの壁溝を検出した。

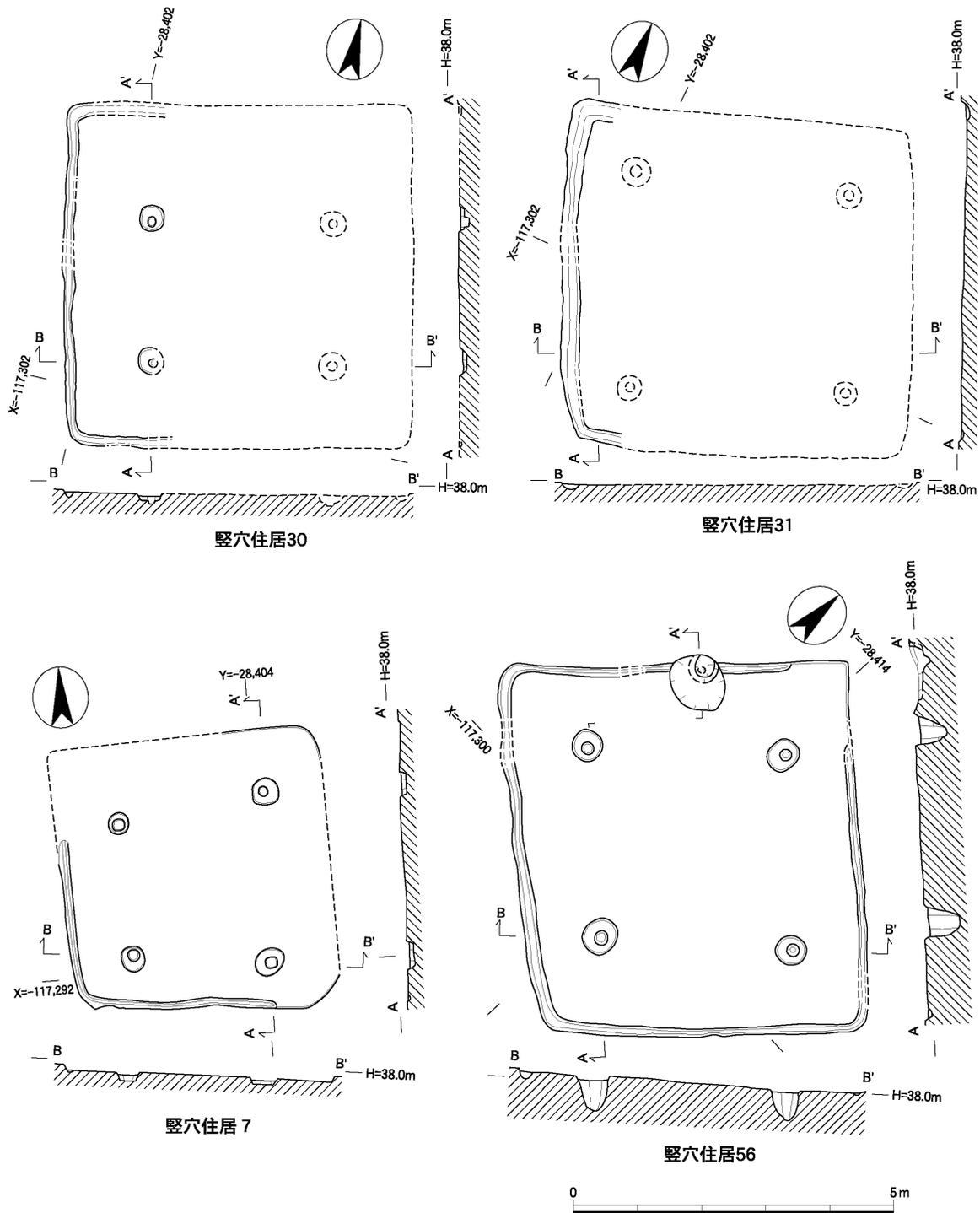


図7 竪穴住居7・30・31・56実測図(1:100)

覆土や床面から土師器・須恵器の小片が少量出土した。器形は特定できない。

竪穴住居56(図7、図版1・12) A-1区中央南寄りで検出した方形の竪穴住居である。方位は北に対して西に50°振る。幅5.8m×5.4m・深さ0.09mで床面積は約31.3㎡である。支柱穴は4箇所検出し、掘形は円形で径0.4~0.5m・深さ0.5mである。四壁沿いに断面U字形で幅0.2m・深さ0.05~0.1mの壁溝が巡る。北西辺にはカマドの痕跡がある。

覆土や床面から土師器・須恵器の小片が少量出土した。器形は特定できない。

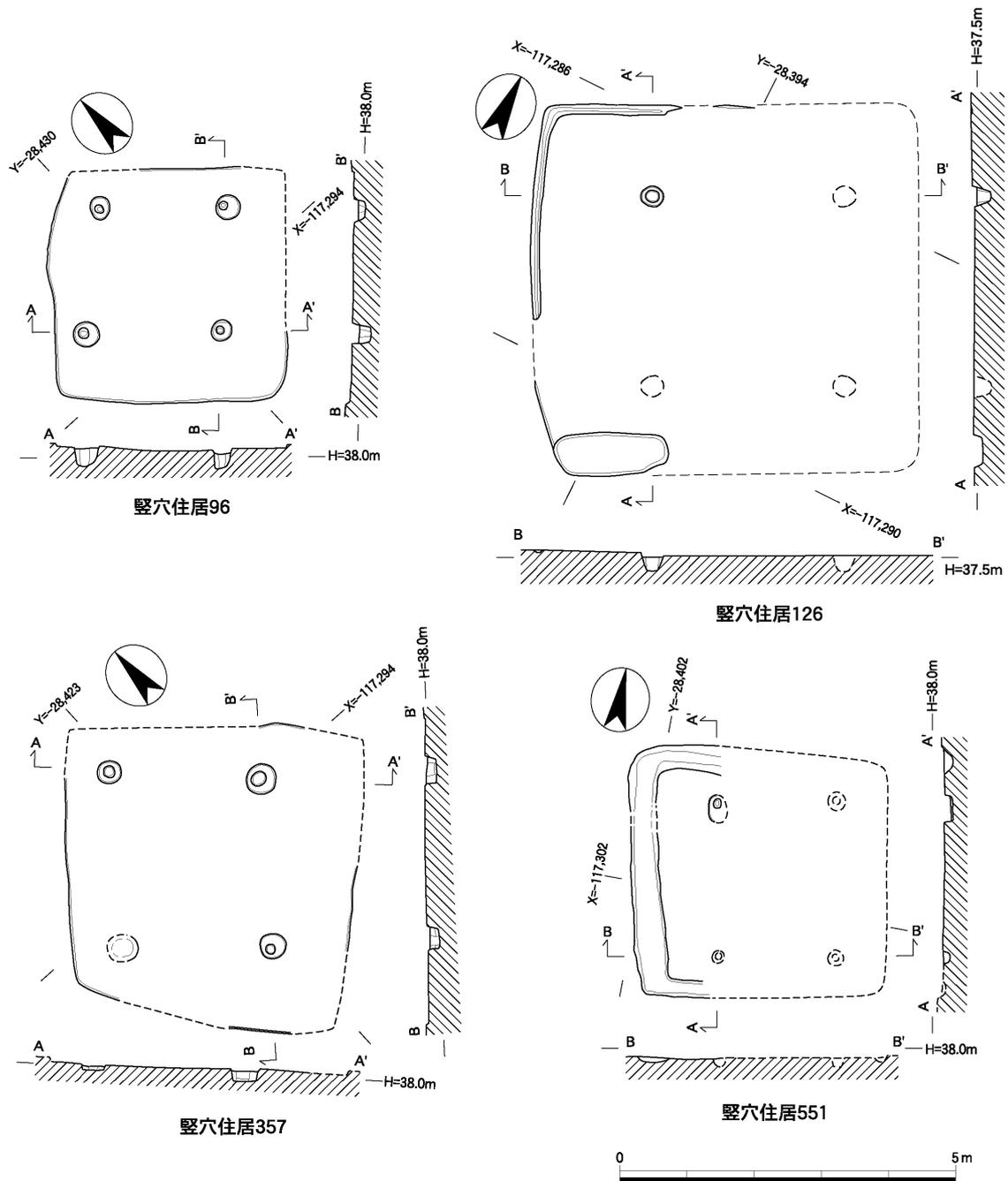


図8 竪穴住居96・126・357・551実測図(1:100)

竪穴住居96 (図8、図版1) A-1区西寄りで検出した方形の竪穴住居である。方位は北に対して西に50°振る。一辺3.5m四方・深さ0.04mで床面積は約12.3m²である。支柱穴は4箇所検出し、掘形は円形で径0.3~0.4m・深さ0.3mである。壁溝は検出できなかった。住居内南西辺には船底状の浅い凹みがある。

覆土から土師器・須恵器の小片が少量出土した。土師器は器形を特定できるものはないが、須恵器はTK23型式の杯Cがある。

竪穴住居126 (図8、図版1・2) A-2区北西部で検出した竪穴住居である。残存状況は悪く壁溝がわずかに残り、支柱穴を一箇所検出したに過ぎない。方位は北に対して西に26°振る。

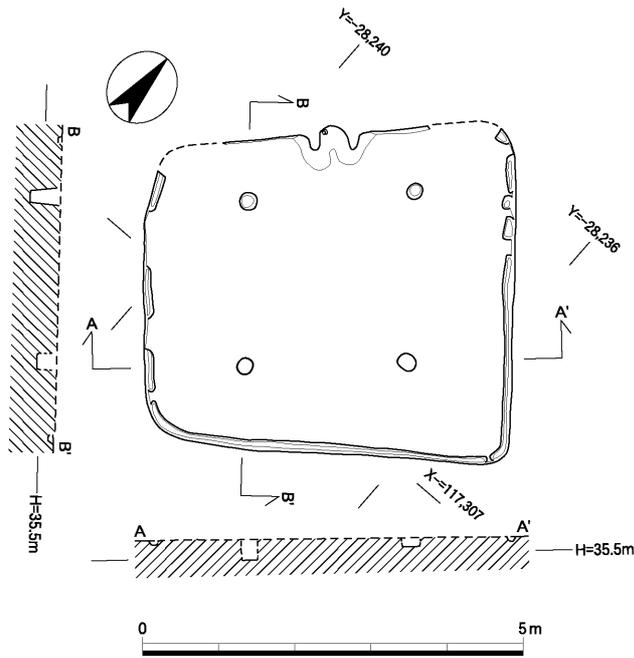


図9 竪穴住居1296実測図(1:100)

一辺約5.7m前後の方形と推定できる。主柱穴の掘形は円形で径0.3m・深さ0.25mである。南西辺と北西辺に壁溝が残り、断面U字形で幅0.15m・深さ0.05mであった。

壁溝から土師器の小片が極少量出土した。器形は特定できない。

竪穴住居357(図8、図版1) A-1区中央部で検出した方形の竪穴住居である。北東部を土壌350に削平を受ける。方位は北に対して西に42°振る。幅4.5m×4.2m・深さ0.05mで床面積は約18.9㎡である。主柱穴は3箇所検出し、掘形は円形で径0.4m・深さ0.2mである。壁溝は

検出できなかった。

覆土や床面から土師器・須恵器の小片が少量出土した。器形は特定できない。

竪穴住居551(図8、図版1・13) A-1区南東隅部で検出した竪穴住居である。建物の東半部は用水路によって削平を受ける。竪穴住居30・31を削平する。方位は北に対して西に10°振る。

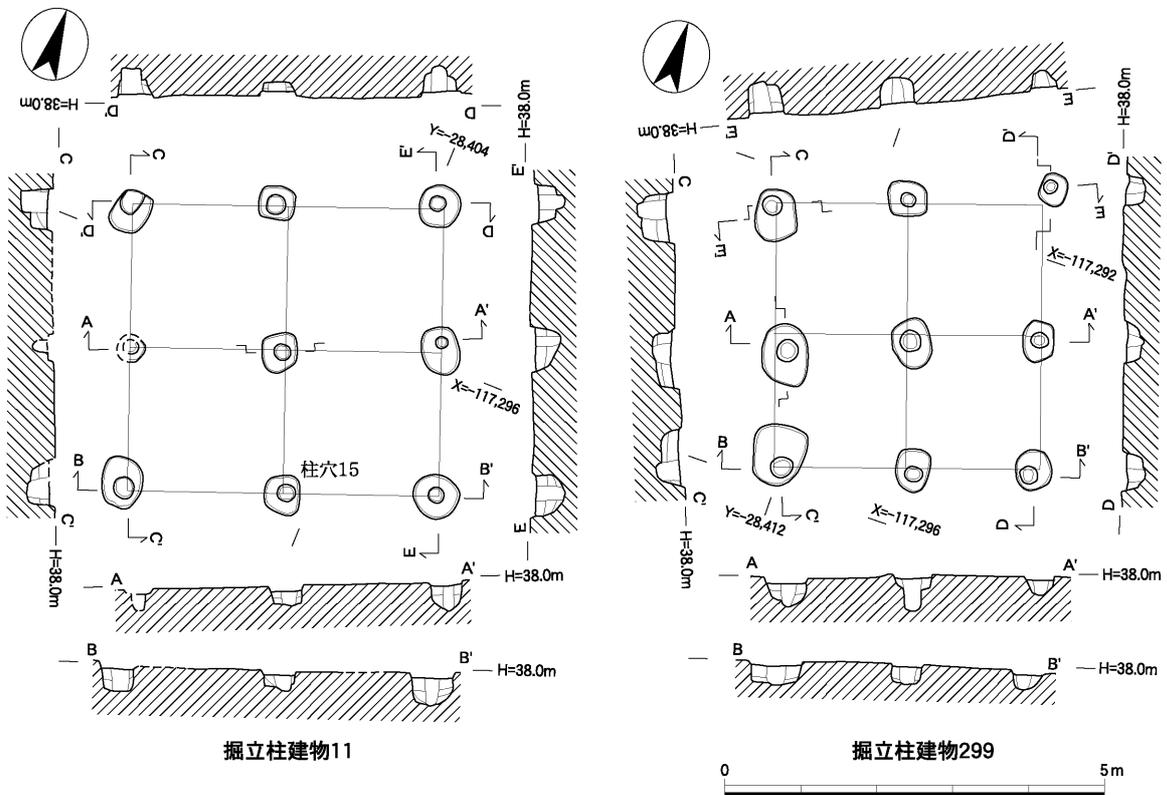


図10 掘立柱建物11・299実測図(1:100)

一辺約3.8mの方形と推定できる。深さは0.03mである。主柱穴は2箇所検出し、掘形は円形で径0.4m・深さ0.1mである。壁面の北・西・南の三方向に断面U字形で幅0.4m・深さ0.07mの壁溝を検出した。

覆土や壁溝などから土師器・須恵器の小片が少量出土した。土師器は器形を特定できるものはないが、須恵器はTK23型式の杯Cがある。

竪穴住居1296 (図9、図版5・13・14)
B区中央南寄りで検出した方形の竪穴住居である。方位は北に対して西に40° 振る。幅4.84m×4.2mで床面積は20.3㎡である。全面に削平を受け、壁溝がわずかに残存する。主柱穴は4箇所検出し、掘形は円形で径0.3m・深さ0.4mである。壁溝は四壁沿いに断面U字形で幅0.15m、深さ0.05mであった。北西辺中央が焼け、カマドがあったと推定できる。

カマド付近から土師器の小片が少量出土した。器形は特定できない。

掘立柱建物11 (図10、図版1・15)
A-1区東部で検出した掘立柱建物である。東西2間(4.1m)・南北2間(3.8m)の方形総柱建物である。各柱間は等間である。身舎の柱穴掘形は、一辺0.46~0.68m・深さ0.22~0.46mの方形である。方位は北に対して西に20° 振る。柱穴の重複関係から竪穴住居30を削平する。

柱穴掘形から土師器・須恵器の小片が少量出土した。器形は特定できない。柱穴15から滑石製管玉が出土した。

掘立柱建物299 (図10、図版1・16)
掘立柱建物11の北西で検出した掘立柱建

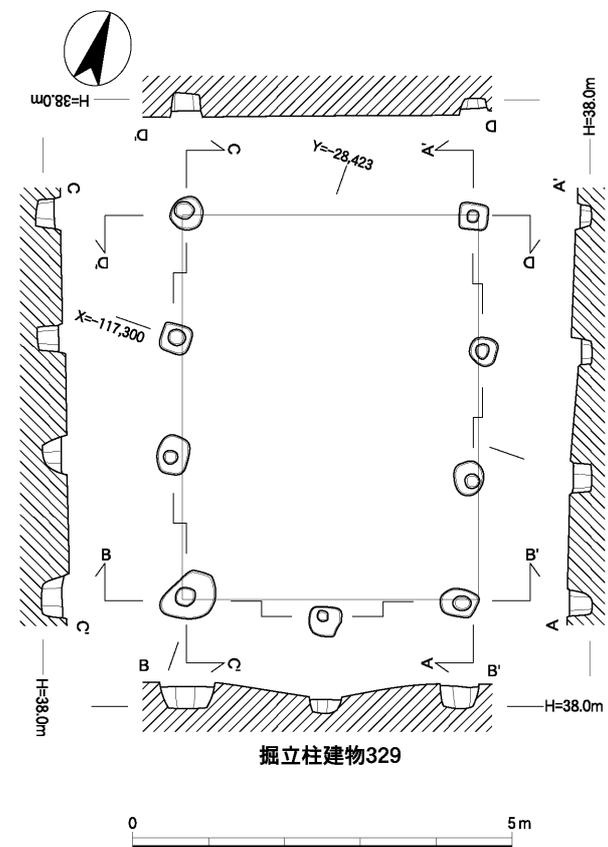
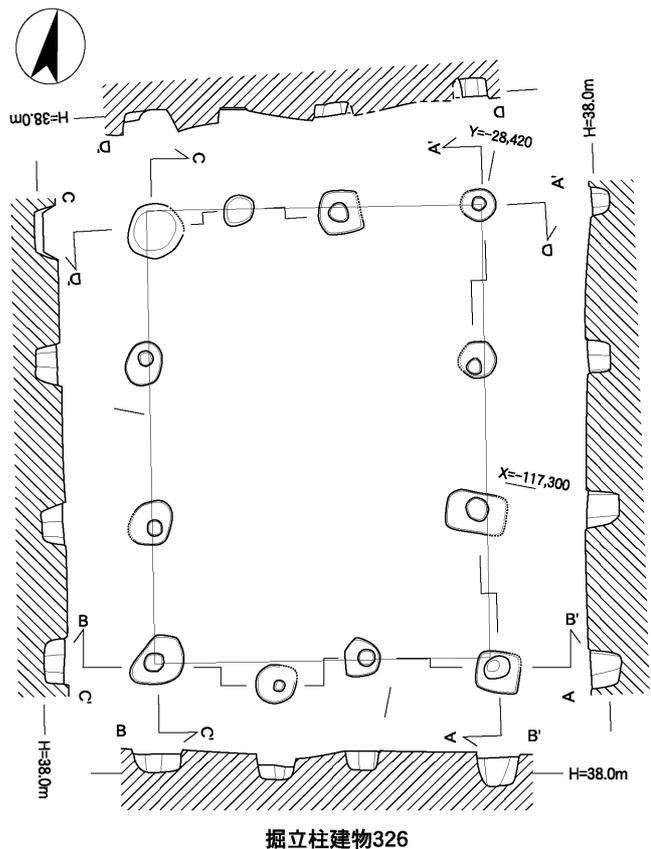


図11 掘立柱建物326・329実測図(1:100)

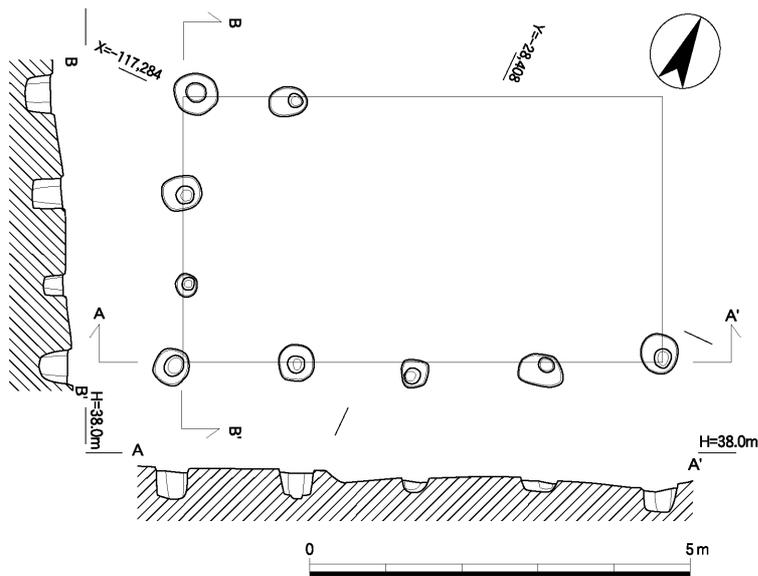


図12 掘立柱建物374実測図 (1:100)

1・16) A-1区中央南部で検出した掘立柱建物である。東西3間(4.4m)・南北3間(6.0m)の南北棟建物である。桁行方向の柱間は2.0m等間、梁間方向の柱間は東から1.7m・1.4m・1.3mである。身舎の柱穴掘形は、円形で径0.3~0.4m・深さ0.3~0.4m、または方形で一辺約0.4m・深さ0.3~0.4mである。方位は北に対して西に13°振る。掘立柱建物329とほぼ重なるが、柱穴の重複関係から掘立柱建物329に削平を受ける。

柱穴掘形から土師器・須恵器の小片が少量出土した。土師器は器形を特定できないが、須恵器蓋AはTK217型式である。

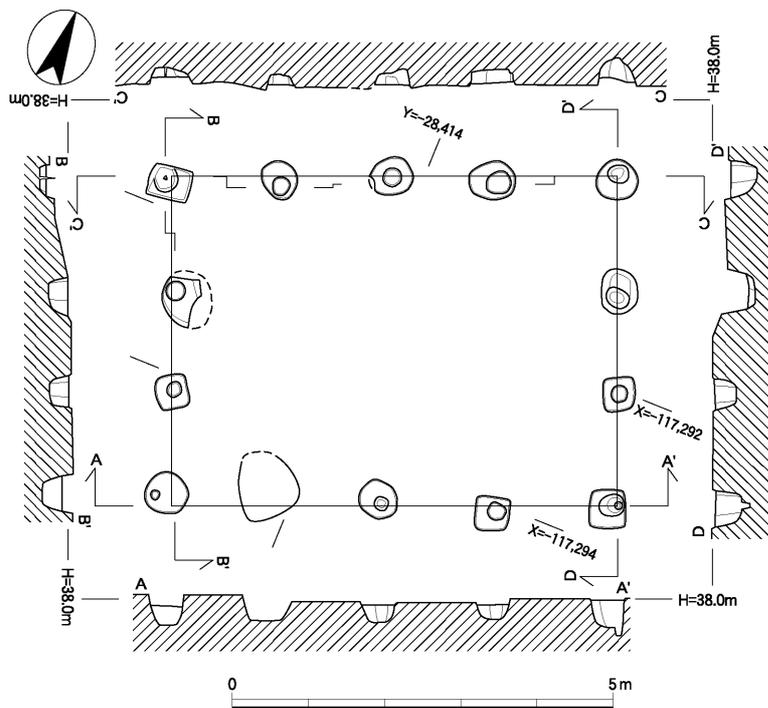


図13 掘立柱建物385実測図 (1:100)

物である。東西2間(3.5m)・南北2間(3.5m)の方形総柱建物である。各柱間は等間である。身舎の柱穴掘形は方形で一辺0.4~0.78m・深さ0.26~0.52mである。方位は北に対して西に21°振る。柱穴の重複関係から、掘立柱建物385に削平を受ける。

柱穴掘形から土師器・須恵器の小片が少量出土した。器形は特定できない。

掘立柱建物326 (図11、図版

1・16) A-1区中央南部で検出した掘立柱建物である。東西3間(4.4m)・南北3間(6.0m)の南北棟建物である。桁行方向の柱間は2.0m等間、梁間方向の柱間は東から1.7m・1.4m・1.3mである。身舎の柱穴掘形は、円形で径0.3~0.4m・深さ0.3~0.4m、または方形で一辺約0.4m・深さ0.3~0.4mである。方位は北に対して西に13°振る。掘立柱建物329とほぼ重なるが、柱穴の重複関係から掘立柱建物329に削平を受ける。

柱穴掘形から土師器・須恵器の小片が少量出土した。土師器は器形を特定できないが、須恵器蓋AはTK217型式である。

掘立柱建物329 (図11、図

版1・16) A-1区中央南部で検出した掘立柱建物である。東西2間(3.9m)・南北3間(5.1m)の南北棟建物である。桁行方向の柱間は不揃いで北から1.8m・1.7m・1.6m、梁間方向の柱間は東から1.9m・2.0mである。身舎の柱穴掘形は、円形で径0.4~0.5m・深さ約0.3mである。方位は北に対して西に17°振る。掘立柱建物326とほぼ重なるが、柱穴の重複関係から掘立柱建物326

を削平する。

柱穴掘形から土師器・須恵器の小片が少量出土した。土師器は器形を特定できないが、須恵器蓋AはTK217型式である。

掘立柱建物374 (図12、図版1) A-1区北東部で検出した掘立柱建物である。東西4間(6.3m)・南北3間(3.6m)の東西棟建物である。桁行方向の柱間は、東から1.5m・1.8m・1.5m・1.5m、梁間方向の柱間は北から1.3m・1.2m・1.1mである。身舎の柱穴掘形は、円形(径0.3~0.6m・深さ0.3~0.5m)である。方位は北に対して西に25°振る。柱穴の重複関係から土壇350を削平する。

柱穴掘形から土師器・須恵器の小片が少量出土した。土師器は器形を特定できないが、須恵器蓋AはTK217型式である。

掘立柱建物385 (図13、図版1) A-1区中央部で検出した掘立柱建物である。東西4間(5.8m)・南北3間(4.4m)の東西棟建物である。桁行方向の柱間は、東から1.5m・1.5m・1.4m・1.4m、梁間方向の柱間は北から1.5m・1.3m・1.6mである。身舎の柱穴掘形は一辺0.5~0.6m・深さ0.2~0.5mの隅丸方形、または径0.6m・深さ0.2~0.6mの円形である。方位は北に対して西に23°振る。柱穴の重複関係から掘立柱建物299・土壇350を削平する。

柱穴掘形から土師器・須恵器の小片が少量出土した。器形は特定できない。

掘立柱建物705 (図14、図版1・16) A-4区北東部で検出した掘立柱建物である。東西2間(4.2m)・南北2間(3.7m)の方形総柱建物である。各柱間は等間である。身舎の柱穴掘形は、方形(一辺0.46~0.77m・深さ約0.2~0.3m)である。方位は北に対して西に35°振る。

柱穴掘形から土師器・須恵器の小片が少量出土した。器形は特定できない。

土壇350 (図版1) A-1区北部で検出した半円形の土壇である。南東辺は約23.0m、南西辺は約13.0mである。深さは約0.3mである。埋土は上層が褐灰色砂泥、下層は灰黄褐色砂泥である。出土遺物は後述する。

溝2056 (図15、図版4・5・14) B・C区中央部で約63mにわたり検出した東西方向の素掘り溝である。西端はB区中央で途切れ、C区では南へ大きく湾曲し、南東で調査区外に延びる。断面はU字形(幅約8.0m・深さ約1.0m)で底部には凸凹があり、北側には特に深い箇所もある。底部標高は、西端では34.9m、湾曲部では35.0m、南端では34.8mである。層位は場所によってかなり異なるが、大きく3層に分けることができる。上層は黄灰色砂泥、中層は褐灰色泥砂、

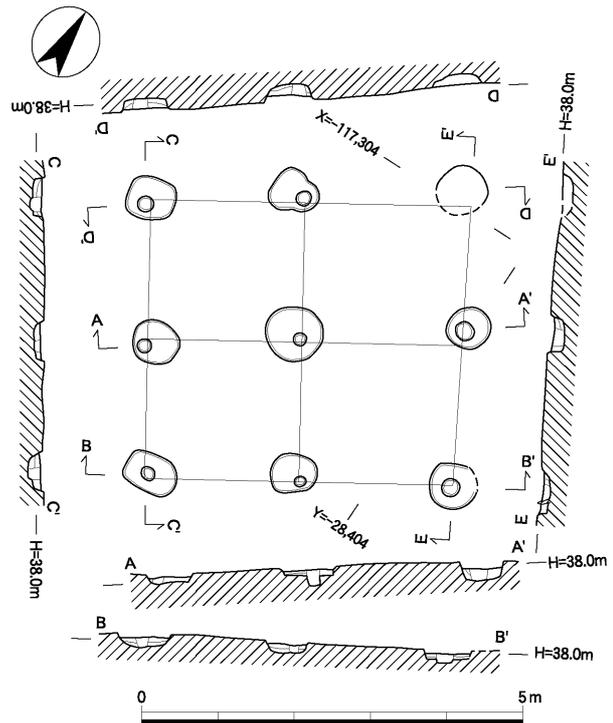
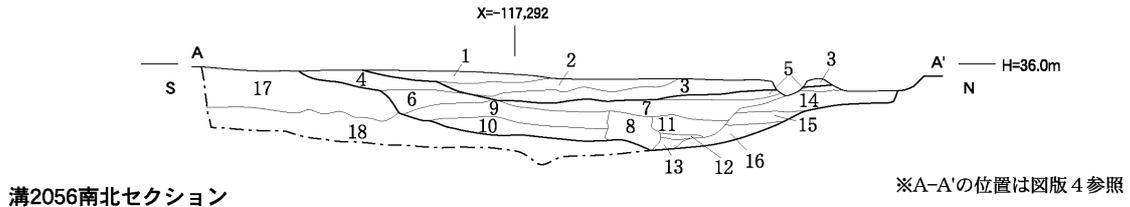
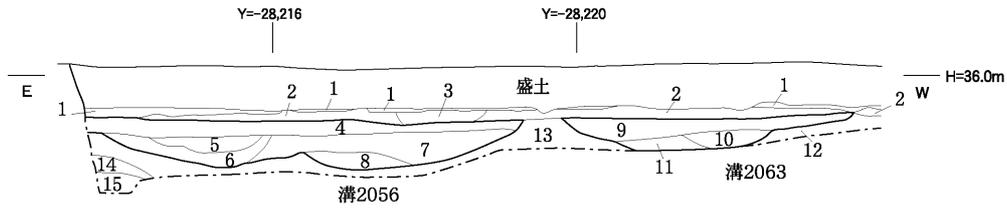


図14 掘立柱建物705実測図(1:100)



溝2056南北セクション

- | | | | |
|--------------|-----------------|---------------------|-------|
| 1 黄灰色砂泥+褐色砂泥 | 土壌1038：長岡京期 | 10 暗灰黄色砂礫 鉄分が沈澱して黒い | 溝2056 |
| 2 黄灰色砂泥 | | 11 暗灰黄色粗砂 | |
| 3 灰黄褐色砂礫 | 溝2056 | 12 灰褐色砂礫 鉄分が沈澱して黒い | |
| 4 にぶい黄褐色砂泥 | | 13 黄褐色泥砂礫含む | |
| 5 灰黄褐色砂泥やや粘質 | 14 にぶい黄褐色砂泥 | | |
| 6 暗灰黄色泥砂 | 15 灰黄褐色泥砂 | | |
| 7 褐色泥砂礫含む | 16 褐色泥砂 | | |
| 8 黄灰色粘質土 | 17 にぶい黄褐色泥砂(地山) | | |
| 9 黄灰色粗砂 | 18 灰黄褐色泥砂(地山) | | |

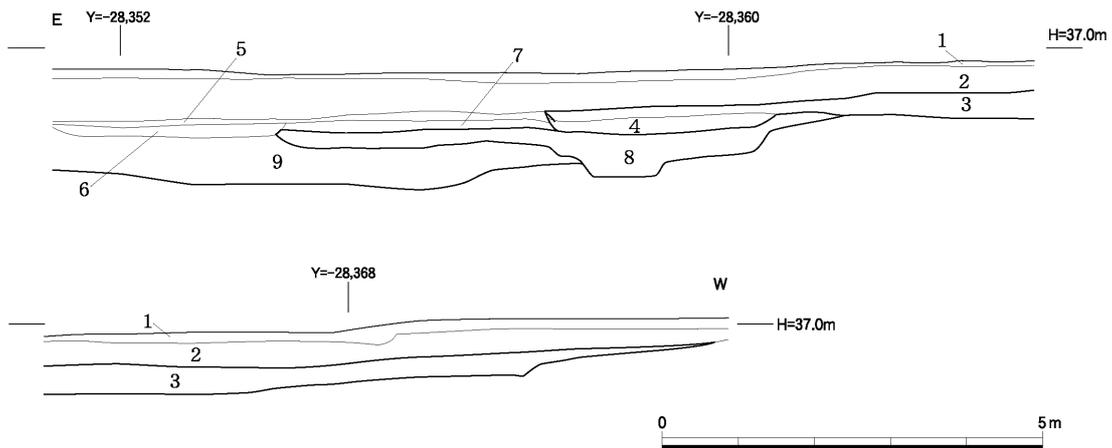


南壁断面

- | | | | |
|--------------------------|-----------------------------|--------------------------|-------|
| 1 オリーブ褐色砂泥やや粘質 | 溝2056 | 9 灰黄褐色砂泥焼土・炭・土師片含む | 溝2063 |
| 2 黒褐色砂泥 | | 10 にぶい黄褐色砂泥 | |
| 3 暗灰黄色砂泥焼土含む | 溝2056 | 11 にぶい赤褐色粘土φ0.2~5cm大礫含む | |
| 4 オリーブ褐色砂泥 | | 12 灰褐色粘土φ0.2~2cm大礫含む(地山) | |
| 5 灰黄褐色砂泥 | 13 にぶい黄褐色砂泥(地山) | | |
| 6 にぶい黄褐色粘質砂泥φ0.2~4cm大礫含む | 14 にぶい黄褐色粘土(地山) | | |
| 7 にぶい黄褐色砂泥 | 15 にぶい黄褐色粘土φ0.2~2cm大礫含む(地山) | | |
| 8 灰黄褐色砂泥 | | | |



図15 溝2056・2063断面図(1:100)



- | | | | |
|------------|--------------|----------------------|--------------|
| 1 褐色砂泥 | 河川487上層：長岡京期 | 6 灰黄褐色砂泥 | 河川487下層：古墳時代 |
| 2 にぶい黄褐色砂泥 | | 7 褐色砂泥 | |
| 3 灰黄褐色砂泥 | 河川487下層：古墳時代 | 8 黒褐色砂泥・褐色砂礫・褐色粗砂の互層 | |
| 4 褐色砂礫 | | 9 暗灰黄色砂礫 | |
| 5 灰色砂泥 | | | |

図16 河川487断面図(1:100)

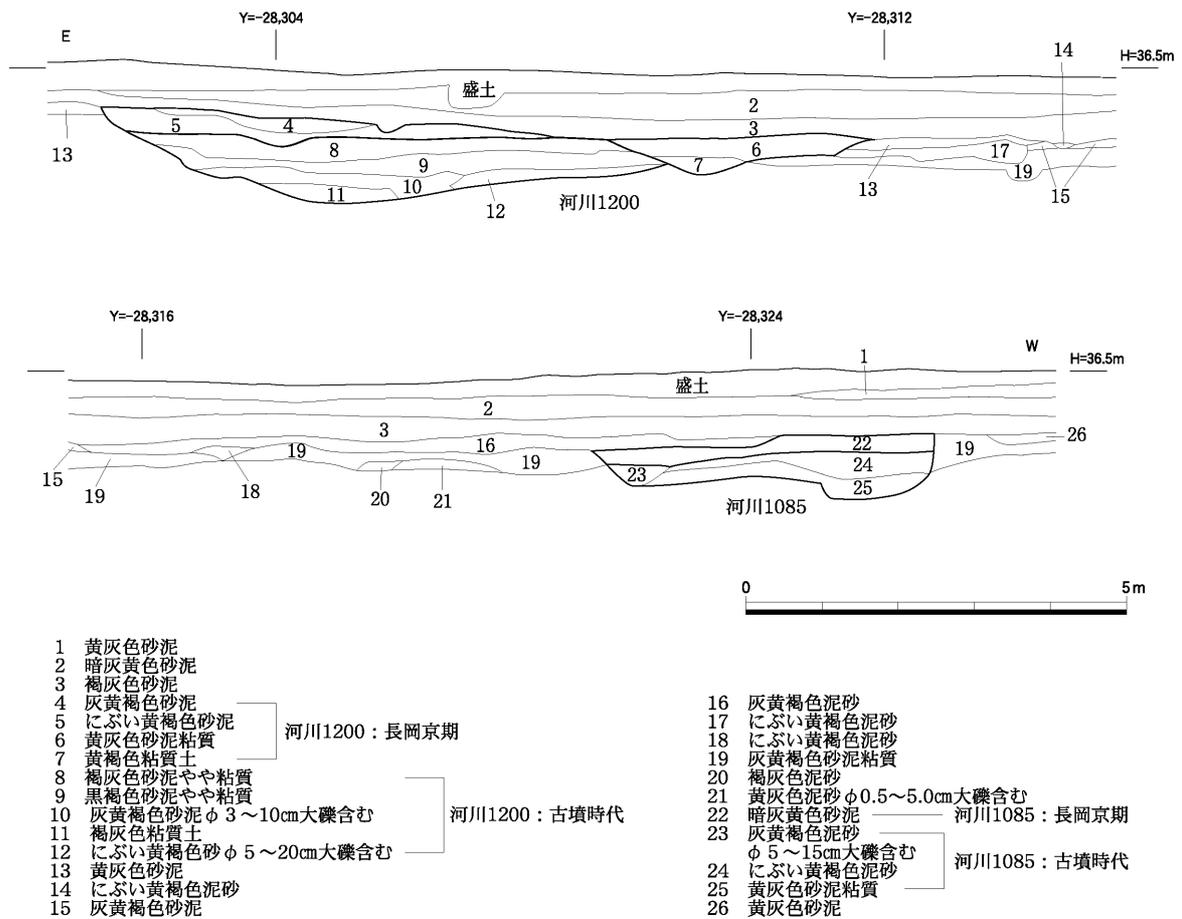


図17 河川1085・1200断面図（1：100）

下層は礫を含む黄褐色泥砂である。B区中央部での上層は、長岡京期の遺物が多いことから土層1038として取り上げた。出土遺物は後述する。

溝2063（図15、図版5） C区南部で15.4mにわたり検出した素掘り溝である。方位は北に対して西へ約42°振り、北西から南東に直線的に延びる。北端は溝2056に接続し、南端は調査区外に延びる。断面はU字形（幅約2.0m、深さ0.2~0.3m）である。埋土は3層に分かれ、上層が灰黄褐色砂泥、中層はにぶい黄褐色砂泥、下層はにぶい赤褐色粘土である。上層には焼土・炭・土師器小片を多く含む。出土遺物は後述する。

河川487下層（図16、図版2・24） A-3区東部を北西から南東方向に斜めに横切る自然河川である。規模は幅約8.0~23.0m・深さ約0.6~1.0mである。兩岸の傾斜はなだらかで、底部は平坦である。特に西岸に遺物が多くみられた。埋土は2層に分かれ、上層が灰黄褐色砂泥・褐灰色砂礫、下層は黒褐色砂泥・褐灰色砂礫・褐灰色粗砂の互層である。上層が長岡京期、下層が古墳時代にあたる。出土遺物は後述する。

河川1085下層（図17、図版3・25） B区西部を北西から南東方向に斜めに横切る自然河川である。規模は幅約7.0m、深さ0.8~1.0mである。兩岸の傾斜はなだらかで、底部は平坦である。埋土は3層に分かれ、上層は暗灰黄色砂泥、中層はにぶい黄褐色泥砂、下層は黄灰色砂泥である。上層が長岡京期、中層と下層が古墳時代にあたる。出土遺物は後述する。

河川1200下層（図17、図版3・4・25） 河川1085の東側に位置し、調査区を北東から南西に横切る自然河川である。規模は幅7.0～16.0m、深さ0.9～1.2mである。兩岸の傾斜は東側がなだらかであるが、西側は急である。底部は凹凸がかなりある。埋土は幾層にも分かれるが、主に黄褐色系砂泥が堆積する上層が長岡京期、褐灰色系砂泥が堆積する下層が古墳時代にあたる。出土遺物は後述する。

柱穴群 上記の遺構以外に、古墳時代と考えられる柱穴群を調査区全域で検出した。建物などの痕跡と推定されるが、まとまらない。

（3）奈良時代・長岡京期の遺構

掘立柱建物238（図18、図版8・18） A-3区西端部で検出した掘立柱建物である。東西3間（5.2m）・南北2間（4.2m）の東西棟で、東庇が付く。桁行方向の柱間は東から1.9m・1.6m・1.7m、梁間方向の柱間は北から2.0m・2.2mで、庇は東に2.2m出る。身舎の柱穴掘形は、円形で径約0.6m・深さ0.2～0.3m。庇の柱穴は身舎よりやや小さい。方位は北に対して西に6°振る。北側柱筋は、溝4中心から南4.45mに位置する。

柱穴掘形から土師器・須恵器が少量出土した。土師器は小片のため器形は特定できない。須恵器には杯B・杯B蓋・壺がある。

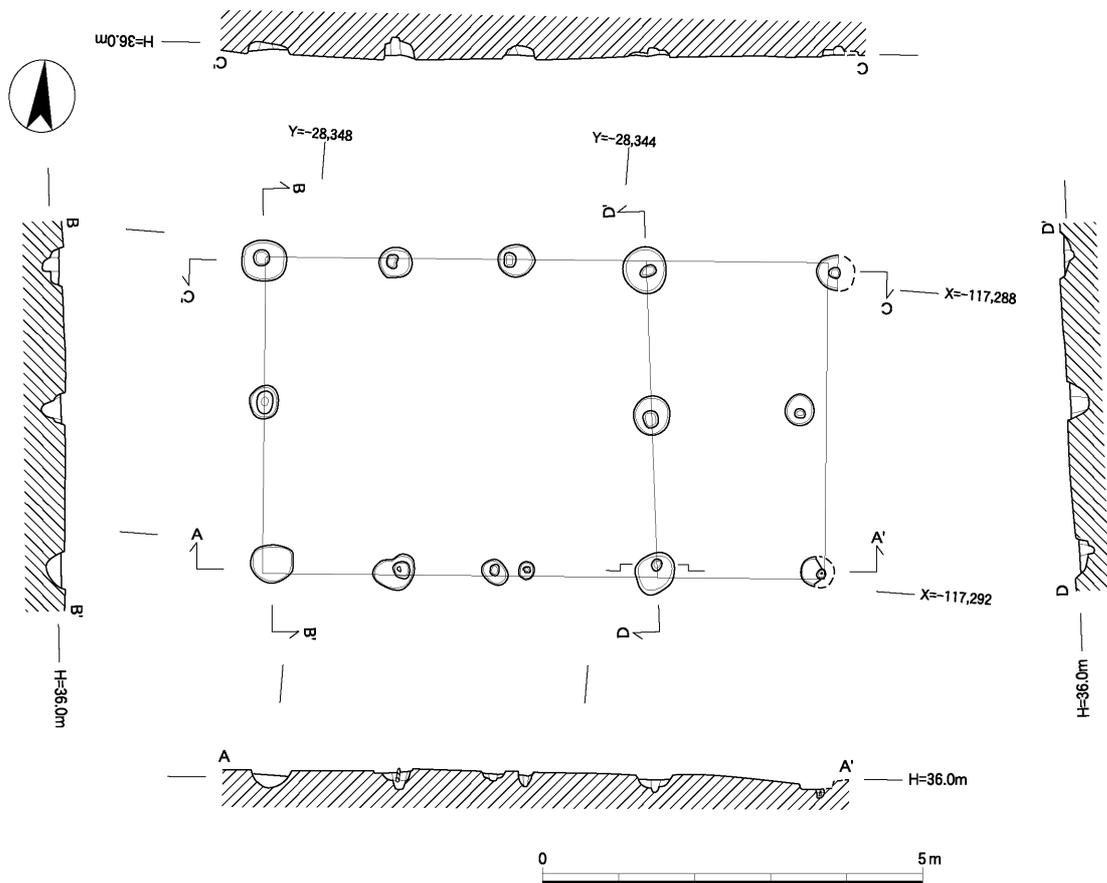


図18 掘立柱建物238実測図（1：100）

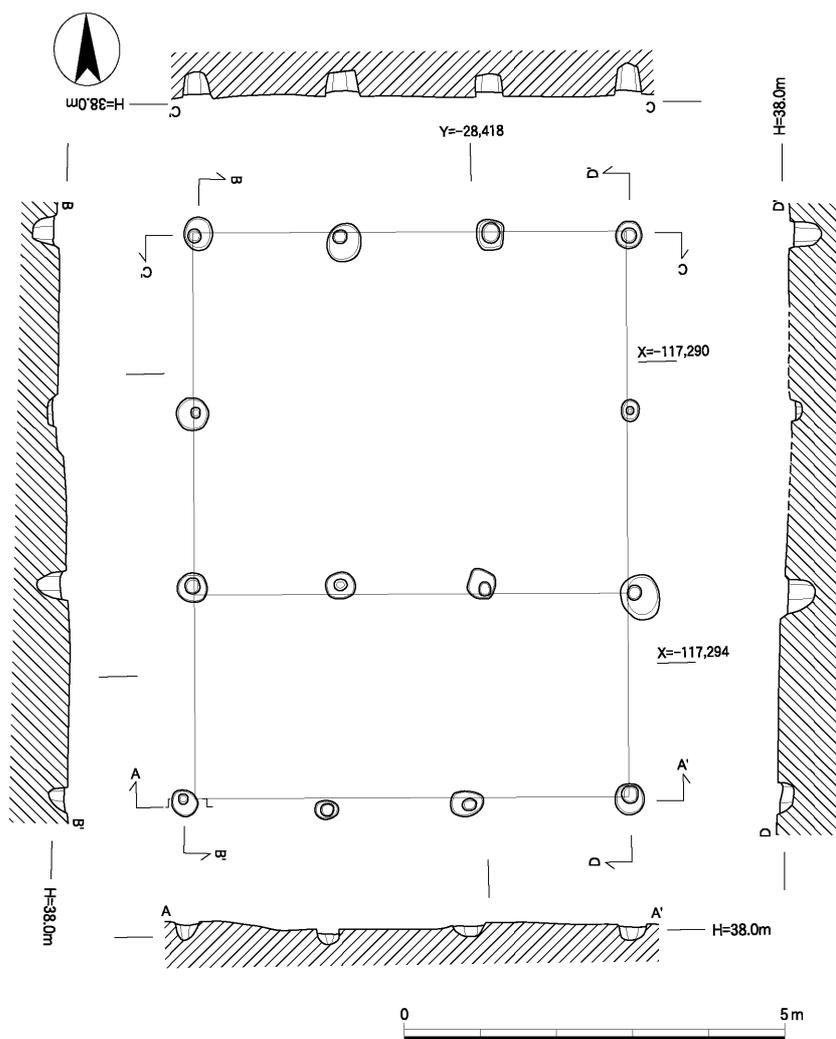


図19 掘立柱建物269実測図（1：100）

掘立柱建物269（図19、図版6・18） A-1区中央部で検出した掘立柱建物である。東西3間（5.7m）・南北2間（4.8m）の東西棟で、南底が付く。桁行方向の柱間は1.9m等間、梁間方向の柱間は2.4m等間で、底は南に2.7m出る。身舎の柱穴掘形は径0.4～0.5m・深さ0.3～0.5mの円形または方形で、底の柱穴は身舎よりやや小さい。北側柱筋は、溝4中心から南4.4mに位置する。

柱穴掘形から土師器・須恵器の小片が少量出土した。土師器には皿A・甕、須恵器には杯Bがある。

掘立柱建物1106（図20、図版9・19） B区中央部で検出した掘立柱建物である。東西5間（12.0m）・南北2間（4.8m）の東西棟である。桁行方向の柱間は東から2.3m・2.4m・2.4m・2.4m・2.5m、梁間方向の柱間は2.4m等間である。間仕切り柱が西から2間目中央に建ち、建物を桁行2間と3間に分ける。身舎の柱穴掘形は、一辺約0.7m・深さ0.3～0.4mの方形または楕円形。間仕切り柱は円形で径0.5m・深さ0.15mと小さい。北東部に柵1103が位置する。北側柱筋は、溝4中心から南8.3mに位置する。

柱穴掘形・柱痕跡などから土師器・須恵器・瓦の小片が出土した。土師器には椀A・甕A、須恵器には壺Lがある。

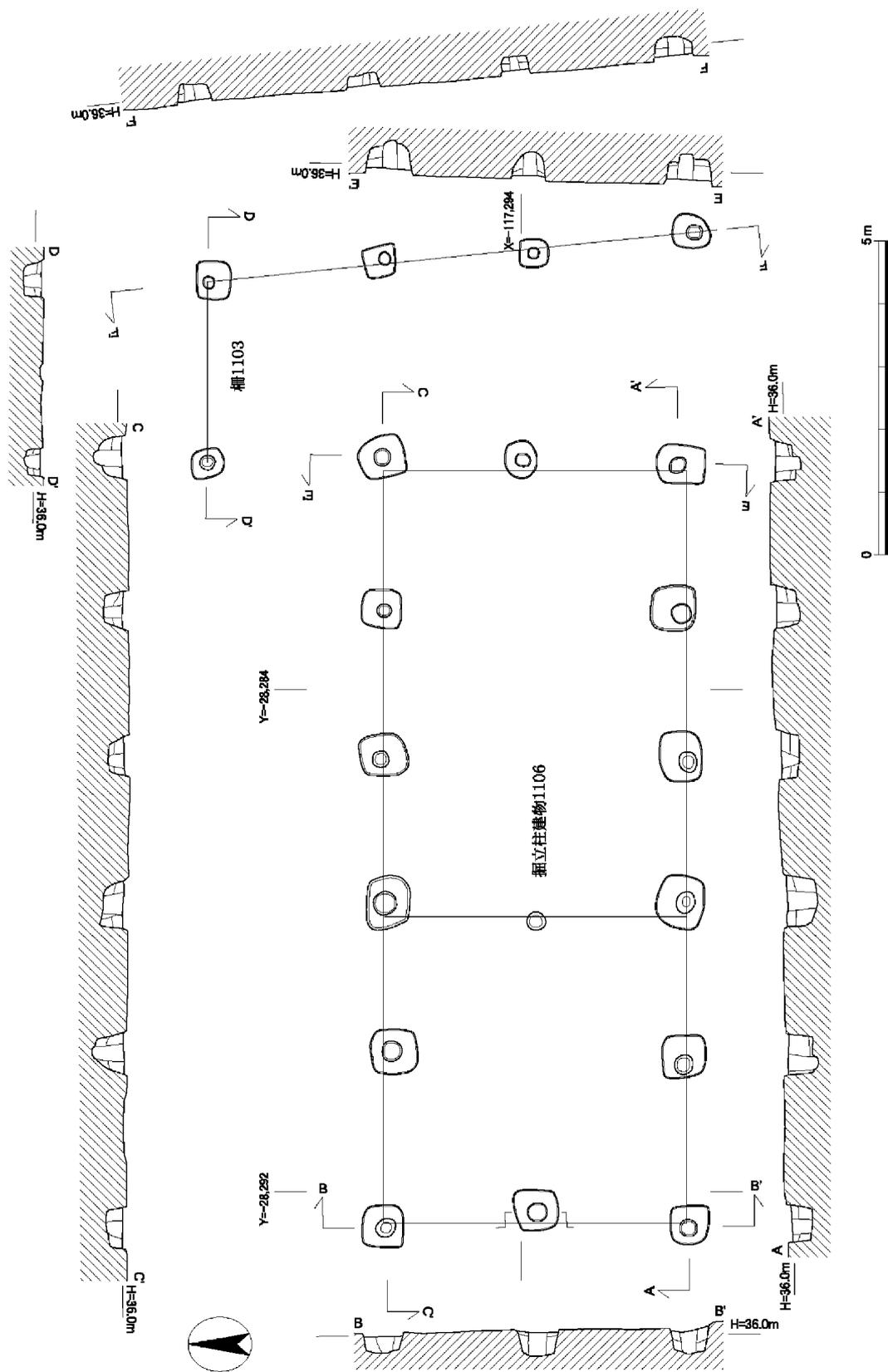


图20 掘立柱建物1106・柵1103实测图(1:100)

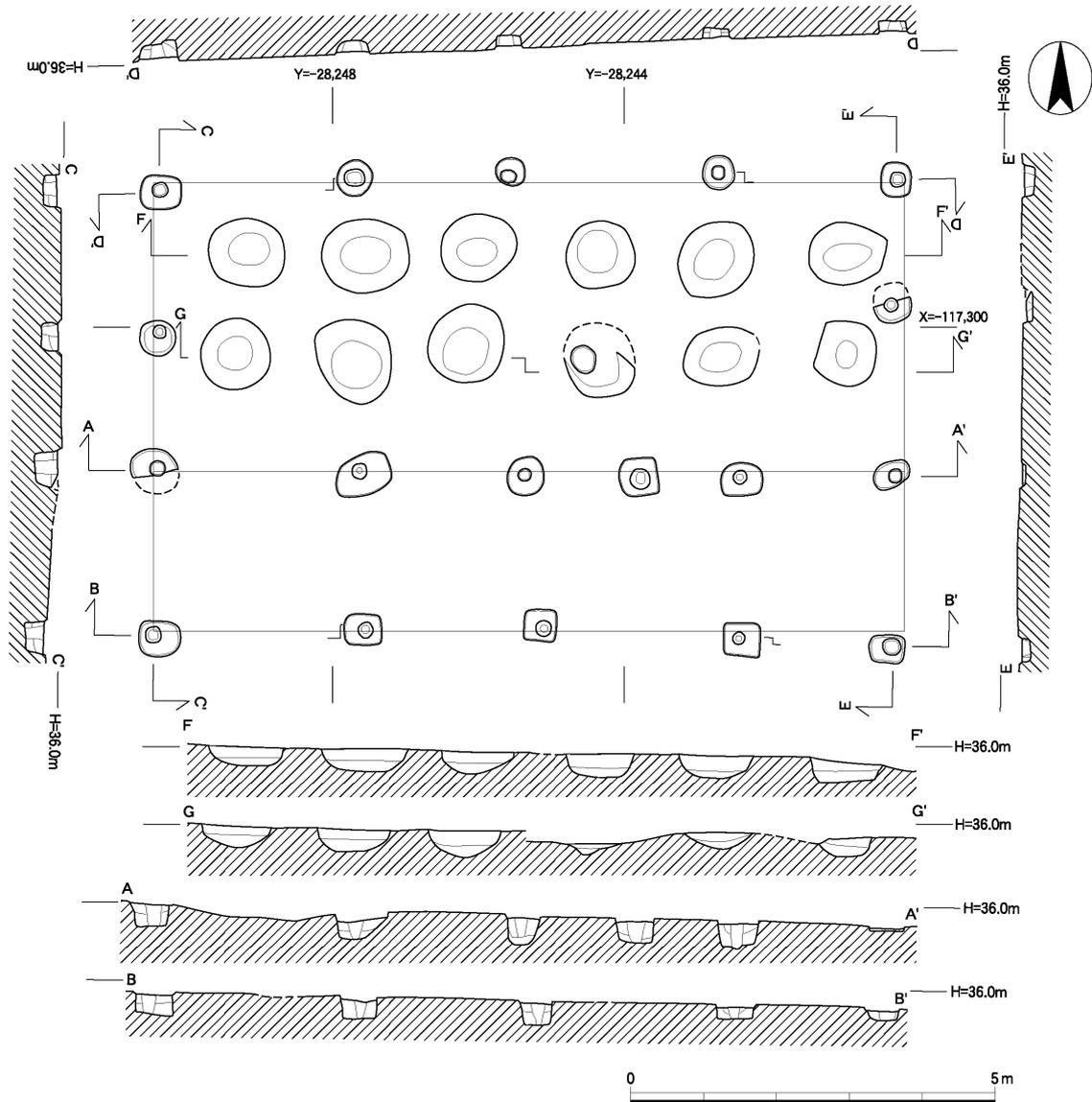


図21 掘立柱建物1139実測図（1：100）

掘立柱建物1139（図21、図版10・20） B区南東部で検出した掘立柱建物である。東西4間（10.3m）・南北2間（4.0m）の東西棟で、南底が付く。桁行方向の柱間は東から2.5m・2.9m・2.2m・2.7m、梁間方向の柱間は2.0m等間で、底は南に2.2m出る。身舎の柱穴掘形は、一辺約0.5m・深さ0.2~0.4mの方形または楕円形で、底の柱穴は身舎よりやや小さい。身舎内部床面の北寄りには、径1.0~1.2m・深さ0.25~0.4mの挿鉢状に凹む円形土壇が、東西1列に6基が南北2列に規則的に並ぶ。北側柱筋柱穴と西側柱筋柱穴が、掘立柱建物1283の北側柱筋柱穴と西側柱筋柱穴と重複し、掘立柱建物1283を削平する。北側柱筋は、掘立柱建物1299の北側柱筋にほぼ揃う。北側柱筋は、溝4中心から南14.5mに位置する。

柱穴掘形から土師器・須恵器の小片が少量出土した。器形は特定できない。

掘立柱建物1156（図22、図版9・10・19） B区中央部で検出した掘立柱建物である。東西2間（4.0m）・南北3間（6.0m）の南北棟である。桁行・梁間方向の柱間は2.0m等間である。身

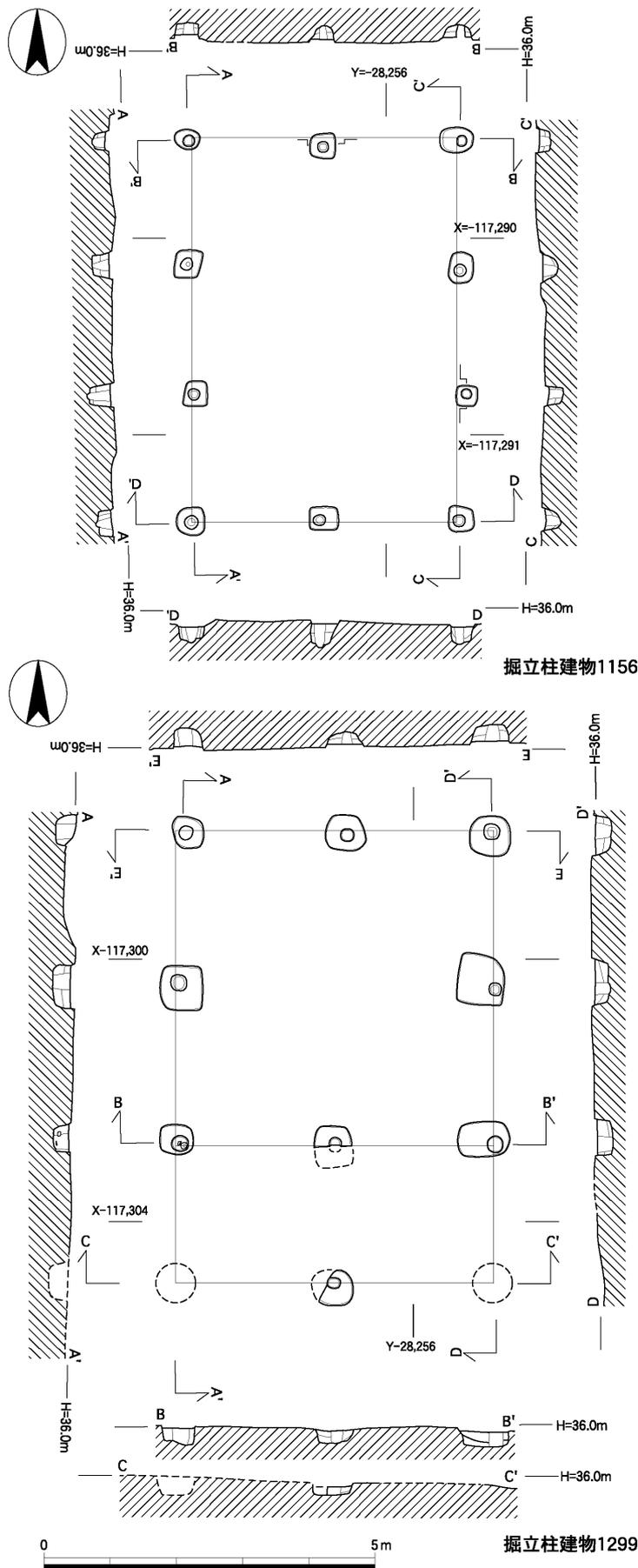


図22 掘立柱建物1156・1299実測図（1：100）

舎の柱穴掘形は、一辺約0.4m・深さ0.3~0.4mの方形である。東側柱筋は、掘立柱建物1299の東側柱筋にほぼ揃う。北側柱筋は、掘立柱建物1311の北側柱筋とほぼ揃う。北側柱筋は、溝4中心から南5.1mに位置する。

柱穴掘形から土師器・須恵器の小片が少量出土した。器形は特定できない。

掘立柱建物1283（図23、図版10・20・21） B区南東部で検出した掘立柱建物である。東西5間（12.0m）・南北2間（5.0m）の東西棟で、南庇が付く。桁行方向の柱間は2.4m等間、梁間方向の柱間は2.5m等間で、庇は南に2.8m出る。身舎の柱穴掘形は、一辺約0.8m・深さ0.3~0.5mの方形で、庇の柱穴も同様の規模である。柱穴には柱根の残るものがあった。北側柱筋は、掘立柱建物1299の北側柱筋にほぼ揃う。南側柱筋および南庇柱筋は、掘立柱建物2028の南側柱筋および南庇柱筋と揃う。東側柱筋と掘立柱建物2028の西側柱筋との距離は2.1mである。東側柱筋が九町の東西中心のラインにほぼあたる。北側柱筋柱穴と西側柱筋柱穴が、掘立柱建物1139の北側柱筋柱穴と西側柱筋柱穴によって削平される。北側柱筋は、溝4中心から南14.5mに位置する。

柱穴掘形から土師器・須恵器の

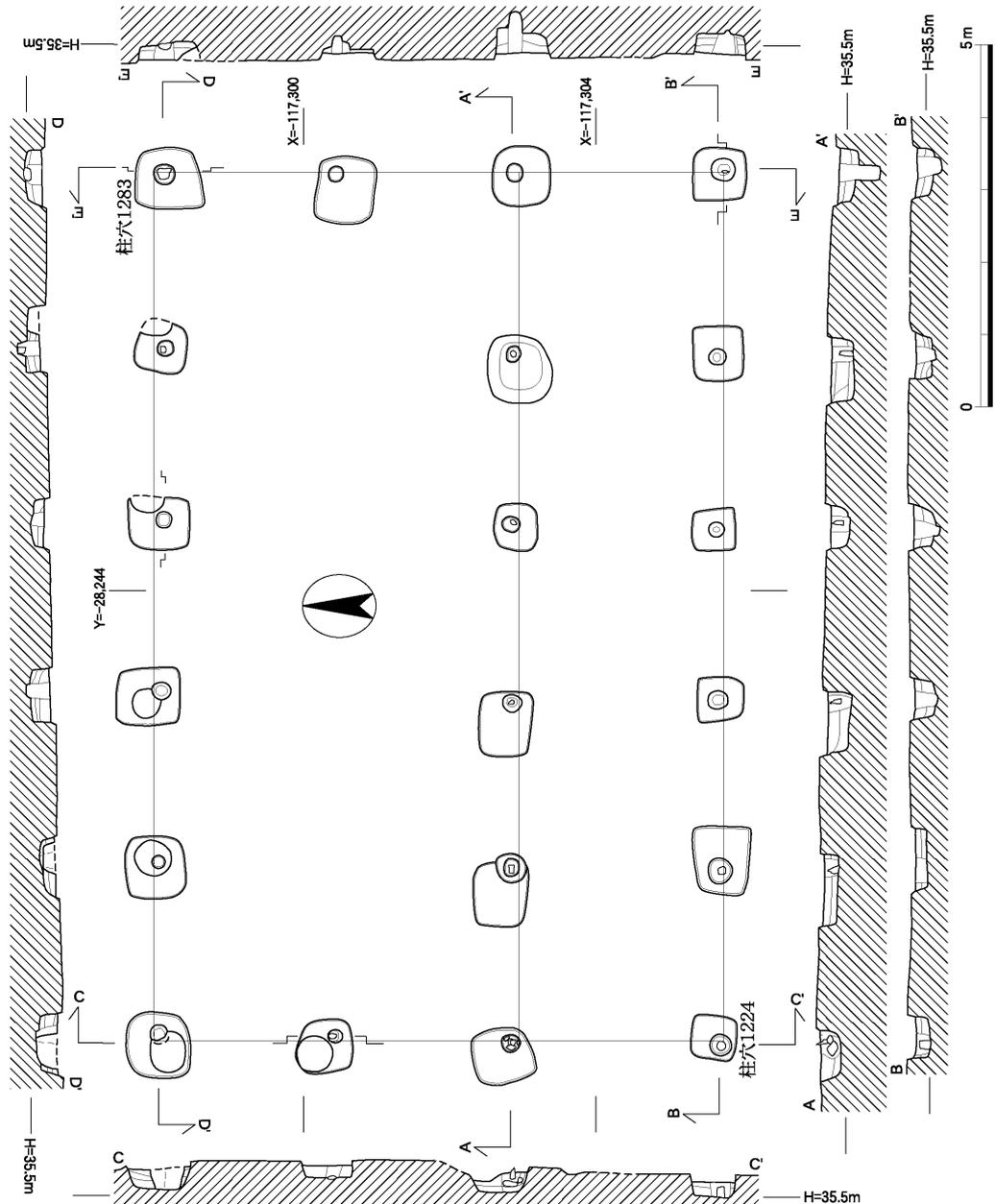


図23 掘立柱建物1283 (1 : 100)

小片が少量出土した。器形は特定できない。

掘立柱建物1299 (図22、図版9・10) B区中央南部で検出した掘立柱建物である。東西2間(4.4m)・南北2間(4.8m)の南北棟で、南底が付く。東西方向の柱間は2.2m等間、南北方向の柱間は2.4m等間で、底は南に2.1m出る。身舎の柱穴掘形は、径約0.4~0.8m・深さ0.2~0.3mの円形または楕円形である。北側柱筋は、掘立柱建物1139・1283の北側柱筋にほぼ揃う。東側柱筋は、掘立柱建物1156の東側柱筋とほぼ揃う。北側柱筋は、溝4中心から南14.5mに位置する。

柱穴掘形から土師器・須恵器の小片が少量出土した。土師器には杯A・椀A、須恵器には甕がある。

掘立柱建物1311 (図24、図版9) B区中央北部で検出した掘立柱建物である。東西2間(4.0

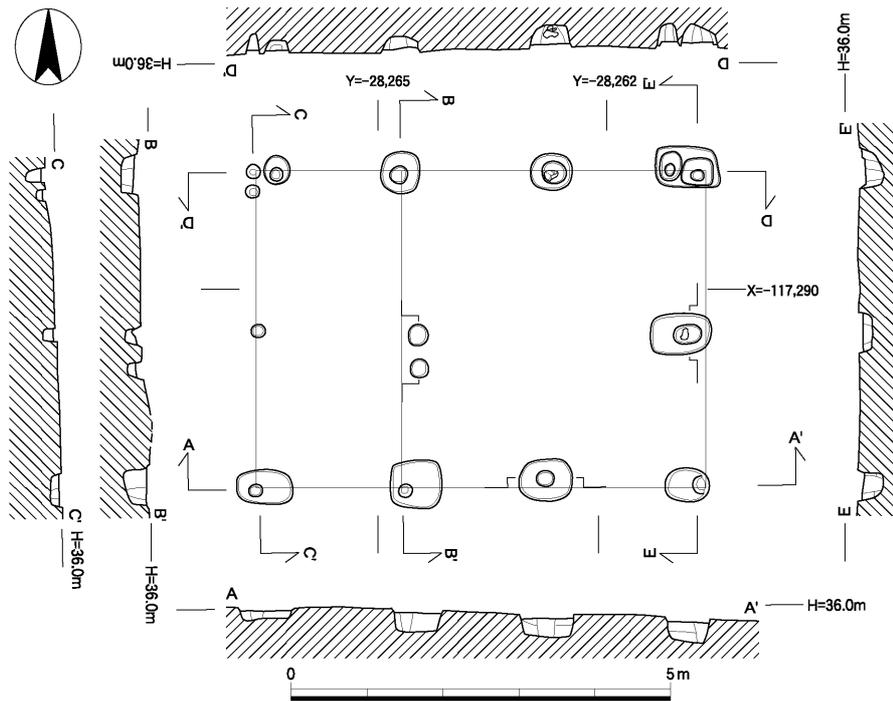


図24 掘立柱建物1311実測図（1：100）

m)・南北2間(4.2m)の南北棟で、西庇が付く。桁行方向の柱間は2.0m等間、梁間方向の柱間は2.0m等間で、庇は西に2.0m出る。身舎の柱穴掘形は、不定形で径0.4~0.8m・深さ0.2~0.3mである。庇の柱穴は身舎に比べ小さい。北側柱筋は、掘立柱建物1156の北側柱筋とほぼ揃う。北側柱筋は、溝4中心から南5.1mに位置する。

柱穴掘形から土師器・須恵器の小片が少量出土した。器形は特定できない。

掘立柱建物2028 (図25、図版10・20・21) C区南西部で検出した掘立柱建物である。東西3間(6.3m)・南北2間(4.4m)の東西棟で、南庇が付く。桁行方向の柱間は2.1m等間、梁間方向の柱間は2.2m等間で、庇は南に2.8m出る。身舎の柱穴掘形は、一辺約0.8m・深さ0.5~0.8mの方形で、庇の柱穴も同様の規模である。柱穴には柱根の残るものがあった。柱穴1282・2026には木製礎板が敷かれ、柱の沈下を防止していた。柱穴1282の礎板下方では北西から別の板が挟み込まれて柱を支える。柱穴2026では礎板を2枚重ねて柱を支える。南側柱筋および南庇柱筋は、西接する掘立柱建物1283の南側柱筋および南庇柱筋と揃うが、北側柱筋は、約0.5m南へずれる。西側柱筋と掘立柱建物1283の東側柱筋との距離は2.1mであった。北側柱筋は、溝4中心から南15.0mに位置する。

柱穴掘形から土師器・須恵器・瓦の小片が少量出土した。土師器には皿A・椀A・甕、須恵器には杯B・壺・甕がある。柱痕跡から瓦の小片が出土した。

掘立柱建物2045 (図版10) C区中央南寄りで検出した掘立柱建物である。東西4間(8.8m)・南北1間(2.1m)の東西棟である。桁行方向の柱間は東から2.4m・2.1m・2.2m・1.9m、南北方向の柱間は2.1mである。身舎の柱穴掘形は、一辺約0.4~0.6m・深さ0.2~0.4mの方形である。北側柱筋は、掘立柱建物2028の北側柱筋と揃う。北側柱筋は、溝4中心から南15.3mに位

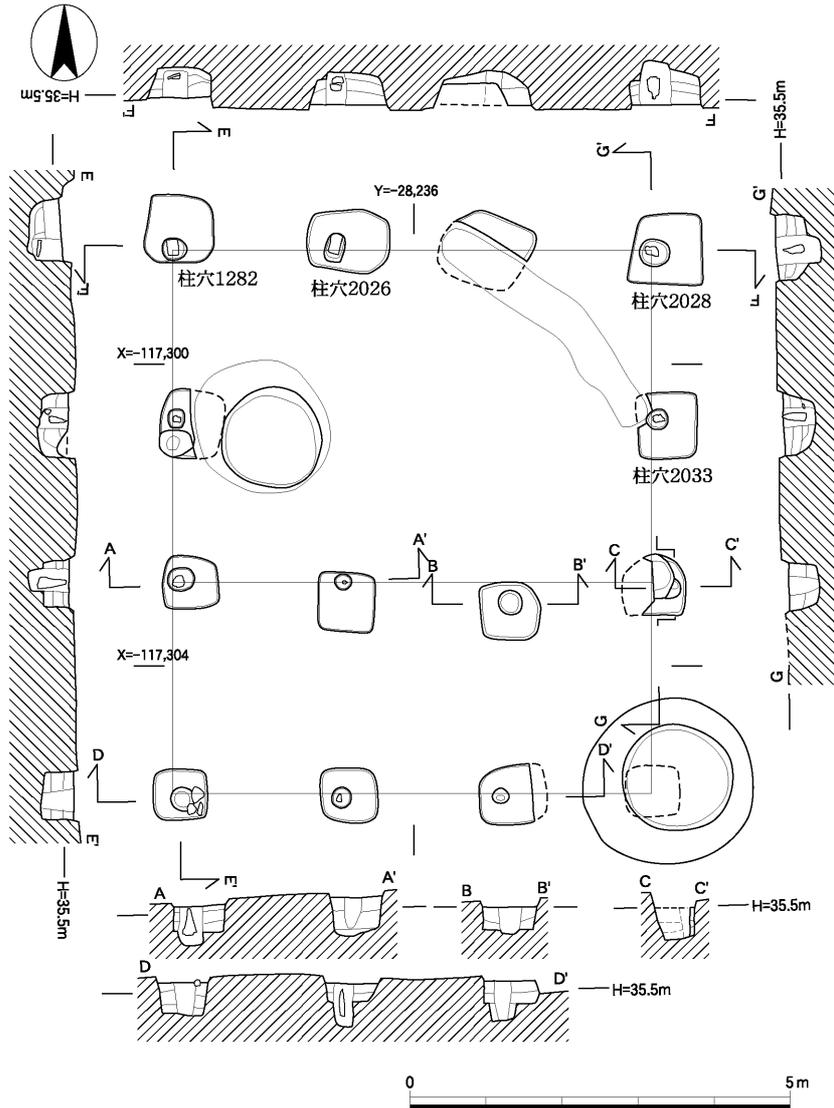


図25 掘立柱建物2028 (1 : 100)

置する。

柱穴掘形から土師器・須恵器の小片が少量出土した。器形は特定できない。

柵279 (図版6) A-1区南部で検出した東西方向の柵列で、溝4の中心から南へ16.0mに位置する。検出長は25.3mである。東端は調査区外へ延びる。柱間寸法は、2.5~2.8mである。柱穴掘形は円形で径約0.3m・深さ0.1~0.45m。

柱穴掘形から土師器・須恵器の小片が少量出土した。土師器は小片のため器形は特定できない。須恵器には杯B・壺J・甕がある。

柵280 (図26、図版6・24) A-1区およびA-4区西部で検出した南北方向の柵列で、北端は東西方向の柵322と接続する。検出長は7間分(20.0m)である。柱間寸法は、2.8~3.0mである。柱穴は径約0.4m・深さ0.07~0.23mの円形で、掘形は削平を受けた可能性もある。西側には溝などの施設は検出できなかったが、削平された可能性もある。北端の座標はX=-117,284.98・Y=-28,431.96である。柱穴からは遺物は出土していない。

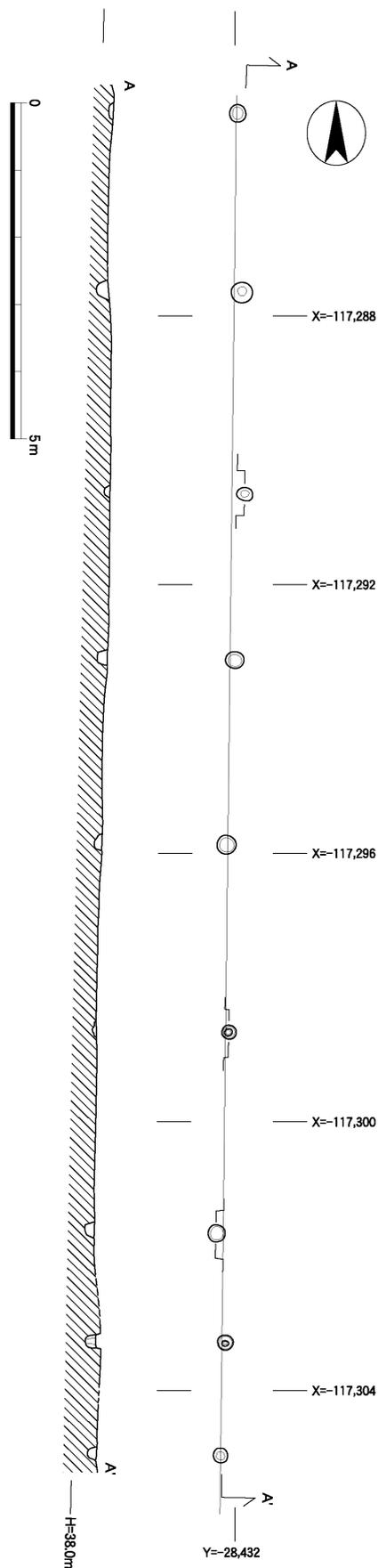


図26 柵280実測図 (1 : 100)

柵322 (図版6) A-1区北端部で検出した東西方向の柵列で、溝4の中心から南へ1.1mに位置する。検出長は27.4mである。西端は南北柵列280と接続し、東端は調査区外へ延びる。柱間寸法は、2.8m前後である。柱穴掘形は円形で径約0.3m・深さ0.08~0.16m。柱間寸法はあわないが、A-2区にある柱穴121も同一ライン上にある。

柱穴掘形から土師器・須恵器の小片が少量出土した。器形は特定できない。

柵1103 (図20、図版9・19) B区中央部で検出したL字状に並ぶ柵列で、掘立柱建物1106の北東部に位置する。東西に1間(2.8m)、南北に3間(7.8m)、南北柱間寸法は2.6m等間である。柱穴掘形は、不定形で一辺0.5m~0.6m・深さ約0.3~0.55m。南北柱筋は北に対して西へ5°振る。北柱筋は溝4中心から南5.4mに位置する。柱穴掘形から土師器甕の小片が出土した。

柱穴列1268 (図版9・10) B区南端部で検出した東西方向の柱穴列で、掘立柱建物1299と掘立柱建物1139の南に位置する。検出長は8間分である。柱間寸法は不揃いで2.0~2.6mである。柱穴掘形は、一辺約0.3~0.5m・深さ0.3~0.4mの方形である。不揃いであることから、掘立柱建物北側柱列となるか、柵となるかは不明である。柱筋は、溝4中心から南24.8mに位置する。

柱穴掘形から土師器・須恵器の小片が少量出土した。土師器には甕Aがある。須恵器は小片のため器形は特定できない。

柱穴列2074 (図版10) C区中央南端で3基の柱穴を検出した。南へ展開する掘立柱建物もしくは東西柵列と推定できる。東西方向の柱間は2.0m等間である。柱穴掘形は、隅丸方形で一辺約0.4~0.5m・深さ0.3m。柱筋は、溝4中心から南4.0mに位置する。

柱穴掘形から土師器・須恵器の小片が少量出土した。土師器は小片のため器形は特定できない。須恵器には杯がある。

柱穴列2011 (図28、図版9・10・23) B・C区北辺で調査区東端から河川1200の間、東西72.5mにわたり検

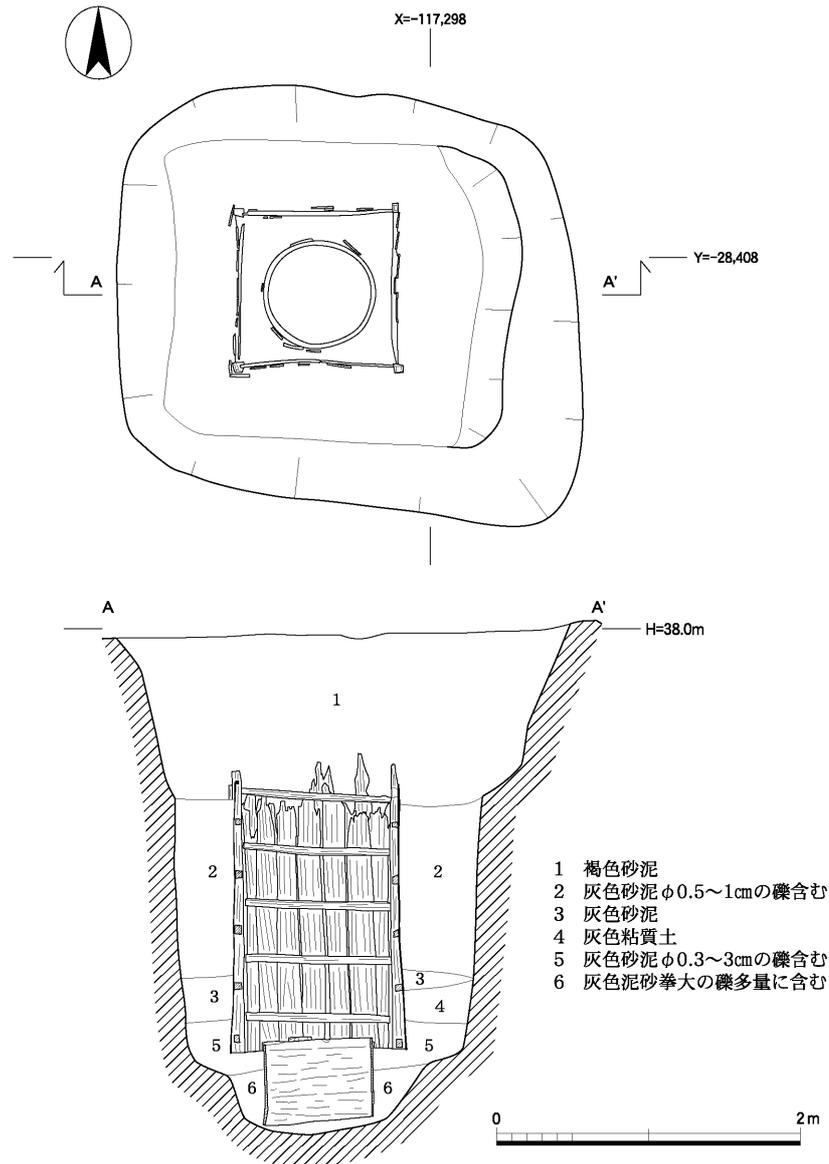
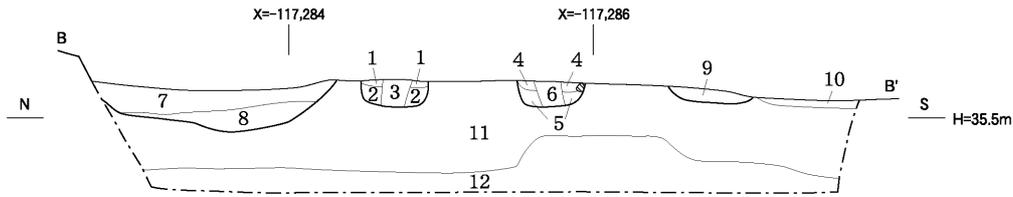


図27 井戸43実測図 (1 : 50)

出した遺構である。西は河川1200に削平され、東は調査区外へ延びる。溝4と溝1020との間は、3.2~3.4mの幅があり、このほぼ中央で一辺0.3~0.5m、深さ約0.2mの隅丸方形の柱穴を幅約1.0mで南北に2基並んで検出した。これらの柱穴は東西方向に12対並んでいて、その間隔は東から、6.2m・6.3m・6.1m・6.2m・6.7m・6.0m・5.8m・6.1m・6.0m・8.0m・7.1mである。掘形内の柱当りはやや内傾する。最西端の柱穴心々の座標は、X=-117,285.76・Y=-28,285.82、最東端の柱穴心々は、X=-117,285.22・Y=-28,215.18である。

柱穴掘形から土師器・須恵器の小片が少量出土した。器形は特定できない。

井戸43 (図27、図版6・22) A-1区南東部で検出した方形縦板組隅柱横棧留め井戸で、掘立柱建物269の南東に位置する。掘形は隅丸方形で一辺2.7m~3.0m・深さ3.35mである。横棧は一辺1.05mで5段残存する。横棧を一辺0.09mの隅柱に目違いホゾで組み、東西方向と南北方向で段差をつけて設定する。縦板は幅約0.17m・長さ1.7~1.95m残存。各面に6~7枚用い、各面の



※B-B'の位置は図版10参照

- | | | |
|------------|-----------------------------|-----|
| 1 にぶい黄橙色砂泥 | 7 暗灰黄色砂泥 | 溝 4 |
| 2 にぶい黄褐色砂泥 | 8 灰黄褐色砂泥 | |
| 3 黄褐色砂泥 | 9 にぶい黄褐色砂泥-溝1020 | |
| 4 にぶい黄褐色砂泥 | 10 暗灰黄色砂泥 | |
| 5 暗灰黄色砂泥 | 11 褐色砂泥 (地山) | |
| 6 にぶい黄褐色砂泥 | 12 暗褐色砂泥φ 3~5cmの礫多量に含む (地山) | |



図28 柱穴列2011・溝4・溝1020断面図 (1:50)

裏側に板材をさらに重ねる。掘形底部に径0.7m・深さ0.6mの円形曲物を据える。出土遺物は後述する。

土壌411 (図版6) A-1区中央南部で検出した土壌で、掘立柱建物269、柵列279の南側に位置する。掘形は円形 (径0.7m・深さ0.7m) である。埋土は暗褐色砂泥で、掘形から土師器・須恵器の小片が少量出土した。土師器には皿Aがある。須恵器は小片のため器形は特定できない。

土壌488 (図30、図版7・22) A-3区中央部で検出した土壌で河川487の西岸に位置する土壌である。掘形は方形 (一辺0.95m・深さ0.76m) である。掘形内に四方を片ほぞ組した板材 (一辺0.7m・高さ0.47m) を据える。底板はない。埋土は上層では泥砂の混じった黄灰色粘土、下層は暗灰黄色砂礫である。出土遺物は後述する。

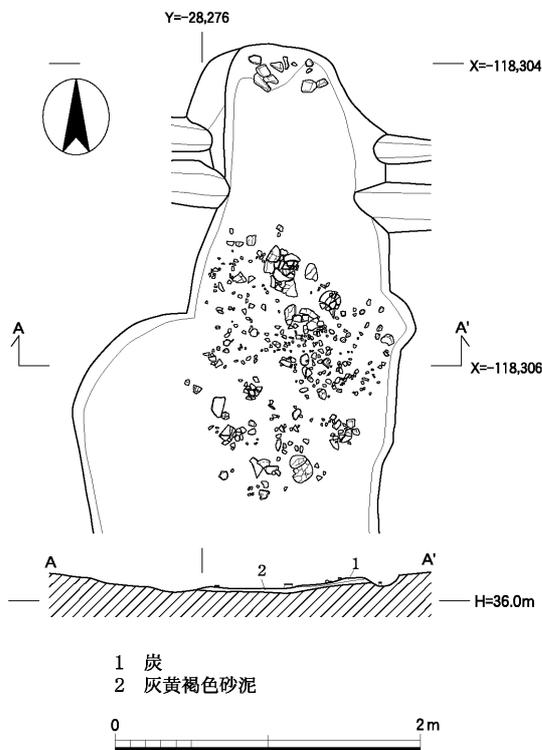


図29 土壌1252実測図 (1:50)

土壌689 (図版7) A-5区南辺で検出した土壌である。掘形は不定形で東西1.45m・深さ1.1m。土壌内部には人頭大の石が漏斗状に組まれていた。埋土は3層に分かれ、上層は黒褐色砂泥、中層は褐灰色粘質土、下層は黄灰色粘質土である。

中層から土師器・須恵器の小片が少量出土した。土師器には皿A・甕Aがある。須恵器は小片のため器形は特定できない。

土壌1038 (図版10) B区中央部で検出した土壌で、掘立柱建物1139の北側、掘立柱建物1156の下層に位置する。掘形は不定形で、東西約20m・南北7.0m・深さ0.4m、底部は平坦である。埋土はにぶい黄褐色砂泥であった。溝

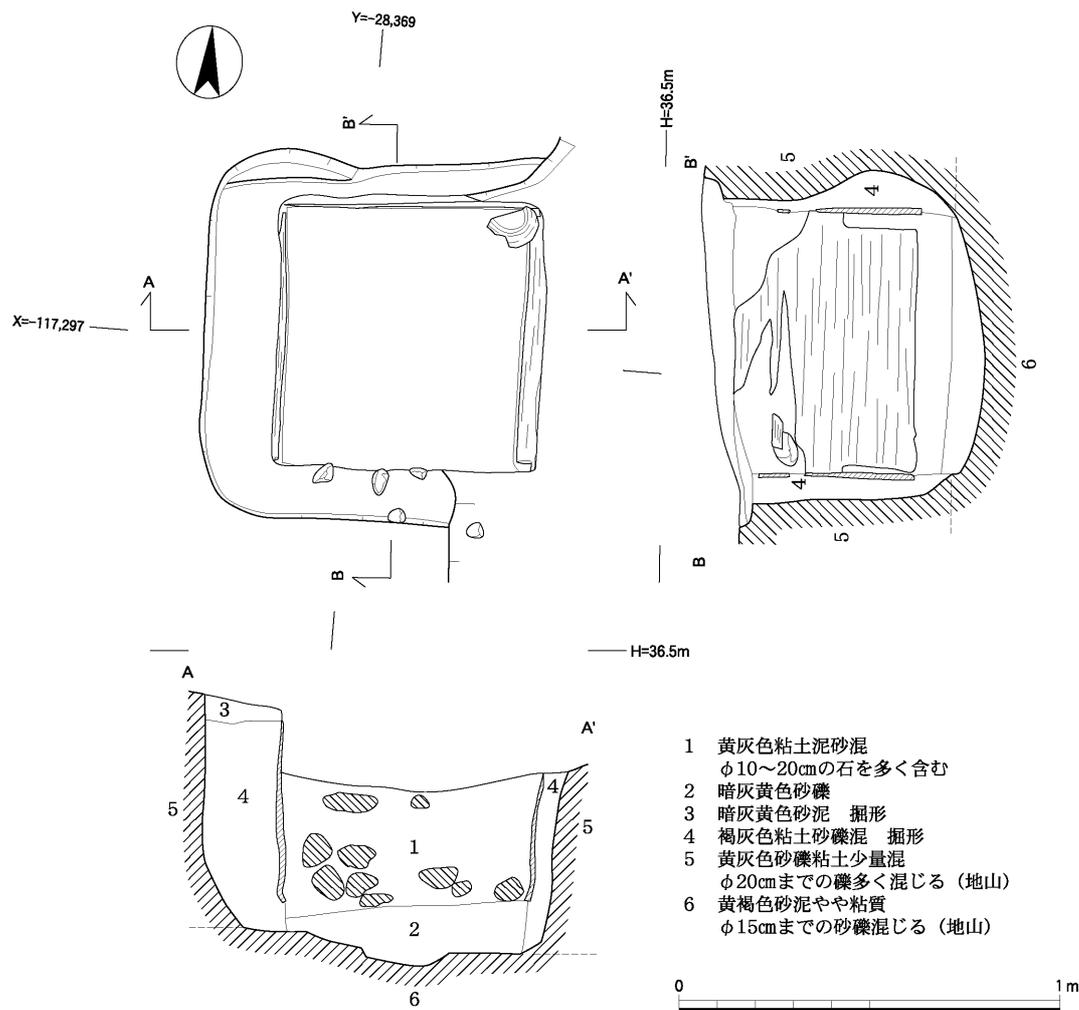


図30 土壌488実測図 (1 : 20)

2056と重複し、長岡京期まで残存していた溝の凹みを長岡京造営時に整地したと推定できる。出土遺物は後述する。

土壌1132 (図版9) B区中央部で検出した土壌で、掘立柱建物1106の南東、掘立柱建物1311の南西、掘立柱建物1299の西側に位置する。掘形は南北に細長い不定形で東西2.6m・南北8.3m・深さ0.3m。底部は平坦である。埋土は灰黄色砂泥で、炭・遺物を多量に包含する。出土遺物は後述する。

土壌1252 (図29、図版9) B区中央南部で検出した土壌である。南は調査区外へ延びる。掘形は不定形で東西2.2m・南北4m以上・深さ0.2m。底部は平坦である。埋土は灰黄褐色砂泥で、炭・遺物を多量に包含する。出土遺物は後述する。

土壌1274 (図版9) B区中央南部で検出した土壌で、掘立柱建物1299の南底から南へ0.7mに位置する。掘形は隅丸方形で一辺0.5m、深さ0.15m。埋土は灰黄褐色砂泥で、掘形から土師器の皿A・高杯・甕が出土した。

土壌1328 (図版9) B区中央南部で検出した土壌で、掘立柱建物1106の南西、河川1200の肩部にあって河川1200に削平される。掘形は不定形で東西6.3m・南北10.1m・深さ0.05mと非常

に浅く、底部は平坦である。埋土は暗灰黄色砂泥で炭・遺物を多量に包含する。出土遺物は後述する。

溝4 (図28、図版6～10・23・24) A・B・C区北辺で検出した東西方向の素掘り溝である。途中で途切れながらも、東西は調査区外へ延びる。A-1区西端では幅0.46m、深さ0.07mで断面はU字形である。B区中央部では深さ0.1m、C区東端では深さ0.26mである。A区中央では河川487に、B区西部では河川1085・1200に削平される。北肩は、調査区外となるためほとんど検出できなかったが、1箇所Y=-28,257.00地点で検出できた。溝の中心の座標はX=-117,283.66である。底部の標高はA-1区西端では38.19m、A-3区東端では36.03m、C区東端では35.43mで、東側に傾斜する。

埋土から土師器・須恵器・瓦の小片が少量出土した。土師器には皿A・杯B・高杯A・甕A、須恵器には杯B・壺G・壺M・盤Aがある。

溝1020 (図28、図版9・10・23) B・C区北辺、溝4の南側で約3.2m離れて検出した東西方向の素掘り溝である。西端は河川1200に削平され東は調査区外に延びる。断面はU字形(幅0.3～1.0m・深さ約0.1m)である。幅は0.5～1.0mと不定で、底には凹凸がある。途中で途切れる箇所がある。

埋土から土師器・須恵器・瓦の小片が少量出土した。土師器には皿A・椀A・高杯脚部、須恵器には杯A・杯B・甕がある。

河川487上層 (図16、図版7・24) A-3区東部で検出した自然河川である。調査区を北から南へ横切り、南に延びる。規模は、幅約13.5m、検出面からの深さ0.7mである。両岸の傾斜はなだらかで、特に西岸に遺物が多くみられる。

出土遺物は後述する。

河川1085上層 (図17、図版8・25) B区西部で検出した自然河川である。調査区を北西から南東へ斜めに横切る。規模は、幅約7.0m、検出面からの深さ約0.2～0.3mである。出土遺物は後述する。

河川1200上層 (図17、図版8・9・25) B区河川1085の東側に位置し、調査区を北から南に横切る自然河川である。規模は、幅11.0～25.0m、検出面からの深さ0.5mである。両岸の傾斜は非常になだらかであった。途中から二股に分かれる。出土遺物は後述する。

柱穴群 上記の遺構以外に、長岡京期と考えられる柱穴群を調査区全域で検出した。建物などの痕跡と推定されるが、まとまらない。

註

- 1) 須恵器の編年については田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966年を参考にした。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

調査ではA～C区併せて、整理箱コンテナに277箱の遺物が出土した。出土遺物には土器類・瓦類・木製品・金属製品・石製品などの種類がある。その大半は土器類が占め、その他の器種はごくわずかである。

遺物はそのほとんどが古墳時代から連綿と継続する河川から出土したが、他に土壙・溝・建物などからも出土したが量的には少ない。時期的には古墳時代のものが多く、奈良時代から長岡京期がそれに次ぎ、長岡京期以降の遺物も少量出土した。

今回の調査では、出土遺物の量や出土遺構に偏りがあるため、報告では、ある程度まとまって出土した遺物を図示し概要を述べるにとどめる。なお遺物の掲載順は遺構の種類、調査時の遺構番号順とした。個々の遺物の詳細については、巻末の付表に記した。

(2) 土器類

弥生時代の土器類は、河川1200などから少量出土した。器形は高杯・器台・甕などがある。出土遺物の遺存状態は悪く、小片のため図示できるものはない。

古墳時代の遺物は、河川487・1085・1200、土壙1328・350、溝2056などからまとまって出土したが、堅穴住居や掘立柱建物からはほとんど出土していない。器種には土師器・須恵器があるが、川跡という遺構の性格上、土師器は磨滅が激しく、観察に耐えうるものは非常に少ない。須恵器は比較的残存状態が良く、器形には杯・杯蓋・高杯・壺・甕・播鉢・甗など種々のものがある。また、韓式土器が河川487から出土し、注目できる。

奈良時代から長岡京期の土器類は、井戸43、土壙1038・1252・1132・1328、河川487・1085・1200の上層などからまとまって出土した。掘立柱建物の柱穴掘形や道路側溝からもわずか

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
弥生時代	弥生土器			少量	
古墳時代	土師器、須恵器、石製品		土師器15点、須恵器171点、チャート剥片1点、管玉1点、勾玉1点		
奈良時代 ～長岡京期	土師器、須恵器、製塩土器、瓦、木製品、金属製品		土師器80点、須恵器145点、製塩土器1点、黒色土器1点、軒丸瓦1点、齋串2点、柱根2点、礎板3点、曲物1点、銅製鉈尾1点、板状鉄製品1点		
長岡京期以降	土師器、瓦器、須恵器			少量	
合 計		277箱	427点 (37箱)	130箱	110箱

に出土したが、土師器は器形もあきらかでなく、胎土の質を観察できる程度であった。須恵器においても、前代のものが混入し時期の特定は困難なものも少なくない。

1) 古墳時代の土器

土壙350出土土器 (図31、付表1)

土壙350の土器類は総破片数2,536片あり、その内容は土師器65.9%、古墳時代須恵器25.9%、長岡京期の混入須恵器8.2%である。

土師器は数量的には多いが、遺存状態が非常に悪く図示できるものは無い。

須恵器には杯H・杯蓋・高杯・甗・甕がある。杯H (9~16) は口径12.2~13.6cm、高さ3.5~4.1cm、口縁部の立ち上がりは低く、端部を丸くおさめる。杯蓋 (1~8) は口径12.4~14.6cm、高さ2.8~4.1cm、天井部の稜は不明である。高杯蓋 (18) の天井部は高く、稜は不明。扁平のつまみを持つ。高杯 (19・20) は短脚で透かし無し、口縁部の立ち上がりは低く、端部を丸くおさめる。20は壺脚部の可能性もある。壺蓋 (17) は天井部に宝珠形つまみを持つものであろう。甗 (21~23) は、肩部に稜をもつもの21と球形のもの22・23があり、球形のものは体部下

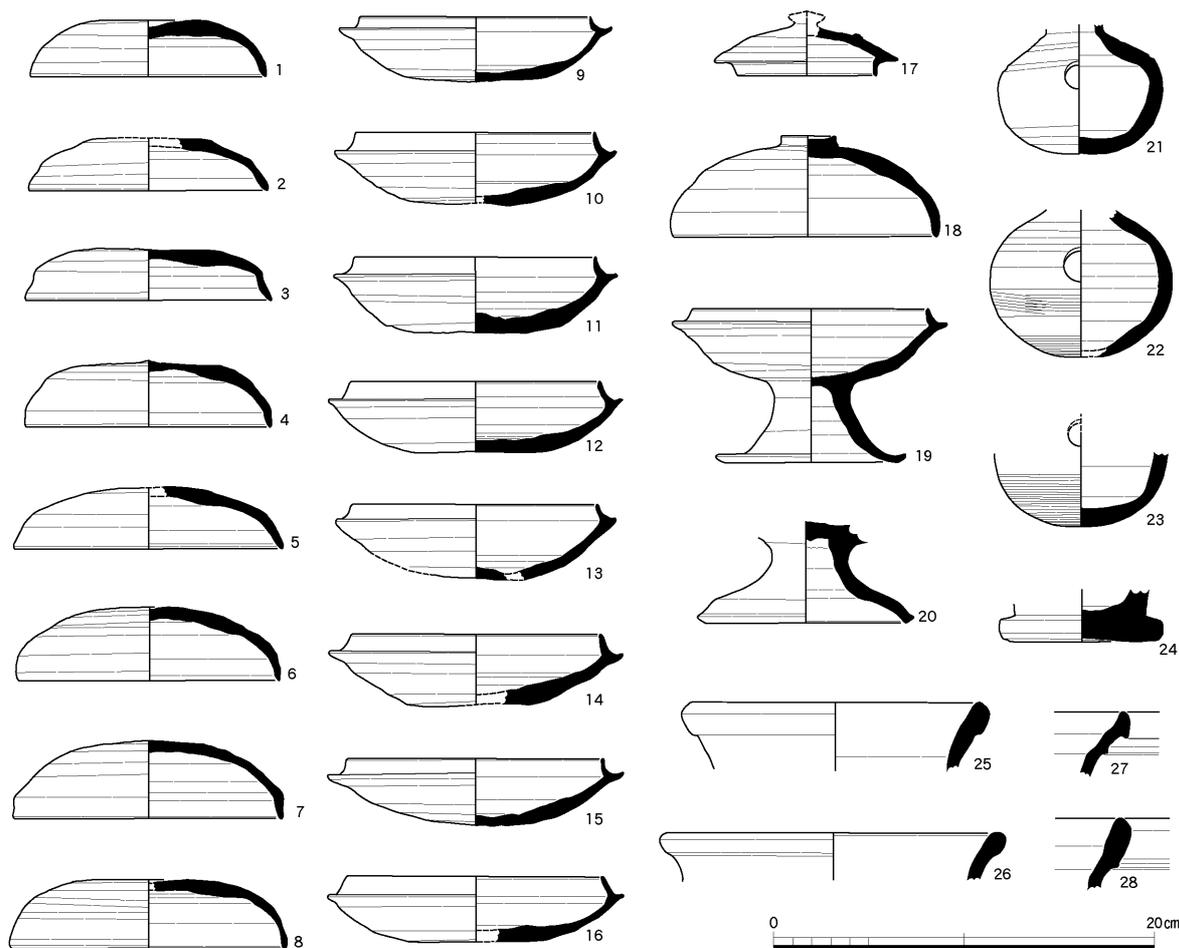


図31 土壙350出土土器実測図 (1 : 4)

半にカキ目を施す。甕口縁部（25～28）は外面に丸く肥厚するもの、稜をつけるものなどがある。播鉢（24）は底部平坦で、内面は磨滅している。

須恵器の時期はまとまり、陶邑MT85～TK209型式に属する。

溝2056出土土器（図32、付表2）

溝2056の土器類は総破片数1,464片あり、その内容は土師器88.3%、須恵器11.7%である。

土師器には高杯・器台・壺・甕・甑がある。高杯（29～32）29は口径11.2cm、底径9.1cm、高さ8.6cmの比較的小型のものである。30・31はやや大きい。32は脚部に面取りがみとめられる。器台は（33）が3方向の透かし。（34）は4方向に復元できる。壺（35）は小型で長胴形の体部に、強いナデの直立した口縁が付く。甕（37～42）には大小あり、大型の38は、球形の体部で口

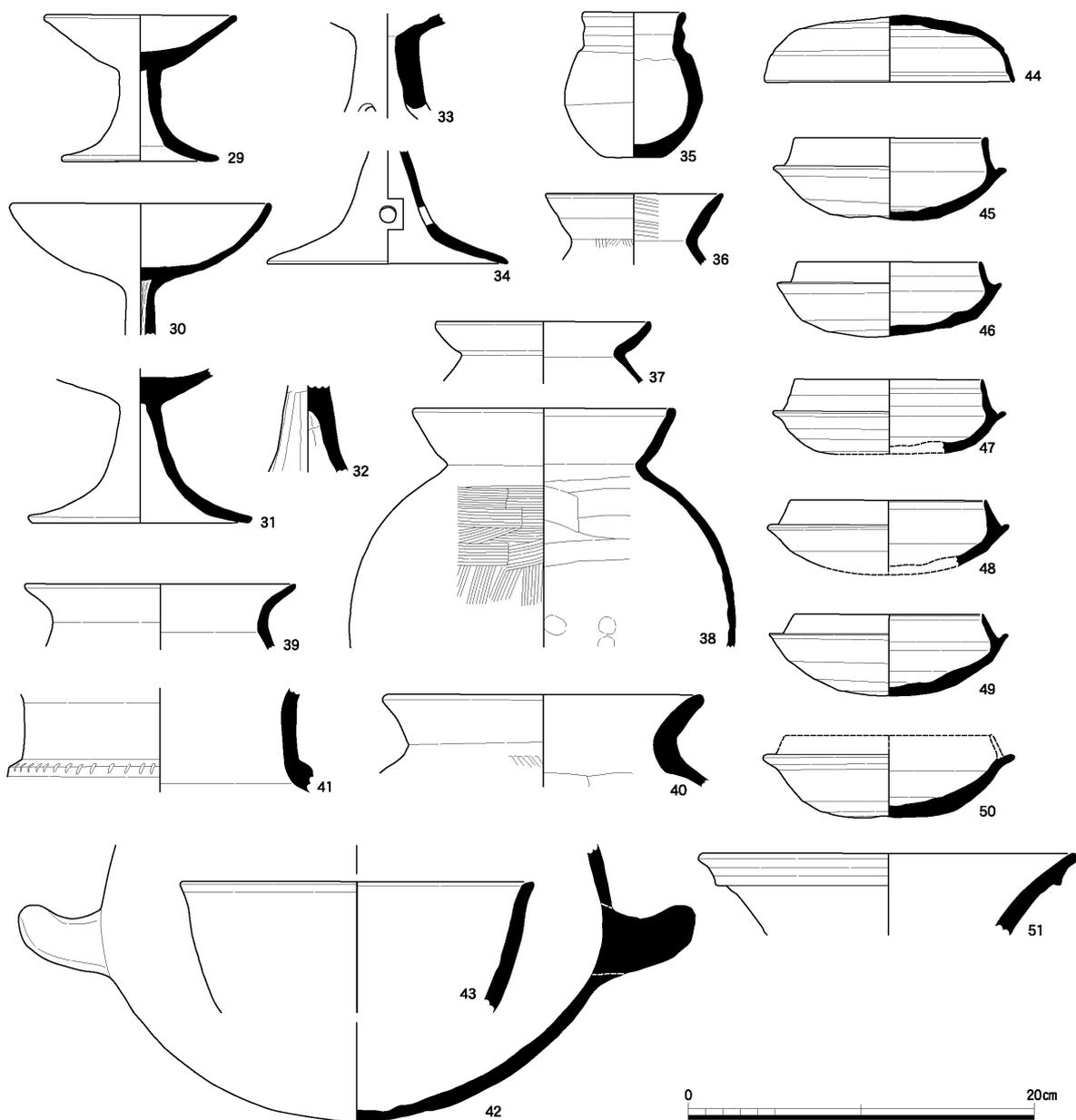


図32 溝2056出土土器実測図（1：4）

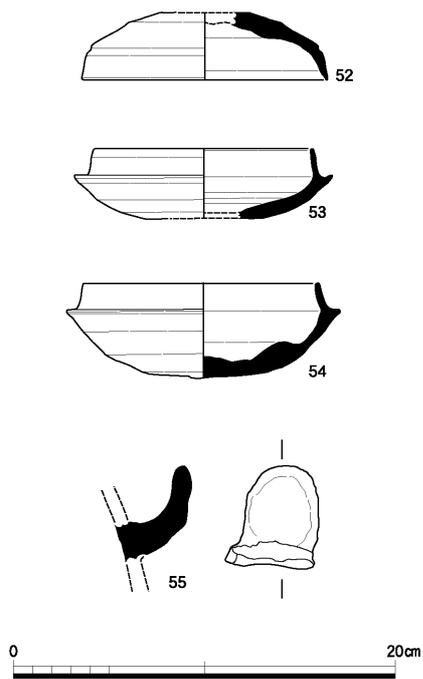


図33 溝2063出土土器
実測図（1：4）

縁部はゆるく内弯し、端部が内面に弱く肥厚する。体部は外面ハケ目・内面ケズリである。器壁は薄い。41は頸部に凸帯が巡り、刻み目を付ける。42は体部中位両側に太い把手が付くもので、体部に穴をあけて内側から把手を差し込み接合している。(43)は甌の口縁部と推定できる。土師器には時期的なまとまりはない。

須恵器には杯H・杯蓋・甕がある。杯H（45～50）は口径11cm前後、高さ4～5cmと揃い、いずれも口縁の立ち上がりが高く、端部を丸くおさめるものと面をもつものがある。杯蓋（44）は口径14.5cm、高さ4cmと比較的大振り、肩部の稜はにぶく、ほとんど突出しない。甕（51）は口縁部が大きく開き、外面に稜が付く。

時期は杯Hは陶邑TK47～MT15型式、杯蓋・甕は陶邑TK10型式前後に属する。

溝2063出土土器（図33、付表3）

溝2063の土器類は総破片数394片あり、その内容は土師器67.3%、須恵器32.7%である。

土師器には甕（55）胴部の把手の破片がある。

須恵器には杯H・杯蓋・甕がある。杯H（53・54）は口径12cm前後、高さ3.7～5.1cm、立ち上がりはやや高く、端部は丸くおさめる。杯蓋（52）は口径13cm、高さ3.6cmで、天井部の稜は鈍い。

時期は陶邑TK10型式前後に属する

河川487下層出土土器（図34～37、図版26・27、付表4）

河川487の土器類は総破片数12,984片あり、その内容は土師器19.2%、須恵器80.8%と須恵器の比率が高い。

土師器も多数出土しているが、遺存状態が悪く図示できるものは無い。

須恵器には杯H・杯蓋・高杯・高杯蓋・壺・提瓶・甕がある。杯H（98～105）は口径10～11cm前後、高さ4～5cmと揃い、口縁部の立ち上がりは高く、端部に面を持つもの。これに対応する杯蓋（56～61）は、口径13～14cm、高さ5cm前後で天井部の稜は鋭く、端部に面を持つ。同様の形態を示しながら、天井部に偏平なつまみをつける高杯蓋（62～65）もある。これに対して口径11～14cm、高さ4cm前後で、立ち上がりが低く内傾し、端部を丸くおさめる杯H（106～145）がある。これに対応する杯蓋（66～97）は口径13～14cm、高さ3～5cm、天井部の稜は不明瞭で、端部を丸くおさめるものが多い。ケズリの回転は左右あるが、右回りのものが多い。高杯（146～148）は短脚1段透かしで、円形の透かしをつける。短頸壺（149・150）は大型のものと小型のものがあり、偏平な体部に直行する口縁部が付く。体部中段以下をケズリ。(151)は壺脚部。(152・153)は甕。壺（154）は口縁部のみ。2本の稜線を巡らし、その下に櫛描波状文を施す。

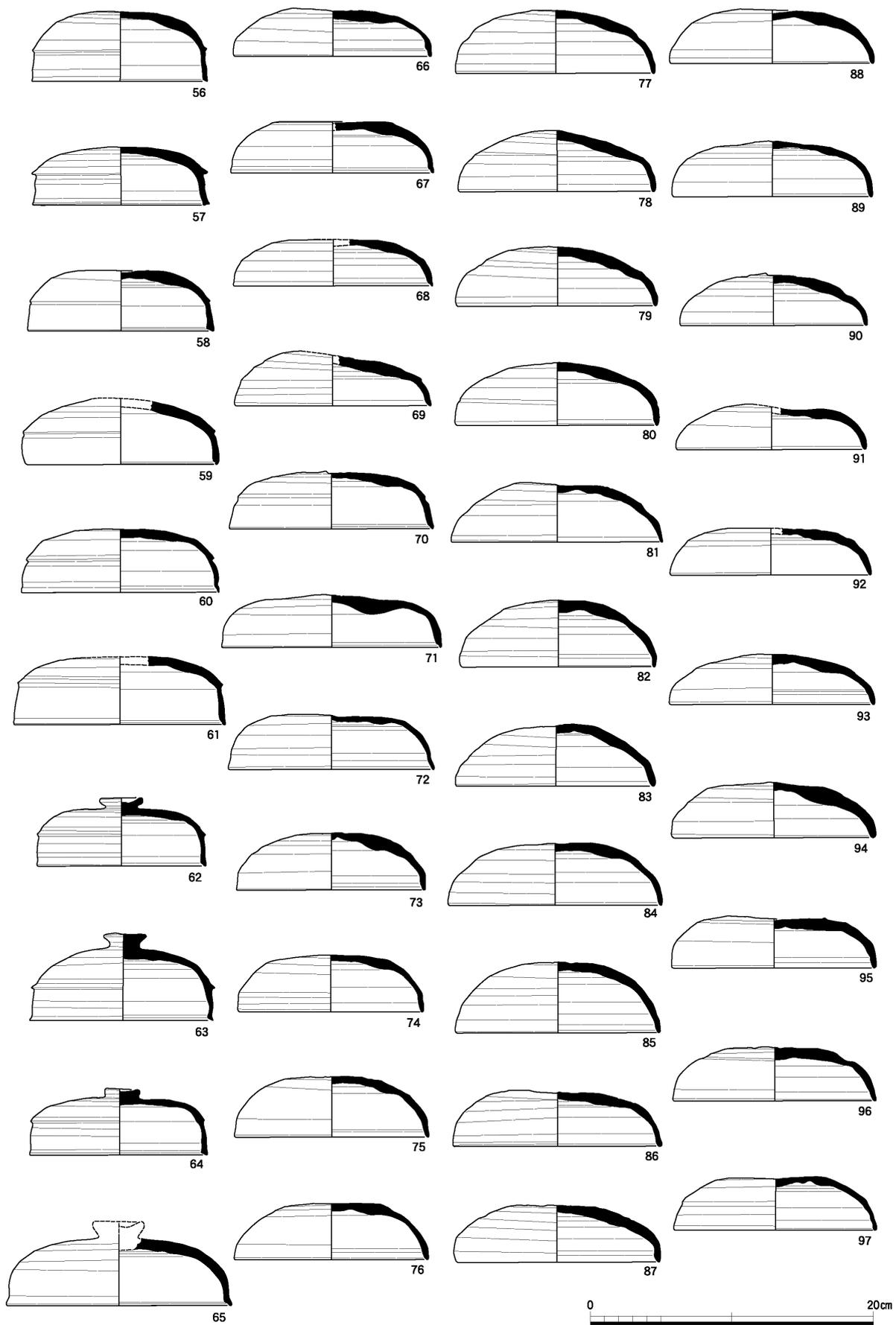


图34 河川487下層出土土器実測図1 (1 : 4)

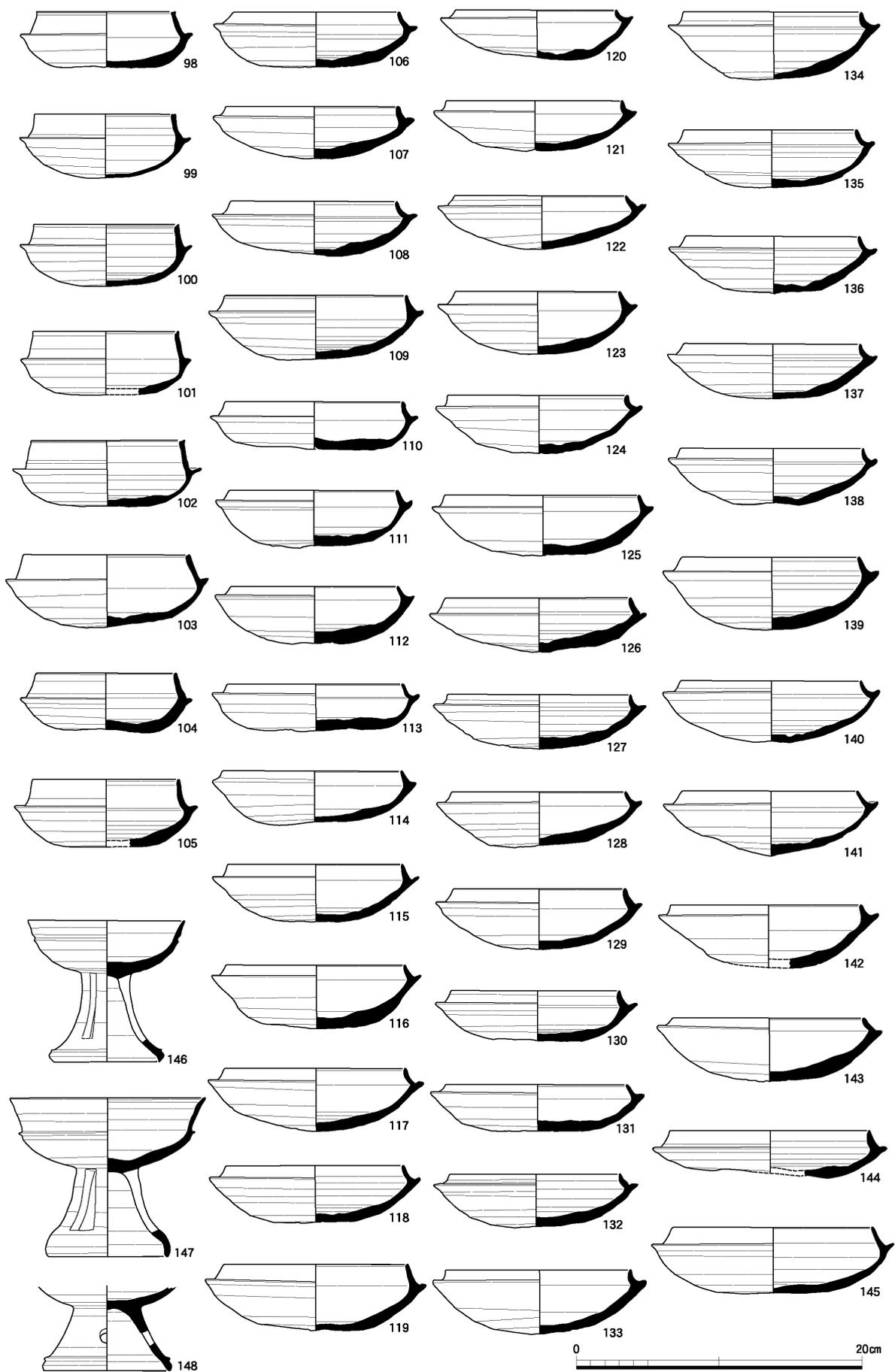


图35 河川487下層出土土器実測図2 (1 : 4)

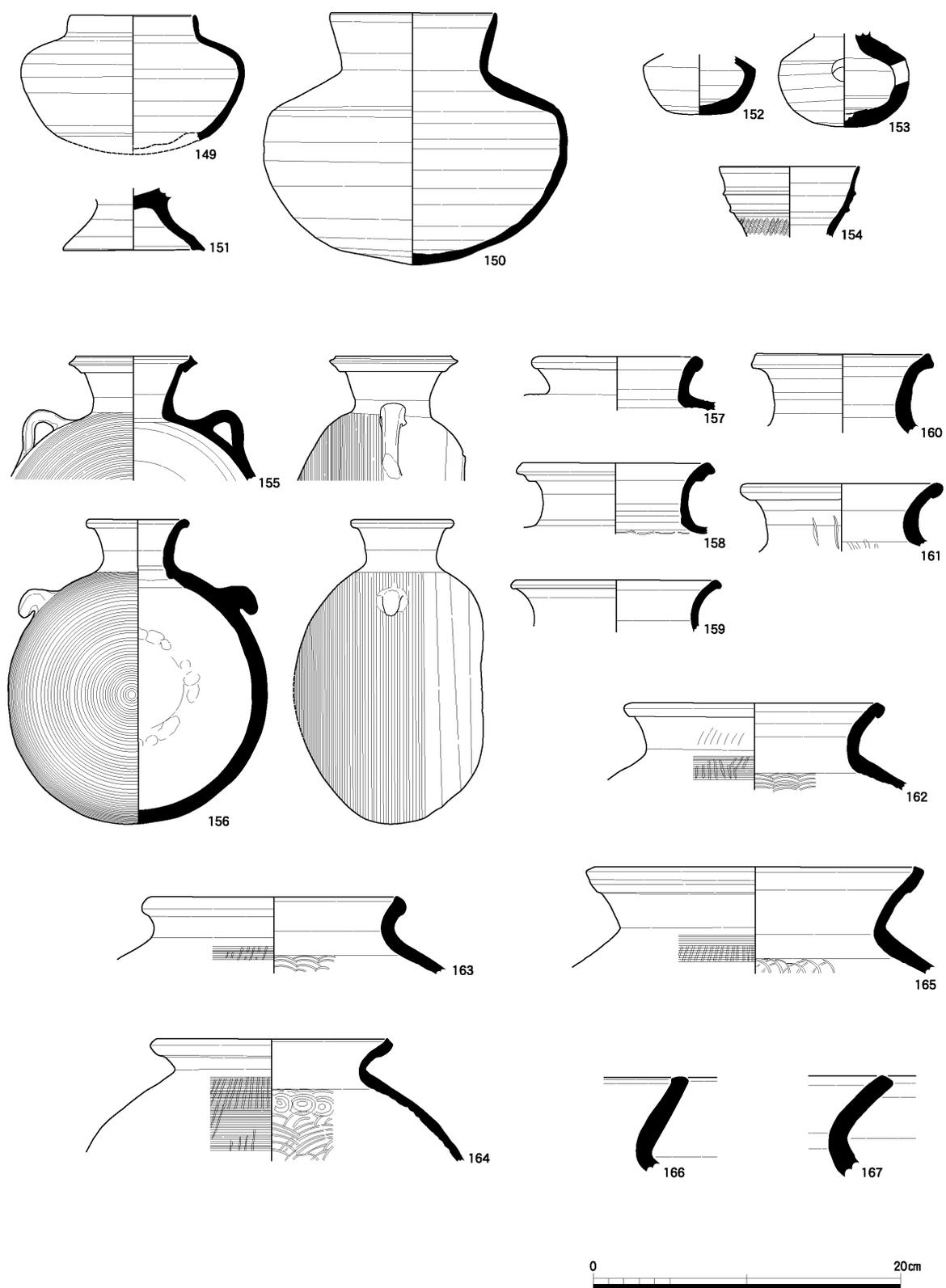


图36 河川487下層出土土器実測图3 (1 : 4)

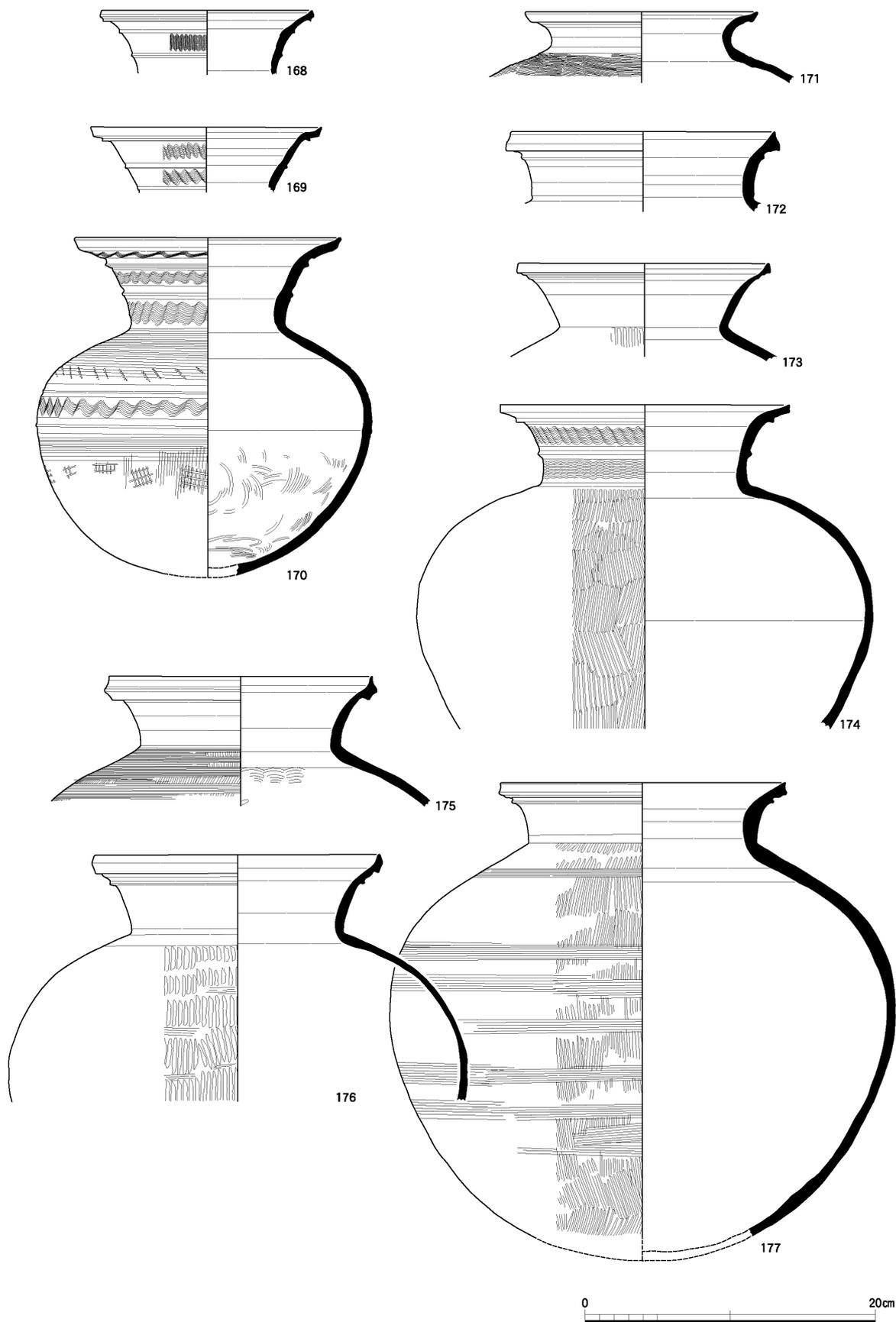


图37 河川487下層出土土器実測図4 (1 : 4)

提瓶（155・156）は扁平な体部の側面に外反する口縁を接合し、肩には155は環状の、156は鉤型の耳が付く。成形時の上面に当たる体部には、細かなカキ目を施す。壺・甕類の口縁部（157～161）の形態には各種のものがあり、口縁端部を丸く肥厚するものや、幅広く折り返すもの、端面をもつものがある。甕（162～170・172～177）は大型のものと小型のものがあり、口縁の形態も種々ある。170は頸部に2本の鋭い稜線を巡らし、稜線間と口縁直下の3箇所には櫛描波状文を施す。胴部は下段にはタタキ目を残し、中段以上をカキ目、中央部に波状文を施し、その上段に列点文を巡らす。内面は下段に当て具痕を残すが、上半はナデで仕上げる。他のものも体部はタタキ調整。

時期は陶邑TK47～TK209型式に属する。

（171）は韓式系土器で、胴部外面は縄蓆文を施し、棒状のヘラで付けたと思える単線が数条巡る。内面は当て具痕をナデ消している。焼成は硬質で断面は赤紫色。器表は青灰色。韓式系土器は、乙訓地域において古墳時代前期から継続して営まれた集落の他に、中期に形成あるいは再形成された集落からも多く出土する傾向が指摘されている¹⁾。

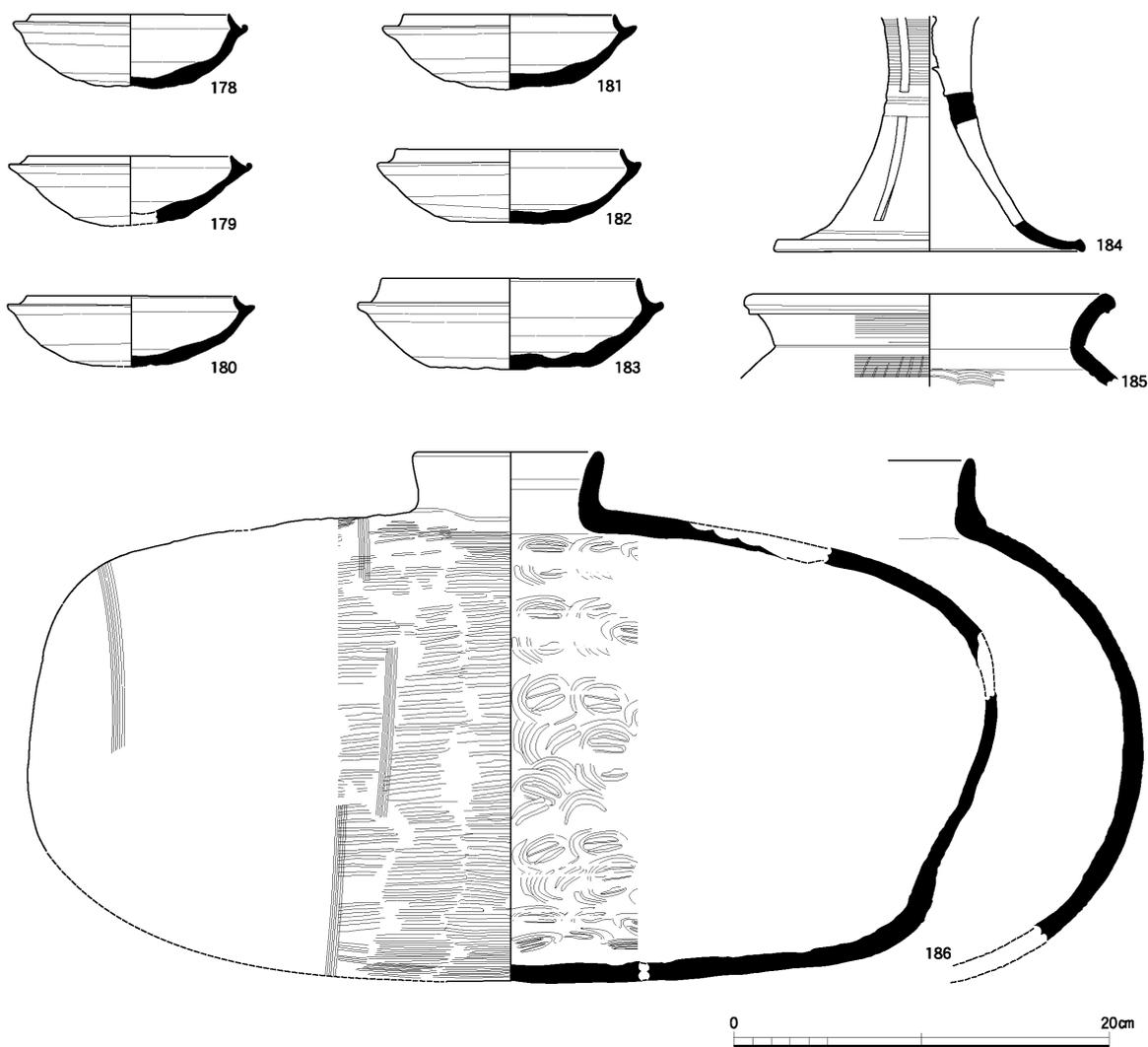


図38 河川1085・1200下層出土土器実測図（1：4）

河川1085・1200下層出土土器 (図38、付表5)

河川1085・1200下層からは、古墳時代の須恵器171片とわずかの土師器が出土した。他の河川跡同様土師器の遺存状態は悪く、図示できるものは須恵器のみである。186は河川1085出土。他は河川1200出土である。

須恵器には杯H・杯蓋・高杯・横瓶・甕がある。杯H (178~183) は、口径10.5~13.6cm、高さ3.8~4.9cm、口縁部の立ち上がりは低く内傾し、端部を丸く収める。高杯 (184) は長脚二段透かしである。甕 (185) は小型で、端部は外へ肥厚する。横瓶 (186) は俵形の胴部に直口する口縁部がつき、端部は丸く収める。接合はやや粗雑である。

出土した須恵器の時期はややばらつき、杯Hは陶邑TK43~MT15型式、杯蓋・甕は陶邑TK10型式前後に属する。

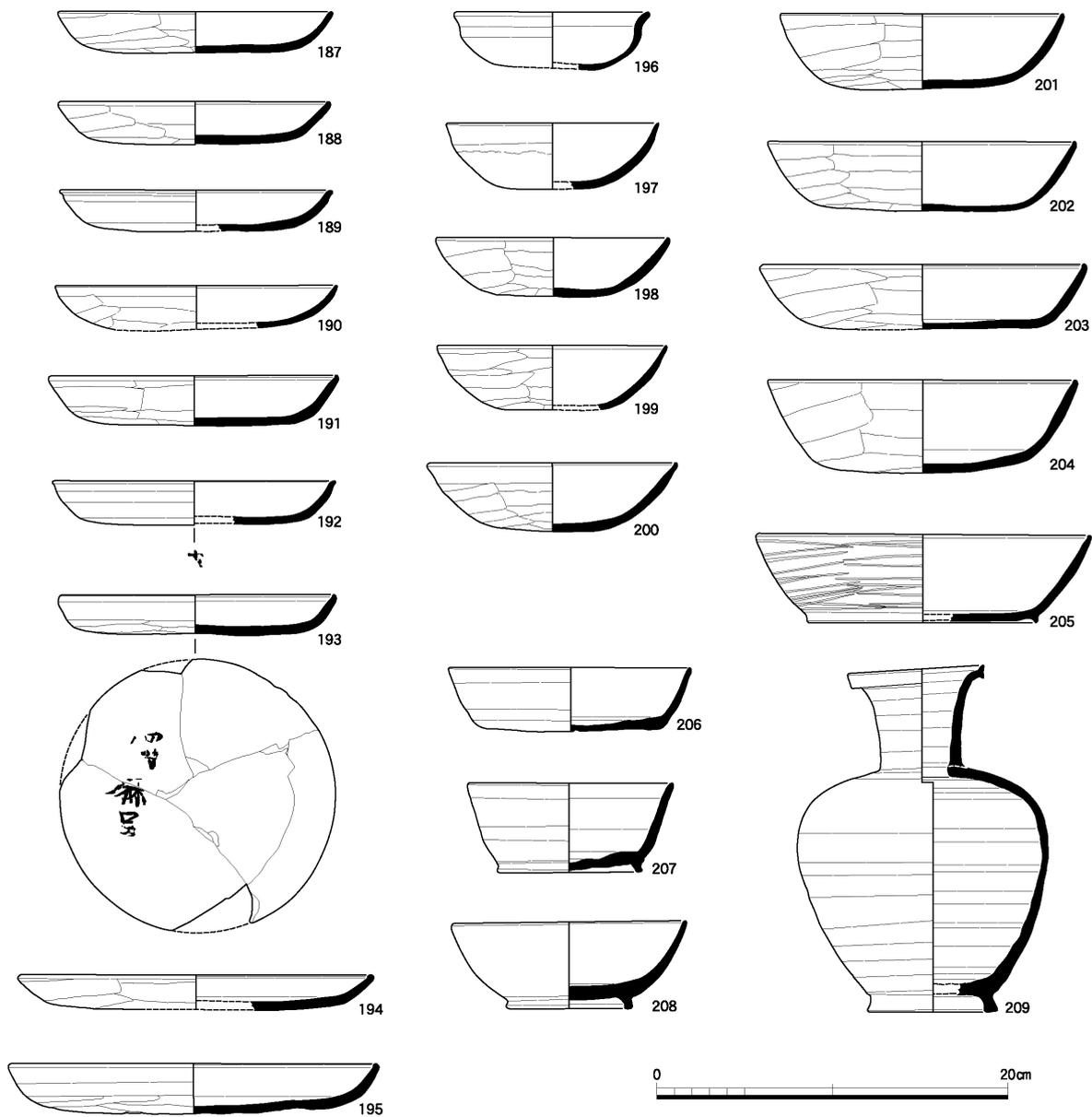


図39 井戸43出土土器実測図 (1 : 4)

2) 奈良時代・長岡京期の土器

井戸43出土土器 (図39、図版28、付表6)

SE43出土土器は総破片数255片あり、その内容は土師器88.5%、須恵器11.5%、黒色土器1片である。混入古墳時代須恵器10片は集計に含まない。

土師器には椀・皿・杯・鉢がある。椀A I (198~200) は口径13.2~14.3cm。高さ3.5~4.0cm。いずれも外面をケズリで仕上げる。椀A II (197) は口径12.2cm。高さ3.8cm。ナデとオサエで仕上げる。皿A I (194・195) は口径20.4~21.2cm。高さ2.1~2.9cm。外面ケズリが口縁部まで及ぶものと、底部だけにとどめるものがある。皿A II (187~193) は数量も多く、口径15.5~16.6cm。高さ2.4~2.9cm。外面の調整は皿A I に準ずるが、ナデ調整だけのものがある。193の底部には「口麻呂」の墨書がある。杯A (201~204) は口径16.2~18.7cm。高さ3.8~5.4cm。いずれも外面をケズリで仕上げる。杯B (205) は口径19.2cm。高さ5.1cm。高台径13.2cm。外面にミガキ調整を施す。鉢B (196) はやや深い体部に屈曲して外反する口縁が付く。

須恵器には杯A・杯B・椀B・壺Lがある。杯A (206) は底部ヘラ切り。杯B (207) はやや小振り調整が粗雑である。底部端に外反する高台を貼り付ける。椀 (208) はこの時期の須恵器としては特異な形態を示し、緑釉単彩陶器の器形と共通する。焼成は硬質である。壺L (209) は長胴形の体部に外反する口縁部が付く。

時期は長岡京期のまとまった資料である。

土壙488出土土器 (図40、付表7)

埋土から須恵器が3点出土した。杯B (210・211) は底部に高台を貼り付ける。器高はやや低い。壺C (212) は小型のもので、直立する短い口縁が付く。

時期は長岡京期に属する。

土壙1038出土土器 (図41、付表8)

土壙1038の土器類は総破片数765片あり、その内容は土師器74.4%、黒色土器0.1%、須恵器25.4%である。小片が多く、図示できたものも限られる。

須恵器では杯B (215~218)、杯蓋 (213・214)、壺蓋 (219)、甕 (220) がある。

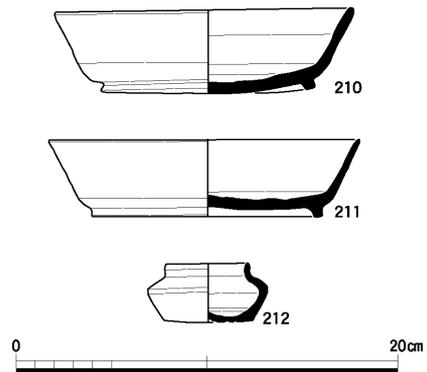


図40 土壙488出土土器実測図 (1 : 4)

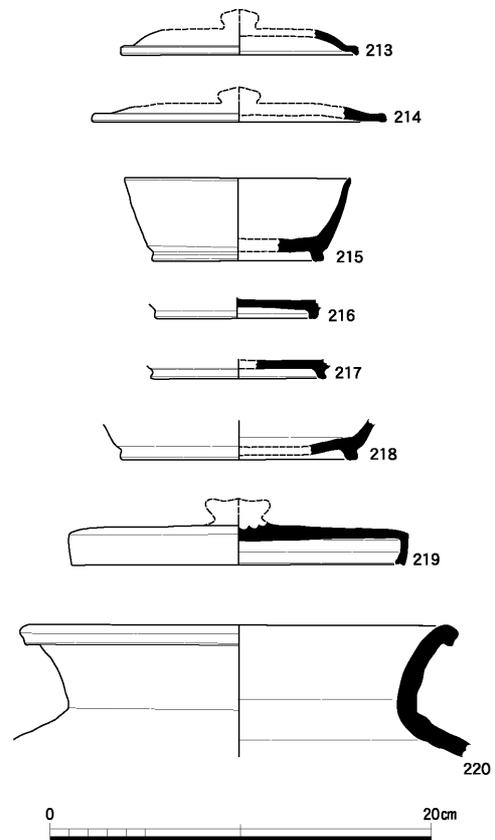


図41 土壙1038出土土器実測図 (1 : 4)

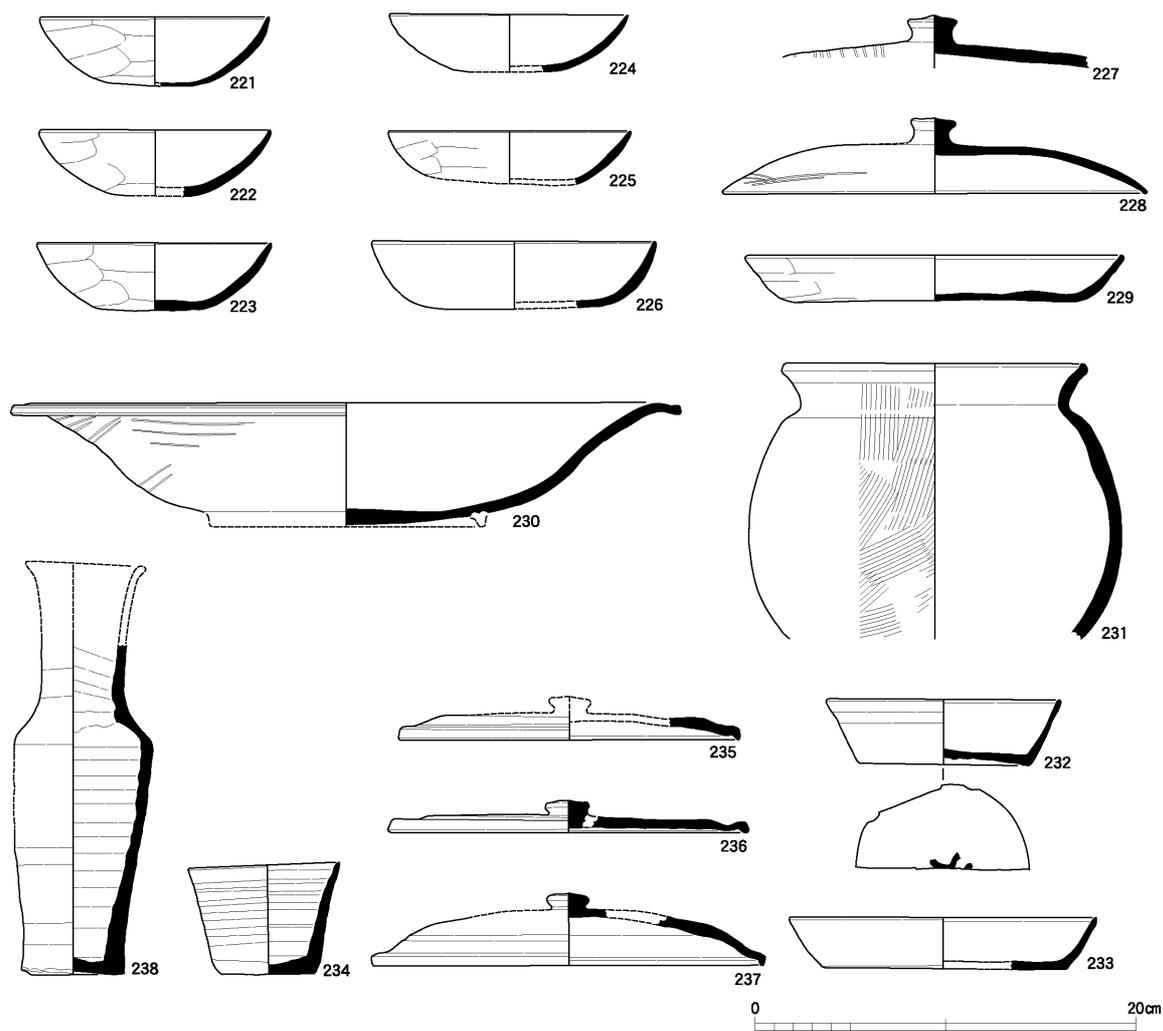


図42 土壙1132出土土器実測図（1：4）

時期は長岡京期に属する。

土壙1132出土土器（図42、付表9）

土壙1132の土器類は総破片数1,638片あり、その内容は土師器85.8%、黒色土器0.1%、須恵器13.9%と土師器の比率が高い。

土師器には椀A・皿・蓋・盤・甕がある。椀A（221～225）はいずれもケズリ調整である。杯A（226）は、器表が磨滅し調整は不明である。皿A（229）は外面ケズリが口縁部まで及ぶ。蓋（227・228）は天井部が盛り上がり、宝珠形のつまみが付く、外面はミガキ調整。盤（230）はやや深い体部で、口縁部は大きく外反し、端部は肥厚する。外面にミガキを施す。甕（231）は外面刷毛目を施す。

須恵器には杯A・皿A・蓋・鉢・壺Gがある。杯A（232・233）底部はどちらもヘラ切り。232底部外面には墨書がみとめられるが、残存部が少なく判読不能。蓋（235～237）は天井部が平らなものと、盛り上がるものがあり、宝珠形のつまみが付く。椀（234）は小型で、体部が外上方にのび、口縁端部はややとがる。底部はヘラ切り。壺G（238）は長胴形の体部に口縁部が付く。底部糸切り未調整。つくりは粗雑で、焼成もやや甘い。

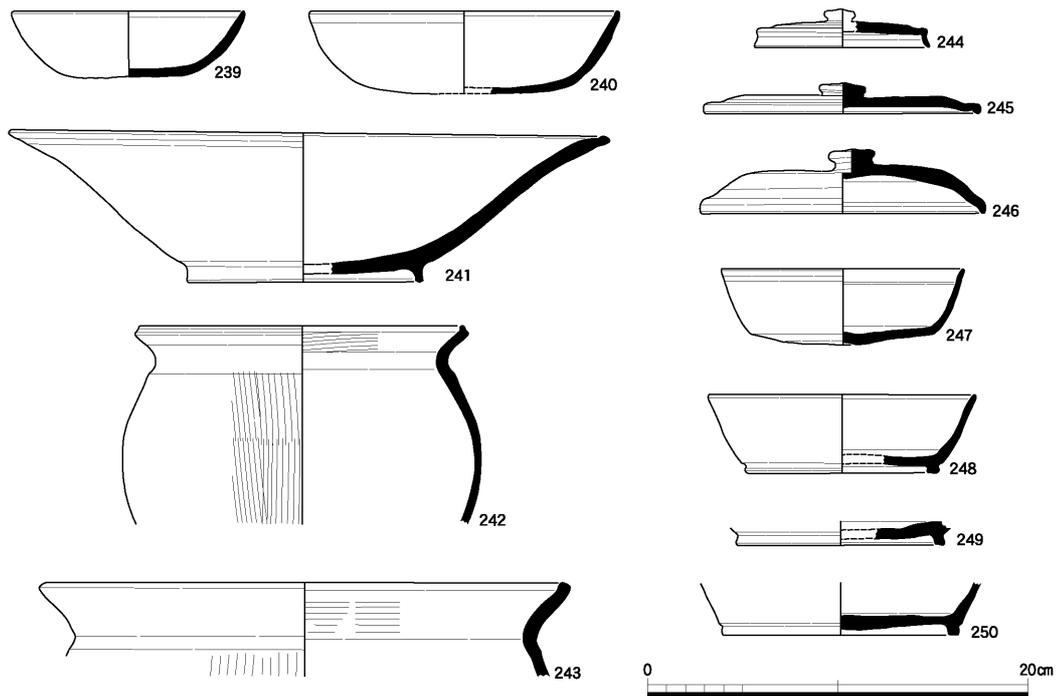


図43 土壙1252出土土器実測図（1：4）

時期は長岡京期に属する。

土壙1252出土土器（図43、付表10）

土壙1252の土器類は総破片数1,007片あり、その内容は土師器80.6%、須恵器19.4%と土師器の比率が高い。

土師器には椀A（239）・杯A（240）・盤（241）・甕（242・243）がある。いずれも磨滅が激しく調整は甕の刷毛目が認められる程度である。

須恵器には蓋・杯A（247）・杯B（248～250）がある。壺蓋（244）は直立する口縁部が付く。杯蓋（245・246）は高さに差はあるが口径は揃い、いずれも宝珠形つまみが付く。杯A247は底部ヘラ切り。

時期は長岡京期に属する。

土壙1328出土土器（図44、付表11）

土壙1328の土器類は総破片数5,388片あり、その内容は土師器88.6%、黒色土器0.3%、須恵器11.2%と土師器の比率が高い。

土師器には椀A・杯A・皿A・杯B・杯蓋・高杯・羽釜・甕・製塩土器がある。椀AⅡ（257）は器表が荒れているため調整不明。杯A（258）はナデ調整で仕上げる。皿AⅠ（254～256）・皿AⅡ（251～253）は調整不明である。蓋（260）は天井部が盛り上がり、宝珠形つまみが付く、高杯（261・262）は大きくゆるやかに外反する口縁部と、ミガキを施した裾部である。羽釜（263）は口縁直下に巾広の鐙が巡り、口縁部は外反し内方に小さく肥厚する。甕（264・265）は大型のものとは小型のものがある。いずれも短い口縁部の内面と体部外面に刷毛目を施す。製塩土器（266）は、粗い胎土で、粗雑な作りである。

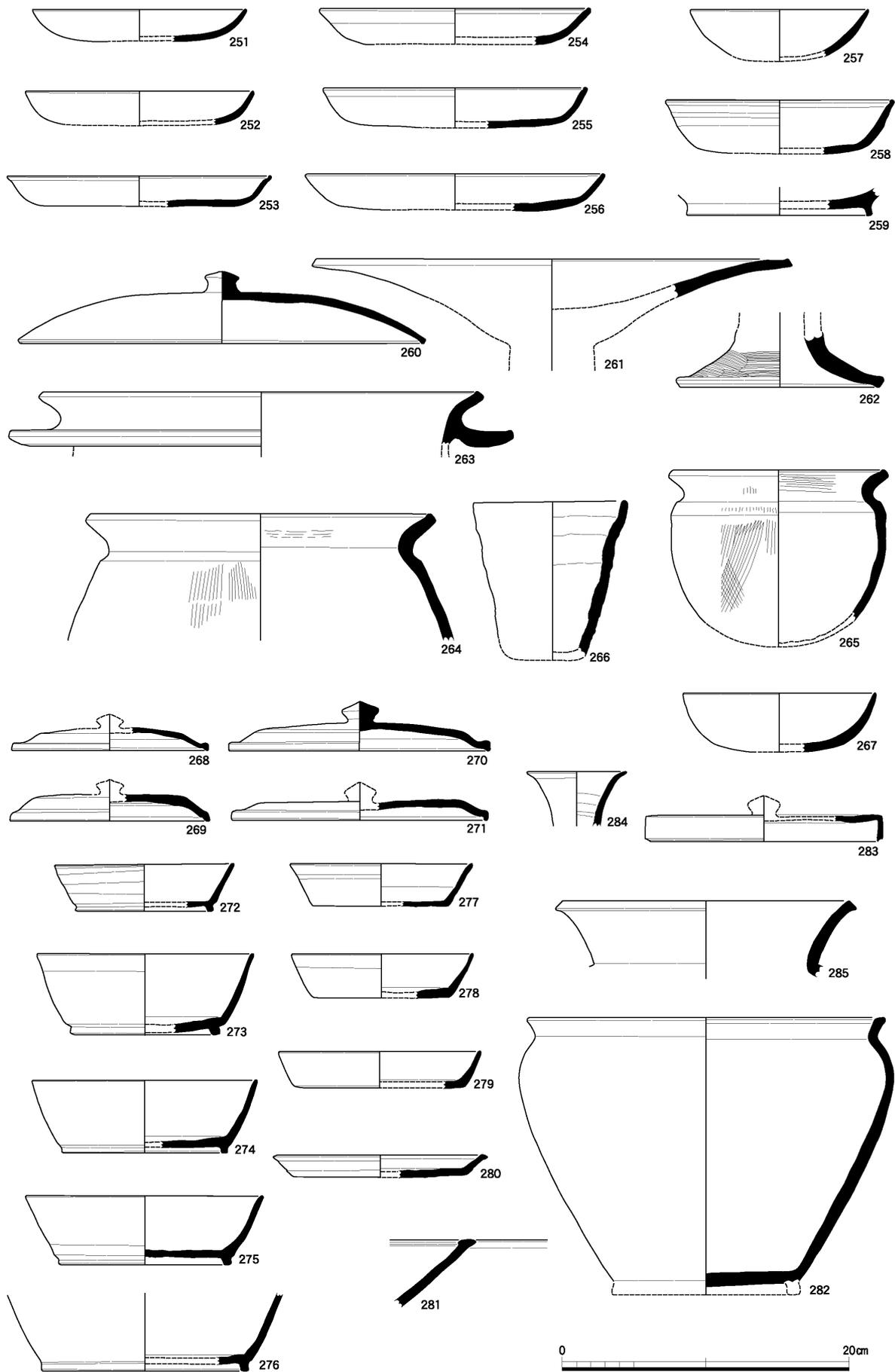


图44 土壙1328出土土器实测图（1：4）

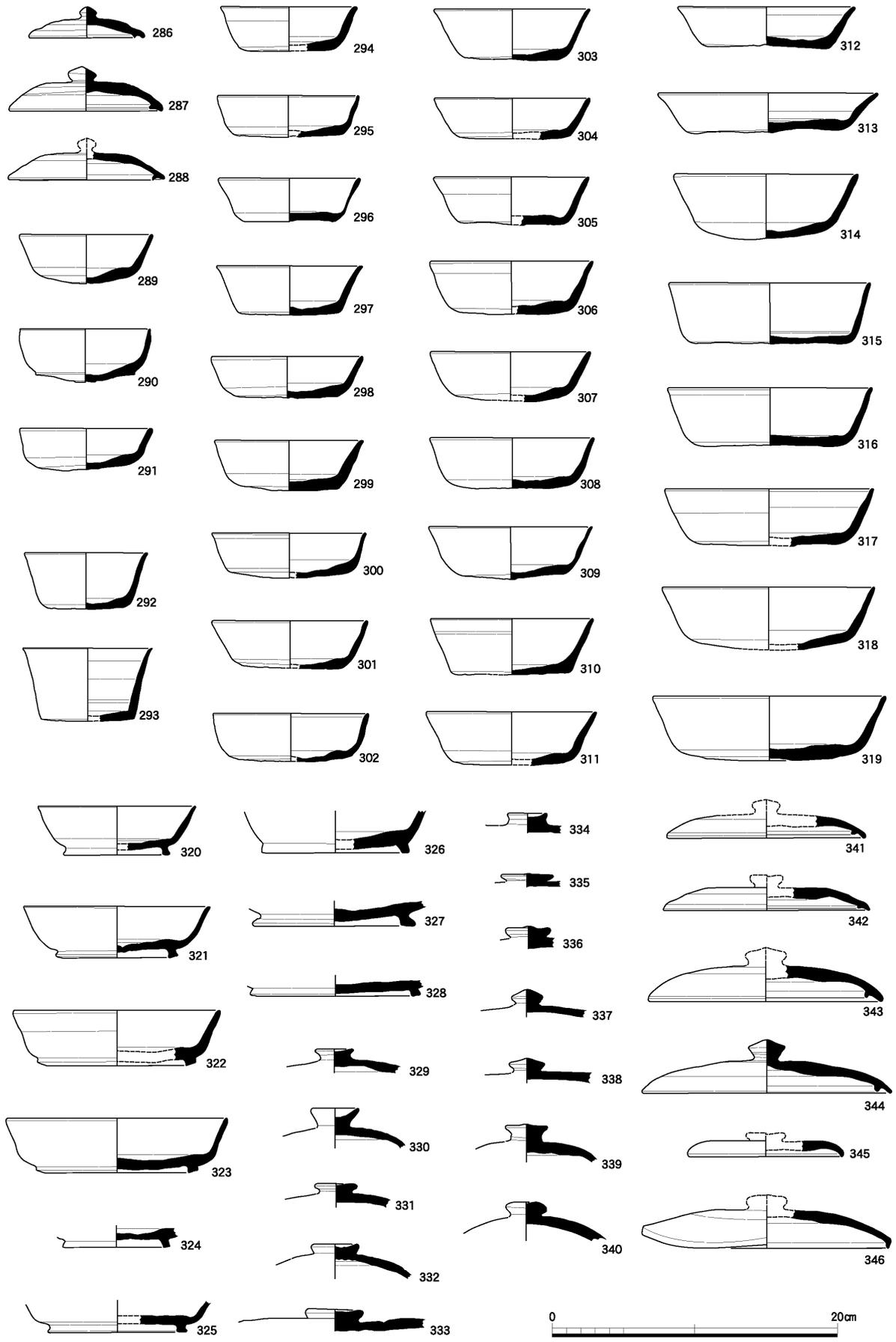


图45 河川487上層出土土器実測図(1:4)

黒色土器には椀（267）がある。内面のみ黒色化したA類。調整は不明だが、内面はミガキ調整と思われる。

須恵器には杯A・杯B・皿A・蓋・鉢・壺（284）・壺蓋（283）・甕（285）がある。杯A（277～279）は底部へラ切り。杯B（272～276）は大小あり、底部端に外反する高台を貼り付ける。蓋（268～271）も杯Bに合わせて大小2種類ある。天井部に宝珠形のつまみが付く。鉢A（281）は口縁部が直線的に広がる。口径不明。鉢D（282）は体部がやや内弯気味に直立し、肩を付け、口縁部が外反する。

時期は奈良時代から長岡京期に属する。

河川487上層出土土器（図45、図版27、付表12）

河川487上層からは須恵器の杯類などがまとまって出土した。土師器もわずかに出土したが遺存状態が非常に悪く図示できるものはない。

須恵器には杯G・椀・杯A・杯B・皿A・蓋がある。杯G（289～291）は、かえりの付いた口縁と宝珠形のつまみをを持つ蓋（286～288）と組み合わせる。椀（292・293）は、やや外反した体部をもつ。杯A（294～319）底部はへラ切り。大・小がある。杯B（320～328）は底部端にやや内側に外反する高台を貼り付ける。蓋（329～346）は天井部に偏平または、宝珠形のつまみが付く。口縁部はかえりのつくものとそうでないものがある。

時期は、286～291はTK219型式に属するが、他は奈良時代から長岡京期に属する。

河川1085上層出土土器（図46、付表13）

河川1085の土器類は総破片数2,705片あり、その内容は土師器74.5%、黒色土器0.1%、須恵器25.4%と土師器の比率が高い。

土師器には椀A・皿A・杯B・蓋・高杯・甕がある。椀AⅡ（347～350）は、347が粗いミガキ、他のものはケズリ調整である。皿AⅠ（353）は外面ケズリ。皿AⅡ（351・352）は外面のケズリが口縁部まで及ぶものと底部だけのものがみられる。蓋（354・355）は天井部が盛り上がり、宝珠形のつまみが付く。へラミガキを密に施す。杯B（356～358）は外面ミガキ。358は張り出す高台をもつ。高杯（359～361）は脚部を8面の面取り。裾部は360は外面ナデ、内面刷毛目。361はミガキ。甕（362～365）はいずれも外面刷毛目調整。362は球形の体部で口縁部は外反する。363には無文のタタキ目が残る。

須恵器には杯G・杯A・杯B・皿A・蓋・鉢・壺・甕がある。杯G（367・368）はかえりの付いた口縁をもつ蓋（366）と組み合わせる。杯A（380～384）は底部へラ切り。杯B（376～379）は大小あり、底部端に外反する高台を貼り付ける。蓋（369～375）は天井部に宝珠形のつまみが付く。鉢（385）は体部が内弯し、口縁端部を丸く収める。壺（386・387）は口縁部のみ残存。長頸壺と小型の瓶子である。甕（388）はやや高い口縁のつくもので体部はタタキ調整。

時期は、366～368はTK219型式に属するが、他は奈良時代から長岡京期に属する。

河川1200上層出土土器（図47、付表14）

河川1200の土器類は総破片数2695片あり、その内容は土師器65.9%、黒色土器0.2%、須恵器

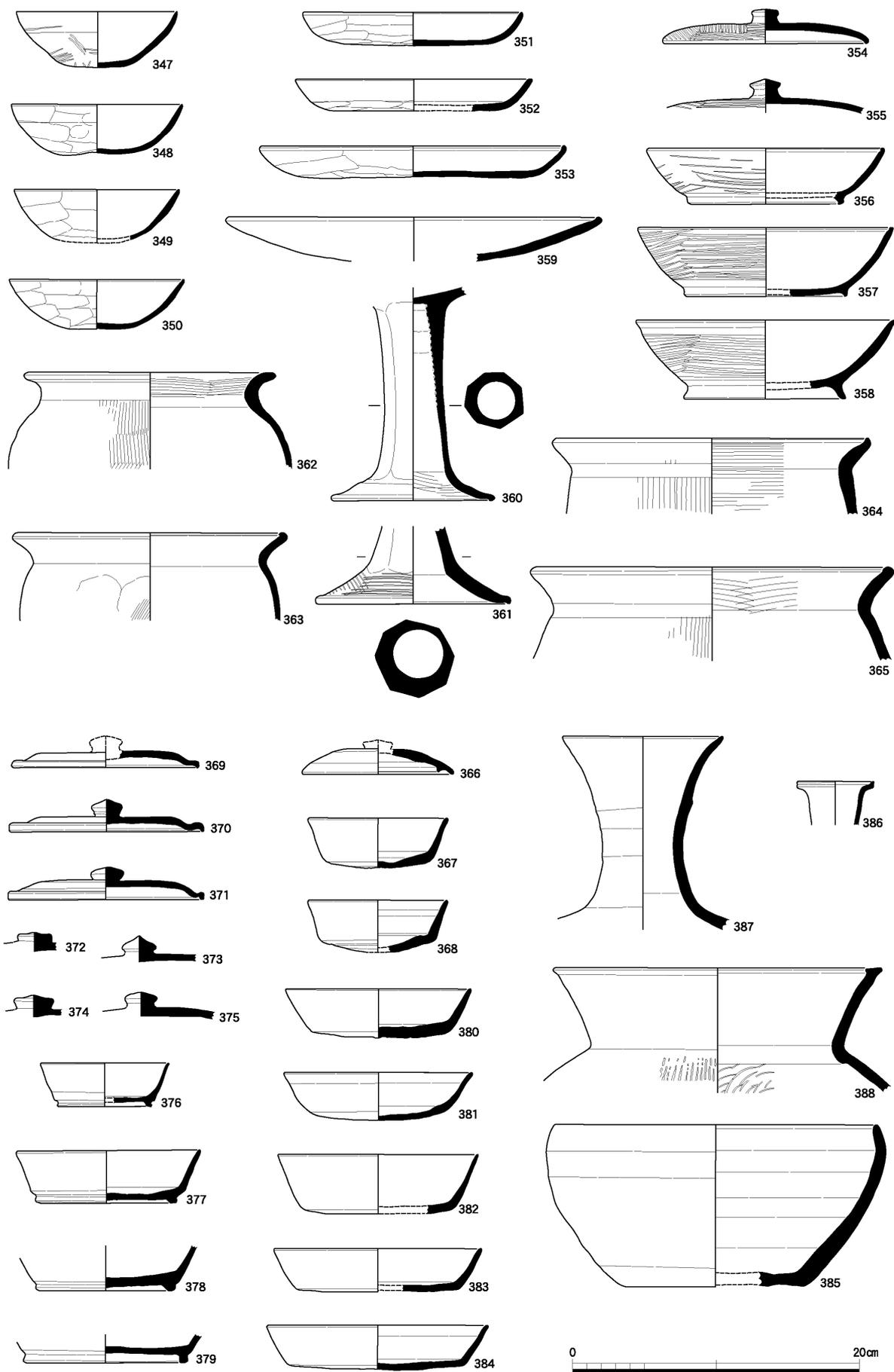


图46 河川1085上層出土土器实测图（1：4）

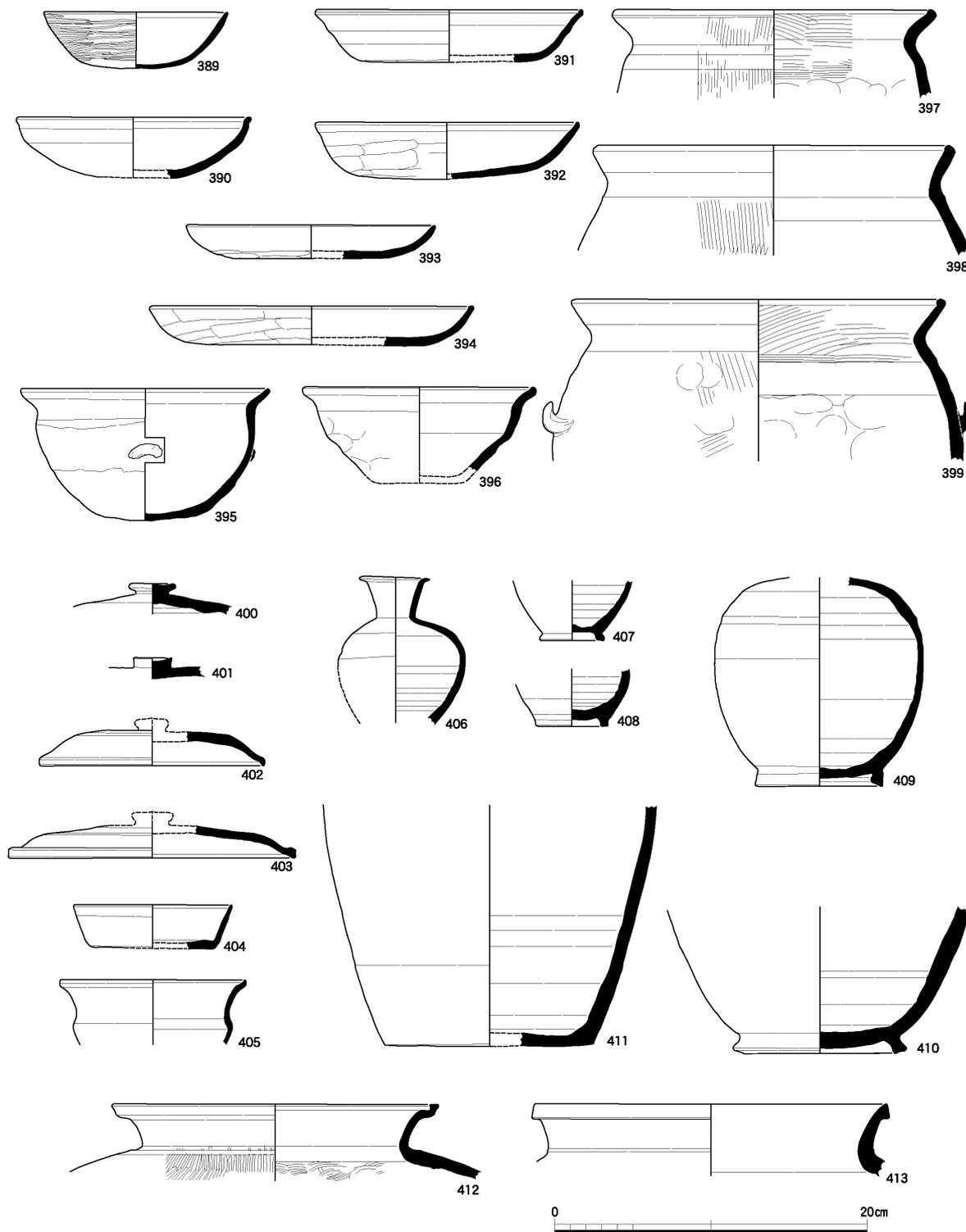


図47 河川1200上層出土土器実測図（1：4）

33.8%である。

土師器には椀A・椀C・杯A・皿A・壺B・甕がある。椀A II（389）は外面ミガキ調整である。杯A（391・392）は外面ケズリのもものとナデのものがみられる。椀C（390）は小さく外反する口縁をもち、ナデ調整で仕上げる。内面には漆が付着している。皿A I（394）は外面ケズリが口縁部まで及ぶ。皿A II（393）は底部だけケズリ調整。壺B（395・396）は「都城型祭祀壺」で

あるが、人面は描かれていない。395の形骸化した耳は1方だけで、相対する位置に耳は認められない。甕(397~399)は刷毛目調整。399は球形の体部で口縁部は外反し、端部は内側に肥厚する。体部の2方に小さな把手をつける。

須恵器には杯A・蓋・鉢・壺・甕がある。杯A(404)の底部はヘラ切り。蓋(400・401)は偏平のつまみが付く。壺(406~411)は各器形のものがある。高台の付くものとそうでないものがある。甕(412・413)は、口縁部が外反し、端部が受け口状になるものと外面に面を持つものがある。

時期は奈良時代から長岡京期に属する。

(3) 瓦類(図48、図版29)

瓦類は河川1200などから少量出土した。種類には、軒丸瓦・平瓦・丸瓦などがあるが小片が多い。

単弁16弁蓮華文軒丸瓦(414) 中房には1+4個の蓮子が十字形に連なる。蓮弁は単弁16弁で弁端は丸く子葉は盛り上がる。外区は珠文が巡る。瓦当裏面上部に丸瓦をあて、粘土を付加して接合。瓦当部裏面オサエ。胎土は砂粒を含み、黒灰色から灰黄色、やや軟質。長岡宮式²⁾7133Eb型式。

時期は長岡京期。

(4) 木製品(図49・50、図版29・30)

木製品には、齋串・井戸部材・柱根・礎板などがある。井戸部材は井戸43から出土しており、縦板・横棧・曲物がある。掘立柱建物2028(図25)の柱穴から出土した柱根・礎板417~421は写真のみ掲載した。

齋串(415・416) 井戸43掘形から2点出土した。415は長さ18.3cm、幅2.1cm、厚さ0.25cm。416は長さ19.2cm、幅2.8cm、厚さ0.3cm。いずれも板材の上端を鶏頭状にして下端を剣先状につくるC型式、側面の切込みは上端近くの両側縁2箇所切込みをいれるⅡ式である。³⁾

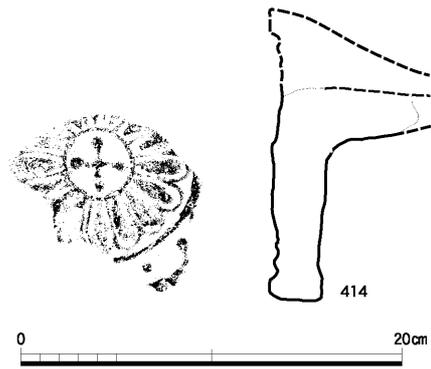


図48 河川1200出土軒丸瓦拓影・実測図(1:4)

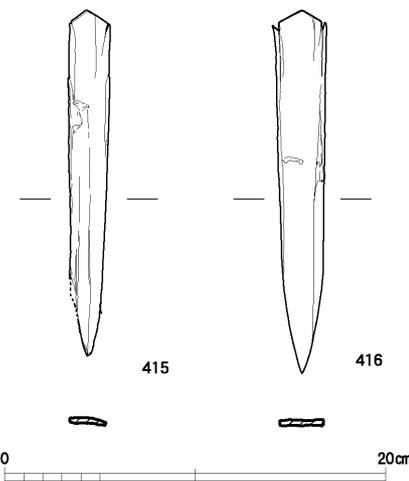


図49 井戸43出土齋串実測図(1:4)

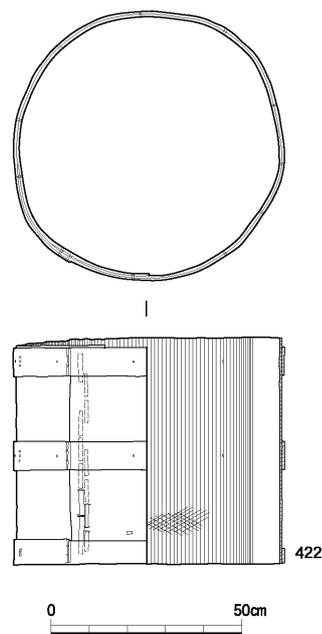


図50 井戸43出土曲物実測図(1:20)

柱根（417） 掘立柱建物2028の東北隅柱穴2028から出土した。径18cm、残存高42cm。樹種はヒノキである。

柱根（418） 掘立柱建物2028の東側柱列北第2柱穴2033から出土した。径17cm、残存高32cm。樹種はヒノキである。

礎板（419） 掘立柱建物2028の西北隅柱穴1282から出土した。縦24.5cm、横12.0cm、厚さ2.8cm。樹種はスギである。

礎板（420） 掘立柱建物2028の西北隅柱穴1282から出土した。礎板419の下方で差し込まれていた板である。縦34.6cm、横12.9cm、厚さ2.8cm。端部に方形の穴を穿つ。樹種はスギである。

礎板（421） 掘立柱建物2028の北側柱列西第2柱穴2026から出土した。縦30.5cm、横16.0cm、厚さ6.0cm。樹種はスギである。

曲物（422） 井戸43の部材である。径約71cm、高さは約60cm。上・中・下3段に幅約7.5cmのたがを廻らせている。本体の損傷が激しいため、下段以外のたがの幅、取り付け位置は復元して図示した。

（5）金属製品（図51、図版29）

金属製品は河川1200から鉋尾が、井戸43から板状の鉄製品の破片が出土している。

銅製鉋尾（423） 表金具は鉋ととも铸造し、裏面に薄板を当て、かしめる。側面には帯を挟み込むための切り込みがある。表面には黒漆の塗膜がわずかに認められる。長さ22.5mm、幅18.8mm、厚さ5.3mm。河川1200から出土した。

板状鉄製品（424） 残存部は弧状の形態を示す。残存長12cm、厚さ0.2cm。井戸43から出土した。

（6）石製品（図52、図版29）

石製品にはチャート剥片・管玉・勾玉がある。

チャート剥片（425） 残存長3.7cm、幅2.3cm、厚さ0.6cm。加工の痕跡はなく、製品ではないと

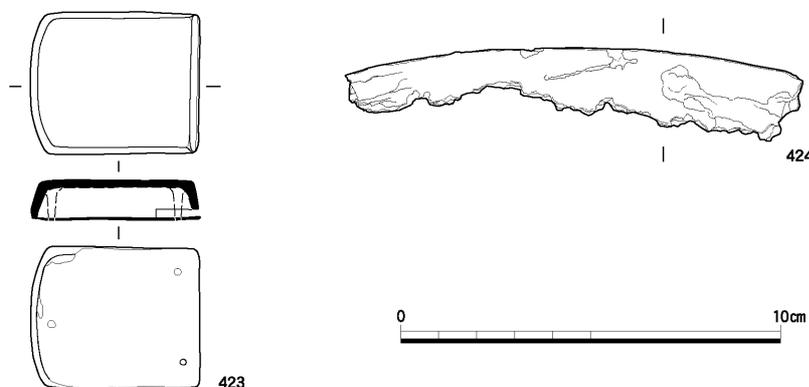


図51 金属製品実測図（1：2）

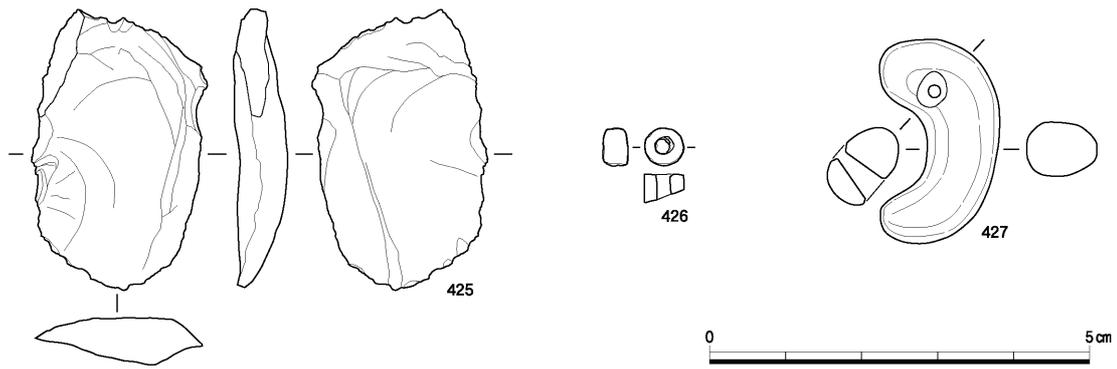


図52 石製品実測図（1：1）

考えられる。時期は不明である。土壙76から出土した。

管玉（426） 径0.5cm、孔径0.17cm。滑石製である。掘立柱建物11の南側柱列中央柱穴15から出土した。

勾玉（427） 高さ2.7cm、厚さ0.7cm、孔径0.4～0.15cm。碧玉質の石材で作られている。河川487下層から出土した。

註

- 1) 小池 寛「第5章 第2節 乙訓地域の須恵器出土遺構集成 古墳時代中期を中心に」『京都府遺跡調査報告書第28冊』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000年
- 2) 向日市教育委員会編『長岡京古瓦聚成』向日市埋蔵文化財調査報告書 第20集 向日市教育委員会 1987年
- 3) 斎串の型式分類は、奈良国立文化財研究所（現、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所）『木器集成図録 近畿古代編』奈良国立文化財研究所史料第27冊 1984年に準じた。

5. ま と め

(1) 古墳時代の遺構

1) 集落の変遷 (図53)

検出した遺構は、遺構埋土や遺構の重複関係、遺構の配置関係、出土した遺物などからⅠ期とⅡ期に分けることができ、Ⅱ期はさらに二つに細分できる。

Ⅰ期 (5世紀末) Ⅰ期は竪穴住居によって構成された住居群で、河川487・1085・1200をはさんで西側と東側のグループに大きく分かれ、西側のグループは8棟、東側のグループは1棟である。

西側：西側のグループでは、住居の方向に差異がみられ、その中を方位から二つのグループに分けられる。一つのグループは、R772調査で検出した北で西へ振る竪穴住居1～9と共通する方向を示す、竪穴住居31・56・96・126・357である。もう一つのグループは、ほぼ正方位を示す竪穴住居7・30・551である。R772調査で検出した竪穴住居10・13・14と共通する。

東側：東側のグループでは、竪穴住居1296を1棟検出したが、1棟だけで存在したとは考え難く、調査地とその南側に立地する丘陵の間に、住居が展開する可能性がある。

Ⅰ期の時期は、出土した遺物が少ないため、不明な点が多いが、R772・R775調査を参考にし、5世紀末頃と考えた。

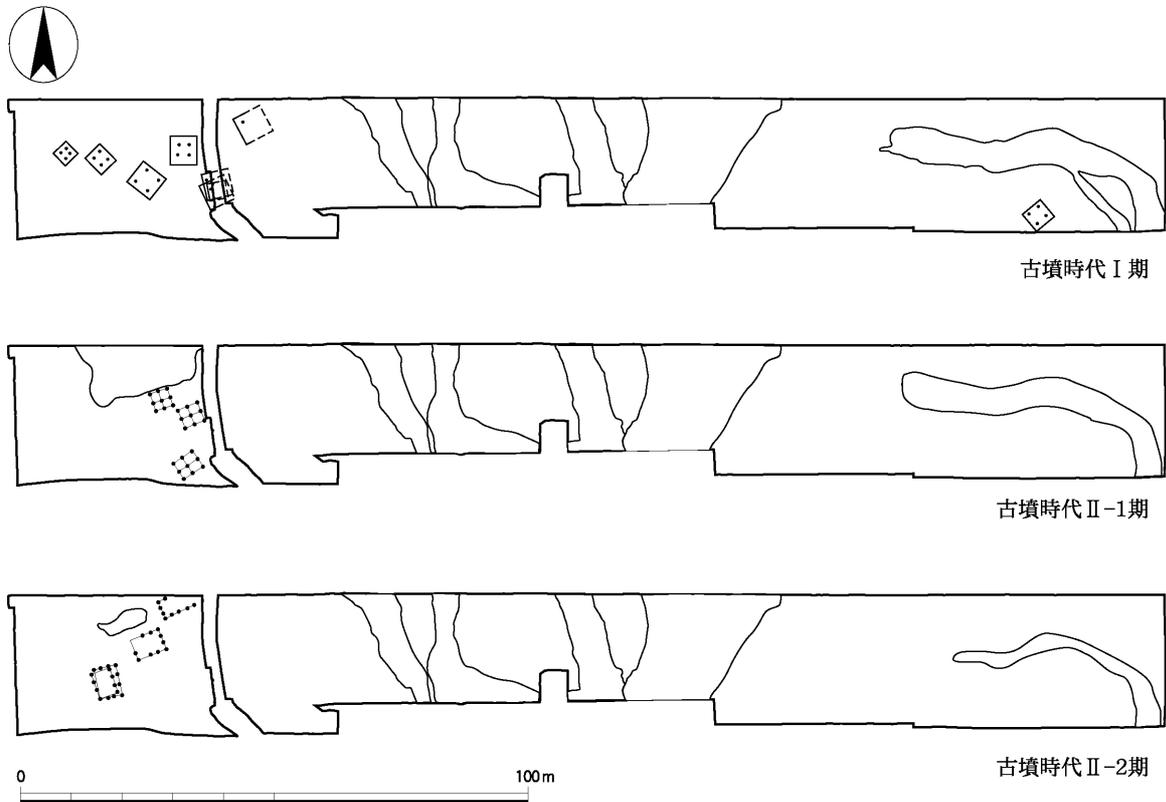


図53 古墳時代遺構変遷図 (1 : 1,500)

Ⅱ-1期（6世紀後半） Ⅱ-1期は方形総柱建物11・299・705によって構成された建物群であり、倉庫と考えられる。建物の向きは若干差異がみられるものの、ほぼ同一方向である。これらの建物の北側には土壙350がある。近接する土壙350からは6世紀から7世紀にかけての遺物が出土した。この土壙350を水田跡と想定し、埋土を採取し自然科学分析を行った結果、イネの植物珪酸体を1gあたり1,400個検出した。この値は耕作地内のイネの密度としては低い値となっているため、水田ではないと考えられる。

Ⅱ-2期（6世紀末～7世紀初） Ⅱ-2期の建物はⅠ期・Ⅱ-1期と重複した位置で検出し、掘立柱建物326・329・374・385によって構成される。掘立柱建物329・374・385は、ほぼ方向をそろえ、同時期の建物とみることができる。掘立柱建物326は、重複関係から掘立柱建物329の建替えと考えられる。これらの建物は、R775調査で検出した建物群と同一方向を示すことから、これらとまとまりを持ち、集落を形成したと推定できる。

Ⅱ期の建物の時期は、建物柱穴から遺物がほとんど出土していないことから不明である。R772・R775調査で検出した建物などから考え、Ⅱ-1期総柱建物群が6世紀後半、Ⅱ-2期掘立柱建物群が6世紀末期～7世紀初めと推定した。

2) 集落の範囲と墓域

今回の調査で検出した遺構と、これまでの調査で検出した遺構とを考え合わせて、集落の範囲と墓域について述べる。

Ⅰ期の集落の範囲 西側グループの西限は、R772調査で検出した溝7と推定され、東限はこの溝から東へ約200mに位置する河川487・1085・1200と考えられ、この間が西側グループとなる。東側グループの西限は、河川487・1085・1200と考えられる。これらの河川から東へ約380mに小畑川によって形成された地形の変換点がみられ、これを東側グループの東限と推定する。竪穴住居1296の北側約5mで東西方向の溝2056を検出した。溝の幅は一定ではないが、断面形や深さがあまり深くないこと、自然地形の傾斜を考慮に入れずに掘削していることなどから、人工的な施設であると考えられ、何らかの区画を示す可能性が高く、グループの北から東を限ると考えている。

この溝の掘削の時期は、出土した土器から5世紀末～6世紀と推測できる。

Ⅱ-1期・Ⅱ-2期の集落の範囲 Ⅱ-1・2期の建物群は、河川487・1085・1200の西側にまとまり、河川の東側からはこの時期の掘立柱建物を検出していないことから、河川から東には展開しないと考えられる。

おわりに、検出した集落と墓域の関係であるが、これまでのR772・775調査では墓とみられる遺構は全く検出されていない。したがって調査地周辺に墓域を求めることになるが、調査地南西部に位置する低位段丘上には、6世紀前半に造営された、墳長40m前後の前方後円墳である井ノ内稲荷塚古墳や井ノ内車塚古墳などが立地している。また、井ノ内稲荷塚古墳と井ノ内車塚古墳の間には、造営が5世紀後半まで遡る、墳丘が比較的小規模な方墳4基と土壙墓3基で構成され

る井ノ内古墳群¹⁾がみられる。これらのことから考え、上里遺跡の墓域はこれらの古墳群が立地する低位段丘上に存在する可能性がある。

(2) 長岡京期の遺構

1) 条坊について

西三坊大路 調査地の西端で、南北方向の柵280を検出した。この柵は約20m確認し、北端は一条大路南側溝南側で止まり、南は丘陵裾部で止まる。この柵の検出面の高さは、西接する調査(R775)で検出した推定西三坊大路西築地の検出面より約0.7m低く、市道3048号線(文化センター通り)より東側は後世に削平を受けたと考えられる。このため柵280に伴う側溝などの遺構は検出できなかった。柵280は、R775調査で検出した築地の心から約29.4m東に位置し、西三坊大路幅10丈(29.6m)に近い数値であることから、西三坊大路東側を区画する施設の可能性がある。また、柵280に直交し、溝4南側で検出した柵322も道路に関連する施設と考えられる。調査地南側のR27・753・830調査では、長岡京期の明確な条坊道路などの遺構を検出できなかった。このため、丘陵上では道路が南側に継続したかどうかは、現在のところ不明な点が多い。

一条大路 調査地の北端で、全長約220mにわたり溝4を検出した。この溝は、十六町域では、溝幅が変化しながら、また途中河川487・1085・1200で途切れながら検出した。九町域でも、溝幅は変化し深さも一定ではないが、連続して検出した。溝兩岸の護岸施設は確認していない。溝4は、R772調査で検出した一条大路南側溝(溝1)に継続すると考えられること、これまでの長岡京条坊推定位置から考え、一条大路南側溝と判断した。一条大路南側溝は西三坊大路路面上でも検出し、大路路面上を横断して、標高の高い四坊から低い三坊へ排水したと考えられる。道路は川によって切られており、橋などの施設が造られていた可能性も高い。

一条大路南側溝の方位は、今回の調査のA区西端(X=-117,284.00・Y=-28,440.82)とB区中央(X=-117,283.66・Y=-28,257.00)を結んだ直線では、西で9'40"南へ振る。

溝4から南約3.5mの位置に、東西方向の溝1020を検出した。この溝1020は、溝4に平行することから、築地内溝と考えられる。河川1200より以東では、溝4と溝1020の中央で、柱穴列2011を検出した。柱穴列2011は南北に並ぶ柱穴2基を1セットとして、東西に約6m間隔で検出したが、掘立柱建物1106以西では間隔が約7~8mとやや長くなる。この対応する1対の柱跡の断面は若干中央に内傾し、築地を造るための板をうける側柱の可能性が高く、築地相当施設と考えた。ただ、柱穴間隔が約6mと他の都城の築地に比べ長く、構造上不明な点も多い。一条大路の路面は、調査区の関係でほとんど検出していない。

2) 宅地について

今回の調査は、十六・九町の北側の調査を行い、その結果、宅地内の北辺部の状況を解明することができ、多様な宅地の利用のあり方を明らかにすることができた。

十六町北西部(A区) 十六町北西部では一条大路に沿って宅地が設定される。この宅地は、南

側に低位段丘があり、南底の掘立柱建物269とその南東部の井戸43で1つのまとまった宅地を構成する。この掘立柱建物269は、正方位である。掘立柱建物269・井戸43は、北側に一条大路南側溝と宅地を画する可能性がある柵322が、西側に西三坊大路東側を画する柵280が、南側に南北に宅地を画する施設の可能性がある柵279があり、三方を柵に囲われる。右京二条四坊八町北東部にあたるR772調査B 6区でも同様に、一条大路の南側で建物と井戸各1基で構成された宅地を検出し、小規模な宅地であると想定できる。

十六町北東部（B区） 十六町北東部では一条大路に沿って宅地が設定される。この宅地には、東底の掘立柱建物238を検出した。この掘立柱建物は、北でやや西へ振る。この建物の西側には長岡京期の河川487が、東側には河川1085がある。この宅地も、十六町北西部と同様な小規模な宅地と考えられる。

九町北西部（B区） 九町北西部では一条大路に沿って宅地が設定される。宅地の西側には長岡京期の河川1200がある。掘立柱建物1106を単独で検出した。この建物の北東は、柵列1103によって囲われる。この掘立柱建物は、正方位である。

これより南では、建物遺構は確認できなかったこと、この建物の北東に囲いを有していること、東にある九町北中央部の掘立柱建物群からはなれていることから、建物1棟で宅地として存在したと考えられる。

九町北中央部（B・C区） 九町北中央部では一条大路に沿って掘立柱建物群が設定される。

これらの掘立柱建物の位置関係や掘形の重複関係や柱筋などから考え、A期・B期二つの時期

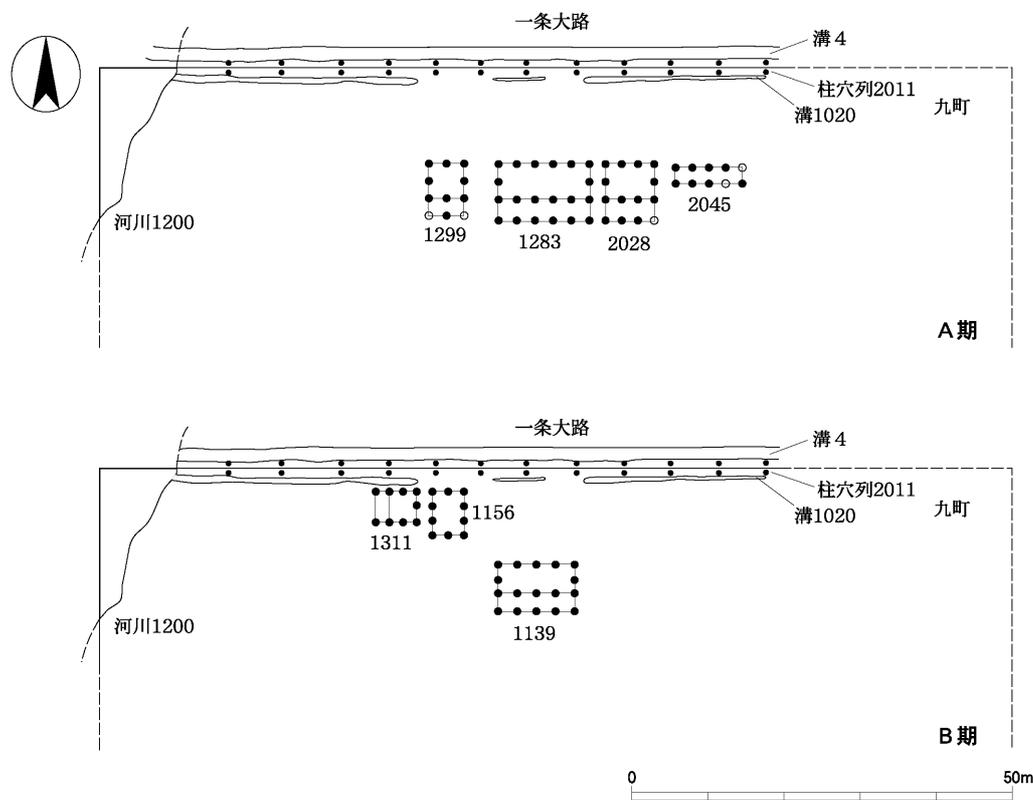


図54 九町北中央部時期別建物概略図（1：1,000）

に分けられる。

A期(図54上) 北中央部にある掘立柱建物1283と2028は、南側柱筋が揃い、ともに南側に同一寸法の底が出る。掘立柱建物1283・1299・2045は、北側柱筋がともに揃う。掘立柱建物1283・1299・2028は、いずれも南庇を持つ構造である。この4棟の掘立柱建物群は、いずれも北側柱筋が溝4中心から約14.5m南に位置していることから、一つの時期にまとまると推定した。

これまでの長岡京の調査例から、大規模宅地のような場合は北部に雑舎群などの建物が配置されることが多いが、今回の掘立柱建物群は、いずれも正方位になっていること、規模が大きいこと、九町北中央部に並置すること、北部に築地相当施設があることなどから、一般的な宅地とは考えがたく官衙的な施設の可能性もある。

B期(図54下) 掘立柱建物1139・1311・1156は、柱間寸法がほぼ同じで、A期の建物に比べ規模が小さい。A期建物群から少し北側寄りに位置し、掘立柱建物1139を除いて北柱筋が溝4中心から約5.1m南に位置している。B期の掘立柱建物は、正方位である。掘立柱建物1139は、身舎の内側に甕を北に寄せて据えた痕跡があり、南側の底部分は作業場として使ったと推測できる²⁾。

B期については、建物規模ががやや小さく、建物の配置が不規則になることから考え、九町北中央部における雑舎群と推定できよう。

註

- 1) 大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団編『長岡京市における後期古墳の調査 長岡京市文化財調査報告書』第44冊 長岡京市教育委員会 2002年
- 2) 木村泰彦「甕据え付け穴を持つ建物について」『瓦衣千年－森 郁夫先生還暦記念論文集－』 森 郁夫先生還暦記念論文集刊行会 1999年

付表1 土壙350出土土器一覧表

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
1	須恵器	杯蓋	12.4	3.0			N7/0 灰白色	20%残
2	須恵器	杯蓋	12.6	2.8			N6/0 灰色	20%残
3	須恵器	杯蓋	13.0	2.8			5PB6/1 青灰色	20%残
4	須恵器	杯蓋	13.0	3.6			5PB7/1 明青灰色	25%残
5	須恵器	杯蓋	14.2	3.3			5PB6/1 青灰色	20%残
6	須恵器	杯蓋	14.0	3.9			N6/0 灰色	50%残
7	須恵器	杯蓋	14.2	4.1			5B6/1 青灰色	50%残
8	須恵器	杯蓋	14.6	3.6			5B5/1 青灰色	30%残
9	須恵器	杯H	12.2	3.5		14.4	N7/0 灰白色	立ち上がり0.7cm 25%残
10	須恵器	杯H	12.6	3.9		14.8	5B6/1 青灰色	立ち上がり1.1cm 45%残
11	須恵器	杯H	12.8	4.1		15.0	N8/0 灰白色	立ち上がり0.9cm 45%残
12	須恵器	杯H	13.2	3.8		15.4	N8/0 灰白色	立ち上がり1.0cm 60%残
13	須恵器	杯H	13.1	4.1		14.8	N7/0 灰白色	立ち上がり0.8cm 40%残
14	須恵器	杯H	13.1	3.9		15.5	N7/0 灰白色	立ち上がり0.6cm 30%残
15	須恵器	杯H	13.6	3.6		15.6	N7/0 灰白色	立ち上がり0.8cm 30%残
16	須恵器	杯H	13.4	3.5		15.6	N6/0 灰色	立ち上がり1.0cm 20%残
17	須恵器	壺蓋	7.4			9.7	N7/0 灰白色	35%残
18	須恵器	高杯蓋	14.2	5.4			N7/B 灰青色	20%残
19	須恵器	高杯	12.5	8.2	10.0	14.4	5PB7/1 明青灰色	90%残
20	須恵器	高杯			11.3		N8/0 灰白色	脚部完存
21	須恵器	甗				8.8	N7/0 灰白色	胴部50%残
22	須恵器	甗				9.6	N7/0 灰白色	胴部40%残
23	須恵器	甗					N7/0 灰白色	底部60%残
24	須恵器	播鉢			8.6		N7/0 灰白色	底部85%残
25	須恵器	甗	16.2				10Y7/1 灰白色	口縁部30%残
26	須恵器	甗	18.2				N8/0 灰白色	15%残
27	須恵器	甗					N5/0 灰色	小片
28	須恵器	甗					N7/0 灰白色	小片

付表2 溝2056出土土器一覧表

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
29	土師器	高杯	11.2	8.6	9.1		2.5YR5/8 明赤褐色	磨滅する 杯部20% 脚部50%残
30	土師器	高杯	15.2				2.5YR5/8 明赤褐色	杯部50%残
31	土師器	高杯			13.0		5YR6/8 橙色	磨滅する 脚部20%残
32	土師器	高杯					2.5YR6/6 橙色	脚部最小径2.3cm 面取り有り
33	土師器	器台					10YR6/6 明黄褐色	脚部最小径3.6cm 透かし有り
34	土師器	高杯			14.0		7.5YR8/4 浅黄橙色	磨滅し調整不明 透かし有り 脚部35%残
35	土師器	小壺	6.0	8.5	3.2	8.0	10YR8/3 浅黄橙色	50%残
36	土師器	甗	11.0				7.5YR7/3 にぶい橙色	小片
37	土師器	甗	12.5				10YR8/2 灰白色	口縁部20%残

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
38	土師器	甕	15.2				7.5YR8/4 浅黄橙色	口縁部60% 体部15%残
39	土師器	甕	15.7				10YR8/3 浅黄橙色	磨滅する 小片
40	土師器	甕	18.6				10YR8/2 灰白色	口縁部35%残
41	土師器	甕					5YR6/6 橙色	頸部径16.0cm 上部煤付着 20%残
42	土師器	甕				29.6	7.5YR6/8 橙色	把手を含んだ最大径39.2cm 底部95%残
43	土師器	甗	20.5				10YR7/3 にぶい黄橙色	磨滅する 口縁部10%残
44	須恵器	杯蓋	14.5	3.9			5PB5/1 青灰色	口縁部20% 底部50%残
45	須恵器	杯H	11.2	4.9		13.5	5PB6/1 青灰色	立ち上がり1.6cm 30%残
46	須恵器	杯H	10.8	4.4		13.0	N6.5/B 青灰色	立ち上がり1.2cm 30%残
47	須恵器	杯H	11.0	4.4		13.5	N7/0 灰白色	立ち上がり1.9cm 20%残
48	須恵器	杯H	11.4			14.0	N6/B 青灰色	立ち上がり1.4cm 20%残
49	須恵器	杯H	11.0	4.8		13.8	7.5Y5/1~6/1 灰色	立ち上がり1.1cm 35%残
50	須恵器	杯H				14.6	N6.5/0 灰白色	底部40%残
51	須恵器	甕	22.0				N7/0 灰白色	口縁部15%残

付表3 溝2063出土土器一覧表

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
52	須恵器	杯蓋	13.0	3.6			5PB7/1 明青灰色	15%残
53	須恵器	杯H	11.6	3.7		13.6	5PB7/1 明青灰色	立ち上がり1.4cm 40%残
54	須恵器	杯H	12.4	5.1		14.4	5PB7/1 明青灰色	立ち上がり1.4cm 40%残
55	土師器	甕(耳部)					7.5YR7/4 にぶい橙色	耳部完存

付表4 河川487下層出土土器一覧表

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
56	須恵器	杯蓋	12.5	5.0			N5/B 青灰色	肩の稜強い 60%残
57	須恵器	杯蓋	12.5	4.2			N6.5/B 灰青色	肩の稜強い 90%残
58	須恵器	杯蓋	13.2	4.3			5RP7/1 明紫灰色	肩の稜強い 45%残
59	須恵器	杯蓋	14.0	(4.8)			7.5Y7/1 灰白色	天井部にヘラ記号 35%残
60	須恵器	杯蓋	14.0	4.5			N7/PB 明灰色	肩の稜強い 15%残
61	須恵器	杯蓋	15.0	4.9			7.5Y8/1 灰白色	肩の稜強い 30%残
62	須恵器	高杯蓋	12.0	4.9			N7/B 明青灰色	肩の稜強い 60%残
63	須恵器	高杯蓋	13.0	6.2			N6/B 青灰色	肩の稜強い 50%残
64	須恵器	高杯蓋	12.6	4.7			N6/B 青灰色	肩の稜強い 50%残
65	須恵器	高杯蓋	16.0	(4.8)			N6/G 灰緑色	稜不明瞭 50%残
66	須恵器	杯蓋	14.0	3.5			5PB6/1 青灰色	稜無し 天井部完存
67	須恵器	杯蓋	14.4	3.7			5PB6/1 青灰色	稜無し 15%残
68	須恵器	杯蓋	14.2	3.3			5PB6/1 青灰色	稜無し 15%残
69	須恵器	杯蓋	14.0	3.9			5PB6/1 青灰色	稜不明瞭 60%残
70	須恵器	杯蓋	14.5	4.1			N7/B 灰青色	50%残
71	須恵器	杯蓋	15.6	3.8			N6/B 灰青色	50%残
72	須恵器	杯蓋	14.6	3.9			N6.5/BG 青灰色	口縁部25% 天井部60%残
73	須恵器	杯蓋	13.4	4.1			N6/B 灰青色	40%残

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
74	須恵器	杯蓋	13.2	4.1			5PB5/1 青灰色	天井部完存 口縁部15%残
75	須恵器	杯蓋	13.8	4.4			5Y6/1 灰色	65%残
76	須恵器	杯蓋	13.8	4.0			N6/B 灰青色	50%残
77	須恵器	杯蓋	14.1	4.5			5PB6/1 青灰色	30%残
78	須恵器	杯蓋	14.0	4.4			5PB6/1 青灰色	60%残
79	須恵器	杯蓋	14.2	4.3			N6/0 灰色	80%残
80	須恵器	杯蓋	14.5	4.5			N5/B 青灰色	天井部にヘラ記号 65%残
81	須恵器	杯蓋	15.0	4.3			5P7/1 明紫灰色	40%残
82	須恵器	杯蓋	13.4	4.8		14.0	N6/PB 青灰色	50%残
83	須恵器	杯蓋	14.2	4.5			5PB6/1 青灰色	30%残
84	須恵器	杯蓋	15.2	4.5			10YR5/2 灰黄褐色	30%残
85	須恵器	杯蓋	14.6	5.1			2.5Y8/1 灰白色	50%残
86	須恵器	杯蓋	14.9	4.0			5PB6/1 青灰色	40%残
87	須恵器	杯蓋	13.8	4.1		14.6	N6/B 青灰色	65%残
88	須恵器	杯蓋	14.5	3.9			N7/B 灰青色	50%残
89	須恵器	杯蓋	14.2	4.0			N7/PB 灰青色	天井部40%残
90	須恵器	杯蓋	13.3	3.7			5P8/1 灰白色	40%残
91	須恵器	杯蓋	13.5	3.3			N5/B 青灰色	90%残
92	須恵器	杯蓋	14.3	3.4			5RP6/1 紫灰色	50%残
93	須恵器	杯蓋	14.6	3.6			7.5Y5/1 灰色	60%残
94	須恵器	杯蓋	14.5	4.0			N7/B 灰青色	65%残
95	須恵器	杯蓋	14.5	3.7			10YR5/1 褐灰色	40%残
96	須恵器	杯蓋	14.2	3.9			N5/B 青灰色	85%残
97	須恵器	杯蓋	14.4	3.8			5PB7/1 明青灰色	20%残
98	須恵器	杯H	9.7	4.0		12.1	N6/B 灰青色	立ち上がり1.6cm 80%残
99	須恵器	杯H	9.9	4.5		12.0	N8/PB 灰青色	立ち上がり1.7cm 55%残
100	須恵器	杯H	10.2	4.4		12.1	10B6/2 青灰色	立ち上がり1.45cm 90%残
101	須恵器	杯H	10.2	(4.5)		11.8	N7/0 灰白色	立ち上がり1.9cm 20%残
102	須恵器	杯H	10.8	4.8		13.2	N4.5/B 暗青灰色	立ち上がり2.0cm 口縁部25% 体部60%残
103	須恵器	杯H	11.6	5.2		14.2	N7/0 灰白色	立ち上がり1.7cm 65%残
104	須恵器	杯H	9.9	4.3		12.1	2.5B6/4 青灰色	立ち上がり1.75cm 90%残
105	須恵器	杯H	10.4	4.8		12.8	N6/B 青灰色	立ち上がり1.9cm 15%残
106	須恵器	杯H	11.7	3.9		14.3	7.5PB6/1 明青灰色	立ち上がり0.8cm 25%残
107	須恵器	杯H	12.0	3.7		14.1	N6/P 灰紫色	立ち上がり0.7cm 80%残
108	須恵器	杯H	11.7	3.9		14.4	N6/B 青灰色	立ち上がり0.9cm 40%残
109	須恵器	杯H	12.8	4.6		15.1	N5/0 灰色	立ち上がり1.1cm 60%残
110	須恵器	杯H	12.4	3.4		14.6	N7/0 灰白色	立ち上がり1.0cm 45%残
111	須恵器	杯H	11.7	4.1		13.8	N6/B 灰青色	立ち上がり0.7cm 60%残
112	須恵器	杯H	11.6	4.1		14.0	N6/B 灰青色	立ち上がり0.7cm 50%残
113	須恵器	杯H	12.2	3.4		14.5	N6/B 灰青色	立ち上がり0.7cm 80%残

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
114	須恵器	杯H	12.5	4.9		14.3	7.5Y6/1 灰色	立ち上がり0.5cm 45%残
115	須恵器	杯H	12.1	4.1		14.5	N6/B 灰青色	立ち上がり0.9cm 45%残
116	須恵器	杯H	12.5	4.5		14.7	N7/0 灰白色	立ち上がり0.7cm 90%残
117	須恵器	杯H	12.6	4.5		15.1	5PB5/1 青灰色	立ち上がり0.8cm 底部にヘラ記号 90%残
118	須恵器	杯H	12.5	4.0		14.8	N7/0 灰白色	立ち上がり0.8cm 15%残
119	須恵器	杯H	12.8	4.7		15.5	N5/B 青灰色	立ち上がり1.1cm 75%残
120	須恵器	杯H	11.2	3.6		13.5	N6/B 灰青色	立ち上がり0.5cm 60%残
121	須恵器	杯H	12.3	3.6		14.2	N6/B 灰青色	立ち上がり0.7cm 50%残
122	須恵器	杯H	12.0	3.8		14.6	N6/B 灰青色	立ち上がり0.7cm 65%残
123	須恵器	杯H	11.5	4.5		14.0	N6/B 灰青色	立ち上がり0.9cm 50%残
124	須恵器	杯H	12.5	4.1		14.5	N6/B 灰青色	立ち上がり0.8cm 55%残
125	須恵器	杯H	13.6	4.3		15.5	N7/0 灰白色	立ち上がり0.8cm 80%残
126	須恵器	杯H	13.0	3.9		15.2	N6/0 灰色	立ち上がり1.1cm 30%残
127	須恵器	杯H	12.8	4.0		15.0	N6.5/B 青灰色	立ち上がり0.9cm 75%残
128	須恵器	杯H	12.1	3.9		14.4	N7/B 灰青色	立ち上がり0.7cm 65%残
129	須恵器	杯H	12.0	4.3		14.5	N6/B 灰青色	立ち上がり1.0cm 45%残
130	須恵器	杯H	11.9	3.6		12.1	10BG6/1 青灰色	立ち上がり0.8cm 90%残
131	須恵器	杯H	12.7	3.3		15.0	N6/B 灰青色	立ち上がり0.5cm 70%残
132	須恵器	杯H	12.0	3.8		14.3	N7/0 灰白色	立ち上がり0.7cm 25%残
133	須恵器	杯H	12.9	4.6		15.0	N7/0 灰白色	立ち上がり0.7cm 50%残
134	須恵器	杯H	12.4	4.8		14.8	N7/B 灰青色	立ち上がり1.0cm 60%残
135	須恵器	杯H	12.1	4.1		14.4	5PB8/1 青灰色	立ち上がり1.0cm 50%残
136	須恵器	杯H	12.2	4.1		14.6	5B5/1 青灰色	立ち上がり0.8cm 底部完存
137	須恵器	杯H	12.4	3.9		14.7	N7/B 灰青色	立ち上がり0.8cm 40%残
138	須恵器	杯H	12.8	4.0		14.7	7.5BG7/1 明青灰色	立ち上がり0.7cm 90%残
139	須恵器	杯H	12.5	5.2		15.2	10B8/1 明青灰色	立ち上がり1.0cm 90%残
140	須恵器	杯H	12.7	4.4		15.2	N7/0 灰白色	立ち上がり0.8cm 25%残
141	須恵器	杯H	12.3	4.6		15.0	N6/B 灰青色	立ち上がり0.9cm 55%残
142	須恵器	杯H	13.3	4.5		15.4	N6/B 灰青色	立ち上がり0.7cm 90%残
143	須恵器	杯H	13.3	4.5		15.8	N5/0 灰色	立ち上がり0.7cm 75%残
144	須恵器	杯H	14.0	3.4		16.4	N7/B 青灰色	立ち上がり1.2cm 45%残
145	須恵器	杯H	14.1	4.7		17.0	N6/B 青灰色	立ち上がり1.2cm 20%残
146	須恵器	高杯	11.0	10.0	8.1		N5/0 灰色	脚部透かし3方 60%残
147	須恵器	高杯	13.8	11.2	8.4		N6/0 灰色	脚部透かし3方 60%残
148	須恵器	高杯			9.1		N7/0 灰白色	脚部円形透かし 10%残
149	須恵器	壺	8.2			14.6	N7/PB 灰青色	口縁部5% 体部15%残
150	須恵器	壺	10.9	16.6		19.8	N4/0 灰色	ケズリ右回り 25%残
151	須恵器	高杯			9.2		N5.5/B 灰青色	脚部ほぼ完存
152	須恵器	甗(壺?)				7.3	5PB6/1 青灰色	底部ヘラオコシ後ナデ 30%残
153	須恵器	甗				8.5	N7/0 灰白色	ケズリ右回り 35%残

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
154	須恵器	壺	9.2				N7/0 灰白色	口縁部25%残
155	須恵器	提瓶	8.4	(20.8)			N5/0 灰色	口縁部40% 体部60%残
156	須恵器	提瓶	6.8	20.0		16.9	N7/0 灰白色	70%残
157	須恵器	壺	11.2				N6/B 灰青色	横瓶か? 口縁部45%残
158	須恵器	壺	13.0				N7/0 灰白色	口縁部40%残
159	須恵器	甕	13.8				N6.5/B 青灰色	口縁部70%残
160	須恵器	壺	11.8				N7/B 灰青色	口縁部40%残
161	須恵器	壺	13.2				5PB6/1 青灰色	口縁部60%残
162	須恵器	甕	17.0				N6/B 灰青色	口縁部20%残
163	須恵器	甕	17.2				N5/0 灰色	口縁部30%残
164	須恵器	甕	15.8				N7/B 灰青色	口縁部45%残
165	須恵器	甕	22.0				N7/B 灰青色	口縁部70%残
166	須恵器	甕					5Y7/1 灰白色	焼成やや軟質 小片
167	須恵器	甕					5Y8/1 灰白色	焼成やや軟質 小片
168	須恵器	甕	14.8				N6/0 灰色	口縁部25%残
169	須恵器	甕	16.0				5Y6/1 灰色	口縁部5%残
170	須恵器	甕	18.5	(23.6)		23.2	7.5Y5/1 灰色	50%残
171	須恵器	甕	16.1				N5/B 青灰色	韓式土器 口縁部50%残 胴部接合せず
172	須恵器	甕	18.2				N6/B 灰青色	口縁部30%残
173	須恵器	甕	17.3				N7/B 灰青色	口縁部40%残
174	須恵器	甕	20.0			31.7	N5/0 灰色	胴部カキ目なし 口縁部95%残
175	須恵器	甕	18.8				N6/0 灰色	口縁部55%残
176	須恵器	甕	20.1			31.7	5PB6/1 青灰色	口縁部90%残
177	須恵器	甕	19.9	(33.0)		34.9	N5/0 灰色	60%残

付表5 河川1085・1200下層出土土器一覧表

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
178	須恵器	杯H	10.5	4.0		12.5	N6/B 灰青色	立ち上がり0.8cm 35%残
179	須恵器	杯H	10.8	3.8		13.0	N5/Y 灰黄色	立ち上がり0.6cm 30%残
180	須恵器	杯H	11.1	3.9		13.2	N6/B 灰青色	立ち上がり0.6cm 50%残
181	須恵器	杯H	11.2	4.1		13.6	2.5Y8/2 灰白色	立ち上がり0.7cm 95%残
182	須恵器	杯H	12.0	4.1		14.1	N6/B 灰青色	立ち上がり0.7cm 70%残
183	須恵器	杯H	13.6	4.9		16.3	5PB6/1 青灰色	立ち上がり1.4cm 40%残
184	須恵器	高杯			16.6		N5/G 灰緑色	2段透かし3方 40%残
185	須恵器	甕	23.0				N7/0 灰白色	口縁部20%残
186	須恵器	横瓶	10.1				5B6/1 青灰色	20%残

付表6 井戸43出土土器一覧表

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
187	土師器	椀AⅡ	15.7	2.4			5YR7/4 にぶい橙色	15%残
188	土師器	椀AⅡ	15.5	2.5			5YR8/4 淡橙色	15%残
189	土師器	皿AⅡ	15.6	2.5			10YR8/3 浅黄橙色	30%残

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
190	土師器	皿AⅡ	16.2	2.6			5YR6/6 橙色	小片
191	土師器	皿AⅡ	16.6	2.9			2.5Y8/2 灰白色	40%残
192	土師器	皿AⅡ	16.2	2.6			10YR7/2 にぶい黄橙色	外面底部に墨書 15%残
193	土師器	皿AⅡ	15.9	2.4			2.5YR6/4 にぶい橙色	底部のみケズリ 外面底部に「□麻呂の墨書」 80%残
194	土師器	皿AⅠ	20.4	2.1			7.5YR6/3 にぶい褐色	口縁部30%残
195	土師器	皿AⅠ	21.2	2.9			5YR8/3 淡橙色	底部のみケズリ 65%残
196	土師器	鉢	11.2	3.4			7.5YR8/3 浅黄橙色	85%残
197	土師器	椀AⅡ	12.2	3.8			10YR7/2 にぶい黄橙色	口縁部40%残
198	土師器	椀AⅠ	13.4	3.5			10YR7/2 にぶい黄橙色	80%残
199	土師器	椀AⅠ	13.2	3.8			7.5YR7/3 にぶい橙色	50%残 底部を欠く
200	土師器	椀AⅠ	14.3	4.0			10YR7/2 にぶい黄橙色	口縁端部煤付着 灯明皿 95%残
201	土師器	杯A	16.2	4.4			2.5Y7/2 灰黄色	50%残
202	土師器	杯A	17.6	4.0			7.5YR7/4 にぶい橙色	内面7.5YR6/3 30%残
203	土師器	杯A	18.7	3.8			5YR7/4 にぶい橙色	外面ケズリ 90%残
204	土師器	杯A	17.7	5.4			10YR7/2 にぶい黄橙色	75%残
205	土師器	杯B	19.2	5.1	13.2		10YR8/2 灰白色	内面墨付着 外面ミガキ 口縁部15%残
206	須恵器	杯A	13.9	3.7	10.2		N8/0 灰白色	口縁部20%残
207	須恵器	杯B	11.8	5.2	8.3		5PB4/1 暗青灰色	火裏2.5YR6/3 完存
208	須恵器	椀B	13.4	5.1	7.2		N6/0 灰色	貼り付け高台 50%残
209	須恵器	壺	7.8	20.1	7.4	14.4	N7/0 灰白色	80%残

付表7 土壙488出土土器一覧表

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
210	須恵器	杯B	15.7	4.6	11.3		N6/0 灰色	口縁部35%残
211	須恵器	杯B	16.3	4.2	12.2		N7/0 灰白色	60%残
212	須恵器	小壺	4.5	3.2	4.7		N5/0 灰色	口縁部25% 底部70%残

付表8 土壙1038出土土器一覧表

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
213	須恵器	蓋	(12.5)				N6/B 灰青色	口縁部10%残
214	須恵器	蓋	15.5				N7/0 灰白色	口縁部10%残
215	須恵器	杯B	11.9	4.4	9.0		N7/0 灰白色	20%残
216	須恵器	杯B			8.6		N7/0 灰白色	底部45%残
217	須恵器	杯B			9.2		N7/0 灰白色	底部15%残
218	須恵器	杯B			12.4		N7/0 灰白色	底部15%残
219	須恵器	壺蓋	17.4				7.5Y7/1 灰白色	45%残
220	須恵器	甕	23.0				7.5Y7/1 灰白色	口縁部20%残

付表9 土壙1132出土土器一覧表

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
221	土師器	椀A	12.2	3.6			10R6/8 赤橙色	80%残
222	土師器	椀A	12.7	3.6			7.5YR8/2 灰白色	15%残
223	土師器	椀A	12.4	3.6			7.5YR8/2 灰白色	25%残

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
224	土師器	椀A	12.6	3.1			5YR6/6 橙色	器表荒れ調整不明 15%残
225	土師器	椀A	12.8	2.9			5YR6/6 橙色	15%残
226	土師器	杯A	15.0	3.7			5YR6/6 橙色	器表荒れ調整不明 15%残
227	土師器	杯蓋					10YR7/4 にぶい黄橙色	つまみ径2.6cm つまみ完存
228	土師器	杯蓋	22.4	4.0			5YR6/6 橙色	つまみ径2.4cm 50%残
229	土師器	皿A I	20.0	2.5			7.5YR7/4 にぶい橙色	15%残
230	土師器	盤	35.4				7.5YR7/4 にぶい橙色	高台の剥離痕が残る 20%残
231	土師器	甕	16.2			19.6	10YR4/2 灰黄褐色	外面刷毛目 15%残
232	須恵器	杯A	12.4	3.6			N7/0 灰白色	底部に墨書有り 40%残
233	須恵器	杯A	16.2	2.8			N7/B 灰青色	10%残
234	須恵器	椀	8.0	5.9			5Y7/2 灰白色	45%残
235	須恵器	杯蓋	18.0				N7/0 灰白色	小片
236	須恵器	杯蓋	19.0	1.7			N7/0 灰白色	25%残
237	須恵器	杯蓋	20.8	3.3			N7/0 灰白色	15%残
238	須恵器	壺G			5.4		10Y8/1 灰白色	底部糸切り 55%残

付表10 土壙1252出土土器一覧表

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
239	土師器	椀A	12.3	3.6			7.5YR7/4 にぶい橙色	器表磨滅し調整不明 90%残
240	土師器	杯A	16.4	4.4			7.5YR7/6 橙色	器表磨滅し調整不明 20%残
241	土師器	盤	31.7	8.1	12.4		5YR8/4 淡橙色	器表磨滅し調整不明 75%残
242	土師器	甕	17.6			18.8	10YR7/2 にぶい黄橙色	口縁部25%残
243	土師器	甕	28.0				10YR8/2 灰白色	口縁部20%残
244	須恵器	壺蓋	9.2				5PB7/1 明青灰色	口縁部15%残
245	須恵器	杯蓋	14.6	1.6			N7/0 灰白色	つまみ完存 口縁部10%残
246	須恵器	杯蓋	15.1	3.4			N7/B 灰青色	つまみ完存 口縁部20%残
247	須恵器	杯A	12.8	4.1			2.5Y8/1 灰白色	底部90% 口縁部10%残
248	須恵器	杯B	14.1	4.2	10.2		N7/0 灰白色	底部25% 口縁部5%残
249	須恵器	杯B			11.0		5PB6/1 青灰色	底部25%残
250	須恵器	杯B			12.5		N7/B 灰青色	底部20%残

付表11 土壙1328出土土器一覧表

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
251	土師器	皿A II	15.0	2.3			2.5YR6/6 橙色	小片
252	土師器	皿A II	16.0				7.5YR6/6 橙色	10%残
253	土師器	皿A I	18.5	2.2			5YR7/6 橙色	10%残
254	土師器	皿A I	19.0	2.6			10YR8/4 浅黄橙色	15%残
255	土師器	皿A I	18.5	2.9			10YR8/4 浅黄橙色	15%残
256	土師器	皿A I	21.0	2.8			5YR7/6 橙色	10%残
257	土師器	椀A II	12.5				7.5YR8/3 浅黄橙色	45%残
258	土師器	杯A	16.0	3.8			10YR8/3 浅黄橙色	25%残
259	土師器	杯B			13.0		7.5YR7/6 橙色	高台部15%残

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
260	土師器	蓋	28.5	5.1			10YR7/3 にぶい黄橙色	25%残
261	土師器	高杯	33.5				7.5YR7/6 橙色	杯部15%残
262	土師器	高杯			14.5		7.5YR7/6 橙色	裾部25%残
263	土師器	羽釜	31.1			35.2	10YR8/4 浅黄橙色	小片
264	土師器	甕	24.5				7.5YR7/6 橙色	口縁部20%残
265	土師器	甕	15.0				7.5YR7/6 橙色	外面煤付着 口縁5% 肩20%残
266	製塩土器		10.5				5YR7/6 橙色	口縁部40% 体部60%
267	黒色土器	椀	13.5	4.2			7.5YR6/3 にぶい褐色	内面のみ黒化するA類 25%残
268	須恵器	杯蓋	13.8				5PB6.5/1 青灰色	20%残
269	須恵器	杯蓋	14.0				N7/B 青灰	25%残
270	須恵器	杯蓋	18.3	3.5			5PB6/1 青灰色	60%残 つまみ径2.6cm
271	須恵器	杯蓋	18.0				N7/0 灰白色	25%残
272	須恵器	杯B	12.6	3.4	9.7		N7/B 青灰色	口縁部10% 高台部20%残
273	須恵器	杯B	15.6	5.8	10.5		10Y5/1 灰色	高台部20% 口縁部20%残
274	須恵器	杯B	15.8	5.2	11.6		5Y7.5/1 灰白色	軟質 口縁部10% 底部45%残
275	須恵器	杯B	16.6	4.9	12.1		7.5Y7/1 灰白色	やや軟質 60%残
276	須恵器	杯B			11.0		5PB6/1 青灰色	高台部30%残
277	須恵器	杯A	12.8	3.1	9.5		5PB7/1 明青灰色	やや軟質 50%残
278	須恵器	杯A	12.7	3.2	9.5		7.5Y8/1 灰白色	軟質 口縁10% 底部25%残
279	須恵器	杯A	14.2	2.7	12.0		7.5Y8/1 灰白色	軟質 口縁10% 底部15%残
280	須恵器	皿	15.0	1.7	12.0		7.5Y8/1 灰白色	15%残
281	須恵器	鉢					N7/0 灰白色	やや軟質 小片
282	須恵器	鉢	25.0		(13.2)	26.2	5Y7/1 灰白色	軟質 50%残
283	須恵器	壺蓋	15.9			16.6	N7/B 青灰色	15%残
284	須恵器	壺	7.0				7.5Y7/1 灰白色	口縁部20%残
285	須恵器	甕	21.0				N4/0 灰色	口縁部15%残

付表12 河川487上層出土土器一覧表

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
286	須恵器	杯G蓋	8.2	2.2			N6/B 灰青色	95%残
287	須恵器	杯G蓋	10.8	3.2			N7/0 灰白色	70%残
288	須恵器	杯G蓋	11.0				N6/B 灰青色	20%残
289	須恵器	杯G	9.4	3.5	6.5		N7/B 灰青色	底部45% 口縁部15%残
290	須恵器	杯G	9.2	3.8	7.0		7.5Y6/1 灰色	底部35% 口縁部10%残
291	須恵器	杯G	9.4	3.0	6.7		N5/B 青灰色	75%残
292	須恵器	椀	8.7	4.1	6.2		N6/B 灰青色	底部75% 口縁部30%残
293	須恵器	椀	9.1	5.2	6.5		N6/B 灰青色	底部35% 口縁部10%残
294	須恵器	杯A	9.6	3.2	6.1		N7/0 灰白色	40%残
295	須恵器	杯A	10.0	3.0	7.7		N6/B 灰青色	25%残
296	須恵器	杯A	10.0	3.1	6.5		N7/B 灰青色	底部75% 口縁部10%残
297	須恵器	杯A	10.3	3.5	7.2		N7/B 灰青色	85%残

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
298	須恵器	杯A	10.7	3.0	7.5		N7/0 灰白色	90%残
299	須恵器	杯A	10.5	3.6	6.8		N5/B 青灰色	70%残
300	須恵器	杯A	10.9	3.2	8.4		N7/0 灰白色	80%残
301	須恵器	杯A	11.0	3.5	7.6		N6/B 灰青色	50%残
302	須恵器	杯A	11.0	3.5	8.7		N6/B 灰青色	杯蓋か？ 20%残
303	須恵器	杯A	11.0	3.7	7.1		N7/0 灰白色	底部65% 口縁部30%残
304	須恵器	杯A	11.0	3.0	7.8		N7/B 灰青色	25%残
305	須恵器	杯A	11.0	3.5	7.7		N6/B 灰青色	底部45% 口縁部25%残
306	須恵器	杯A	11.5	3.8	8.4		N6/B 灰青色	60%残
307	須恵器	杯A	11.3	3.6	8.2		N7/B 灰青色	60%残
308	須恵器	杯A	11.6	3.6	8.2		N7/B 灰青色	底部50% 口縁部5%残
309	須恵器	杯A	11.5	3.8	7.2		N6/B 灰青色	底部完存 口縁部35%残
310	須恵器	杯A	11.5	4.0	8.4		N7/B 灰青色	70%残
311	須恵器	杯A	12.0	3.8	8.3		N7/B 灰青色	底部55% 口縁部10%残
312	須恵器	杯A	12.5	3.0	8.9		N6/B 灰青色	90%残
313	須恵器	杯A	15.5	2.9	11.1		N6/B 灰青色	底部完存 口縁部20%残
314	須恵器	杯A	13.0	4.7	9.9		N6/B 灰青色	35%残
315	須恵器	杯A	14.2	4.3	11.4		N7/B 灰青色	35%残
316	須恵器	杯A	14.4	4.2	11.0		N6/B 灰青色	底部65% 口縁部5%残
317	須恵器	杯A	14.7	4.1	10.8		N7/B 灰青色	60%残
318	須恵器	杯A	15.0	4.6	11.0		N7/B 灰青色	25%残
319	須恵器	杯A	16.4	4.6	12.7		7.5Y7/1 灰白色	底部80% 口縁部15%残
320	須恵器	杯B	11.1	3.5	7.5		N7/B 灰青色	底部25%残
321	須恵器	杯B	13.1	3.7	8.6		N6/B 灰青色	底部完存 口縁部30%残
322	須恵器	杯B	14.6	4.0	11.2		N5/B 青灰色	底部15% 口縁部5%残
323	須恵器	杯B	15.6	3.9	11.4		N6/B 灰青色	底部15% 口縁部5%残
324	須恵器	杯B			7.5		N6/B 灰青色	底部25%残
325	須恵器	杯B			9.8		N7/B 灰青色	底部25%残
326	須恵器	杯B			10.4		N7/0 灰白色	底部30%残
327	須恵器	杯B			10.5		5Y8/1 灰白色	底部完存
328	須恵器	杯B			12.0		N7/0 灰白色	底部30%残
329	須恵器	杯蓋					N6/B 灰青色	つまみ径2.7cm つまみ完存
330	須恵器	杯蓋					N6/B 灰青色	つまみ径3.4cm つまみ完存
331	須恵器	杯蓋					N7/B 灰青色	つまみ径3.0cm つまみ完存
332	須恵器	杯蓋					5PB6/1 青灰色	つまみ径3.4cm つまみ完存
333	須恵器	杯蓋					N7/B 灰青色	つまみ径4.1cm つまみ完存
334	須恵器	杯蓋					5Y7/1 灰白色	つまみ径2.8cm つまみ30%残
335	須恵器	杯蓋					5PB7/1 明青灰色	つまみ径3.7cm つまみ完存
336	須恵器	杯蓋					N7/B 灰青色	つまみ径3.2cm つまみ完存
337	須恵器	杯蓋					5Y8/1 灰白色	つまみ径2.2cm つまみ完存

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
338	須恵器	杯蓋					N6/B 灰青色	つまみ径2.5cm つまみ完存
339	須恵器	杯蓋					N6/B 灰青色	つまみ径3.0cm つまみ完存
340	須恵器	杯蓋					2.5Y8/1 灰白色	つまみ径2.9cm つまみ完存
341	須恵器	杯蓋	14.0				N7/B 灰青色	20%残
342	須恵器	杯蓋	14.5				N6/B 灰青色	20%残
343	須恵器	杯蓋	16.5				N7/B 灰青色	25%残
344	須恵器	杯蓋	17.6	3.8			N6/B 灰青色	つまみ完存 口縁部15%残
345	須恵器	蓋	11.0				5PB6/1 青灰色	15%残
346	須恵器	杯蓋	17.5				N7/B 灰青色	歪み大 70%残

付表13 河川1085上層出土土器一覧表

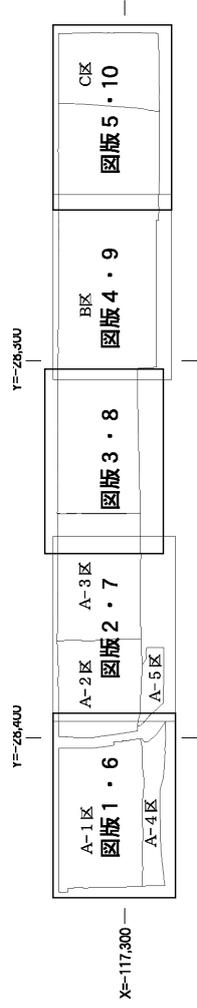
番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
347	土師器	椀A	11.3	4.0			10YR8/2 灰白色	外面粗いミガキ 10%残
348	土師器	椀A	12.0	3.6			5YR6/6 橙色	50%残
349	土師器	椀A	11.6	3.7			10YR8/2 灰白色	20%残
350	土師器	椀A	12.2	3.5			7.5YR8/2 灰白色	20%残
351	土師器	皿AⅡ	15.3	2.4			7.5YR6/4 にぶい橙色	50%残
352	土師器	皿A	16.6	2.3			10YR8/2 灰白色	底部のみケズリ 10%残
353	土師器	皿AⅠ	21.4	2.3			5YR6/4 にぶい橙色	60%残
354	土師器	杯B蓋	14.4	2.4			2.5Y8/3 淡黄色	外面ミガキ 40%残
355	土師器	杯B蓋					7.5YR6/3 にぶい褐色	外面ミガキ つまみ完存
356	土師器	杯B	16.6	4.0	11.0		10YR8/2 灰白色	外面ミガキ 10%残
357	土師器	杯B	17.9	4.9	11.4		2.5Y8/2 灰白色	外面ミガキ 40%残
358	土師器	杯B	18.2	5.6	11.3		2.5Y8/2 灰白色	外面ミガキ 20%残
359	土師器	高杯	26.4				10YR8/3 浅黄橙色	10%残
360	土師器	高杯			11.4		10YR8/2 灰白色	脚部面取り8面 脚部95%残
361	土師器	高杯			13.7		7.5YR7/4 にぶい橙色	脚部面取り8面 20%残
362	土師器	甕	17.6				10YR7/3 にぶい黄橙色	口縁部25%残
363	土師器	甕	19.2				7.5YR6/3 にぶい褐色	10%残
364	土師器	甕	22.2				10YR8/2 灰白色	10%残
365	土師器	甕	25.4				7.5YR7/3 にぶい橙色	10%残
366	須恵器	杯G蓋	10.6				N7/B 灰青色	40%残
367	須恵器	杯G	9.8	3.6			5PB5/1 青灰色	底部75% 口縁部10%残
368	須恵器	杯G	9.8	3.8			5PB6/1 青灰色	70%残
369	須恵器	杯蓋	13.1				N7/B 灰青色	硯に転用 60%残
370	須恵器	杯蓋	13.6	2.3			N6/B 灰青色	50%残
371	須恵器	杯蓋	13.7	2.3			N6/B 灰青色	70%残
372	須恵器	杯蓋					2.5Y7/2 灰黄色	つまみ部完存
373	須恵器	杯蓋					N5/B 青灰色	つまみ部完存
374	須恵器	杯蓋					N7/B 灰青色	つまみ部完存
375	須恵器	杯蓋					N7/Y 灰黄色	つまみ部完存

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
376	須恵器	杯B	9.0	3.1	6.3		N6/B 灰青色	60%残
377	須恵器	杯B	12.9	3.8	9.9		2.5Y8/2 灰白色	90%残
378	須恵器	杯B			9.8		2.5Y8/2 灰白色	底部95%残
379	須恵器	杯B			11.5		N7/B 灰青色	底部完存
380	須恵器	杯A	13.0	3.5			N7/B 灰青色	65%残
381	須恵器	杯A	13.2	3.4			5Y6/1 灰色	95%残
382	須恵器	杯A	14.0	4.2			2.5Y8/2 灰白色	口縁部25%残
383	須恵器	杯A	14.5	3.1			2.5Y8/2 灰白色	20%残
384	須恵器	杯A	15.5	3.2			2.5Y8/2 灰白色	70%残
385	須恵器	鉢	22.4	11.4	12.5	23.7	2.5Y7/2 灰黄色	50%残
386	須恵器	壺	5.4				N7/0 灰白色	頸部50%残
387	須恵器	壺	11.2				5Y6/1 灰色	頸部完存
388	須恵器	甕	19.8				N6/B 灰青色	口縁部15%残

付表14 河川1200上層出土土器一覧表

番号	器種	器形	口径	器高	底径	最大径	色調	その他
389	土師器	椀A	11.8	3.7			7.5YR7/4 にぶい橙色	外面ミガキ 50%残
390	土師器	椀C	15.1	4.0			7.5YR7/6 橙色	内面に漆付着 10%残
391	土師器	杯A	17.2	3.4			7.5YR7/3 にぶい橙色	10%残
392	土師器	杯A	17.0	3.7			5YR7/6 橙色	55%残
393	土師器	皿A	16.0	2.2			5YR7/4 にぶい橙色	底部のみケズリ 15%残
394	土師器	皿A	20.8	2.6			2.5Y8/2 灰白色	15%残
395	土師器	鉢B	16.2	8.6			10YR8/2 灰白色	相対する耳無し 60%残
396	土師器	鉢B	15.0				5YR8/2 灰白色	小片
397	土師器	甕	20.8				10YR6/2 灰黄褐色	10%残
398	土師器	甕	23.2				7.5YR5/2 灰褐色	15%残
399	土師器	甕	24.0				7.5YR5/1 褐灰色	相対する2方に耳 15%残
400	須恵器	杯蓋					N6/0 灰色	つまみ径3.0cm つまみ完存
401	須恵器	蓋					N6/0 灰色	つまみ径2.4cm つまみ完存
402	須恵器	杯蓋	14.5				N7/B 灰青色	口縁部25%残
403	須恵器	杯蓋	18.4				5PB5/1 青灰色	30%残
404	須恵器	杯A	10.2	2.9	8.0		N6/0 灰色	35%残
405	須恵器	鉢	12.0				N8/Y 灰白色	口縁部10%残
406	須恵器	壺	4.6			8.1	N7/0 灰白色	50%残
407	須恵器	壺			4.2		N7/0 灰白色	底部完存
408	須恵器	壺			4.7		5PB6/1 青灰色	高台部95%残
409	須恵器	壺			8.2		N6/Y 灰黄色	底部95%残 体部15%残
410	須恵器	壺			11.1		5PB5/1 青灰色	底部完存
411	須恵器	壺			13.4		N7/B 灰青色	底部オサエ 30%残
412	須恵器	甕	21.0				N6/0 灰色	15%残
413	須恵器	甕	(23.0)				N7/0 灰白色	口縁部10%残

版 图



图版割付图

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょうきょうにじょうさんぼうきゅう・じゅうろくちょうあと、かみさといせき
書名	長岡京右京二条三坊九・十六町跡、上里遺跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	2006-4
編著者名	上村和直・南出俊彦・モンペティ恭代・ト田健司・山口 眞
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2006年7月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうきょう 長岡京右京 にじょうさんぼうきゅう・ 二条三町九・ じゅうろくちょうあと、 十六町跡、 かみさといせき 上里遺跡	きょうとしにしきょうく 京都市西京区 おおはらのかみさとみなみ 大原野上里南 のちようちない・ ノ町地内・ ながおかきょうしいの 長岡京市井ノ うちきたうら 内北裏	26100	1047	34度 56分 32秒	135度 41分 23秒	2005年6月 17日～2006 年6月9日	5,478㎡	道路新築 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡	都城跡	弥生時代		壺、高杯、器台	一条大路南側溝および築地相当施設を検出した。 西三坊大路東側区画施設を検出した。 九・十六町の北部地域で掘立柱建物を複数棟検出した。
上里遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居、掘立柱建物、土壙、溝、河川	土師器、須恵器、石製品	
		長岡京期	掘立柱建物、井戸、柵、柱穴列、土壙、溝、河川	土師器、須恵器、製塩土器、黒色土器、瓦、木製品、金属製品	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-4
長岡京右京二条三坊九・十六町跡、上里遺跡

発行日 2006年7月31日

編集行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961